

三重県消防広域化及び連携・協力に 関する推進計画

平成31年（2019年）3月

三 重 県

目 次

第1章 計画の基本的な事項	……	P1
1.1 計画策定の目的		
1.2 計画に定める事項		
第2章 消防の広域化及び連携・協力の経緯等	……	P2
2.1 消防の広域化及び連携・協力の経緯		
2.1.1 国におけるこれまでの経緯		
2.2 全国の実組状況		
2.2.1 広域化の実組状況		
2.2.2 連携・協力の実組状況		
2.2.3 消防の広域化の成果（全国の事例）		
2.2.4 広域化が進まなかった理由と今後の対応		
第3章 消防を取り巻く環境の変化と三重県の消防の現況	……	P11
3.1 消防を取り巻く環境の変化と対応すべき課題		
3.2 三重県の消防の現況		
3.2.1 消防本部の現状		
3.2.2 消防の活動状況		
3.2.3 消防力の状況		
3.3 広域化及び連携・協力の実組の継続の必要性		
第4章 消防力の向上に向けた実組	……	P29
4.1 10年間の振り返り		
4.1.1 消防力カードに基づく消防力の推移		
4.1.2 三重県における広域化及び連携・協力の実組状況		
4.2 10年後の消防体制の姿		
4.3 今後の消防の広域化及び連携・協力の推進について		
4.3.1 消防の連携・協力の推進について		
4.3.2 消防の広域化の推進について		
第5章 消防の広域化及び連携・協力のために必要な措置	……	P39
5.1 広域化及び連携・協力推進のための措置事項		
5.1.1 国の支援措置		
5.1.2 県の支援措置		

第1章 計画の基本的な事項

1.1 計画策定の目的

平成30年4月、消防庁が定める消防の広域化及び連携・協力に関する基本指針の一部改正が行われ、その中で平成18年の消防組織法改正以降の10年以上にわたる取組を振り返った上で、今一度原点に立ち返り、都道府県の消防広域化推進計画を再策定することが求められました。

このため、県では、消防の広域化と広域化につなげる消防の連携・協力にかかる市町の自主的な取組を進めることを目的に、各消防本部の隊数や消防車両等の状況を示した「消防力カード」に基づき、消防力の実情、消防本部の財政、人事管理等の状況など、現状や課題を聞き取りました。

また、地域ごとの広域化及び連携・協力の取組状況をふまえ、中長期的な消防体制の将来像の展望と、展望を見据えた推進期間中の取組について各消防本部と議論を重ね、今後の本県における消防体制の方向性を示した「三重県消防広域化及び連携・協力に関する推進計画」（以下「推進計画」という。）を策定しました。

1.2 計画に定める事項

推進計画では、消防を取り巻く環境の変化、消防の現状と課題、地域ごとの取組の現状等のほか、中長期的な広域化を展望しつつ、国が定める推進期限である5年間の各地域における取組など、次の事項を定めています。

- ①消防の広域化及び連携・協力の経緯等
- ②消防を取り巻く環境の変化と三重県の消防の現況
- ③消防力の向上に向けた取組
 - ・10年間の振り返りと10年後の消防体制の姿
 - ・今後の消防の広域化及び連携・協力の推進について
- ④消防の広域化及び連携・協力のために必要な措置

第2章 消防の広域化及び連携・協力の経緯等

2.1 消防の広域化及び連携・協力の経緯

2.1.1 国におけるこれまでの経緯

1 消防の広域化

(1) 市町村の消防の広域化の必要性

消防は、災害や事故の多様化及び大規模化、都市構造の複雑化、住民ニーズの多様化等の消防を取り巻く環境の変化に的確に対応し、今後とも住民の生命、身体及び財産を守る責務を全うする必要がありますが、小規模な消防本部においては、出動体制、保有する消防車両、専門要員の確保等に限界があることや、組織管理や財政運営面での厳しさが指摘されるなど、全国的に見ると消防の体制としては必ずしも十分でない場合があるとされています。

これらの課題を克服するためには、市町村の消防の広域化により、行財政上の様々なスケールメリットを実現することが極めて有効であるとの考え方から、市町村の自主的な消防の広域化を推進することとされました。

(2) 消防組織法の改正、「市町村の消防の広域化に関する基本指針」の告示

総務省消防庁は、消防の広域化を推進するため、平成18年6月に消防組織法の一部を改正するとともに、同年7月に「市町村の消防の広域化に関する基本指針」（以下「基本指針」という。）を定め、各都道府県は平成19年度中に「消防広域化推進計画」を策定し、その後5年度以内（平成24年度末まで）を目途に広域化を実現することとされました。

なお、基本指針では、広域化の規模は、管轄人口が概ね30万人以上の規模を一つの目標とすることが適当であるとし、地域の実情にかかわらず、全国において同様に推進することとされました。

(3) 「市町村の消防の広域化に関する基本指針」の改正（平成25年4月1日）

基本指針に示された広域化実現の期限である平成24年度末を迎えましたが、全国的には小規模な消防本部が全消防本部の約6割を占めるなど、広域化はまだ十分とは言えず小規模消防本部が抱える課題が克服されていない状況にありました。このことに加え、東日本大震災での教訓や類例をみない大規模災害等の発生、また、今後の災害リスクの高まり、さらに将来の日本の総人口が減少することが予想されていることをふまえると、国、都道府県及び市町村が一体となった消防の広域化の推進による小規模消防本部の体制強化がこれまで以上に必要となることから、平成25年4月1日に基本指針を改正し、広域化の推進期限が平成30年4月1日まで延長されました。

この改正では、第一に、広域化の組合せは管轄人口30万人以上の規模を一つの目標としながらも、この規模目標には必ずしもとらわれず、小規模消防本部の広

域化を着実に進めるという観点から、地域の実情を十分に考慮すること、第二に、広域化の取組を先行して重点的に取り組む必要がある地域に、国、都道府県が集中的に支援することとされました。

(4) 「市町村の消防の広域化に関する基本指針」の改正（平成30年4月1日）

これまでの取組により、全国において一定程度の広域化が実現したものの、小規模な消防本部がまだ多数存在するなか、人口減少社会の到来、少子高齢化の進展等に対応していくために消防力の強化が必要なこと、また、小規模消防本部における消防力整備率は、はしご自動車、化学消防車等について消防本部の規模による顕著な差が見られることなどから、国、都道府県及び市町村が一体となり、消防力の維持・強化に有効な消防の広域化を推進し、小規模消防本部の体制強化を図ることがこれまで以上に必要となっており、喫緊の最重要課題であるとして、平成30年4月1日に再び基本指針を改正し、広域化の推進期限が2024年4月1日まで延長されました。

基本指針改正(H. 30. 4. 1)のポイント

- 各消防本部の隊数や消防車両等の状況を示した「消防力カード」に基づき、市町村が自らの消防本部を取り巻く状況と自らの消防力を分析し、今後のあるべき姿を考えた上で、都道府県が当該分析を生かしつつ、積極的にリーダーシップを取り、都道府県内の消防体制のあり方を再度議論し、県推進計画を再策定する。
- 県推進計画の再策定にあたっては、以下のことに留意し、おおむね10年後までに広域化すべき組合せ（広域化対象市町村）を定めた上で、推進期限までに広域化すべき組合せ（広域化重点地域）を定めるものとする。
 - ① 過去約10年間の広域化の進捗状況等を振り返り、市町村の現況を把握し、広域化の必要性を十分認識した上で、おおむね10年後の消防体制の姿を見通す必要がある。
 - ② 広域化の対象となる市町村に加え、広域化につなげるべく、連携・協力の対象となる市町村についても記載する必要がある。
 - ③ 全県一区での広域化は理想的な消防本部のあり方の一つとも言える。その上で、現状をふまえると管轄人口30万人以上の規模を一つの目標とすることが適当であるが、地域の事情があるため、この規模目標には必ずしもとらわれず、小規模消防本部の広域化を着実に進めるという観点から、地域の実情を十分に考慮する必要がある。
 - ④ 管轄人口10万人未満の小規模消防本部及び消防吏員数が100人以下の準特定消防本部については、可能な限り広域化対象市町村に指定する方向で検討する必要がある。
 - ⑤ 消防吏員数が50人以下の特定小規模消防本部については、原則、広域化対象市町村に指定する方向で検討する必要があること、また、消防広域化重点地域に可能な限り指定することが望ましい。

2 消防の連携・協力

(1) 「市町村の消防の連携・協力に関する基本指針」の通知

消防の広域化は、消防組織法において「2以上の市町村が消防事務を共同して処理すること又は市町村が他の市町村に消防事務を委託すること」と定義されています。この意図するところは、言うまでもなく消防の組織を統合することによる行財政のスケールメリットの発揮です。

その一方で、消防審議会の「消防の広域化及び連携・協力に関する答申（平成29年3月15日）」では、「直ちに広域化を進めることが困難な地域においても必要となる消防力を確保・充実していくため、消防事務の性質に応じて事務の一部について連携・協力を推進することが必要である」との答申がなされました。

これを受けて、消防の広域化を消防体制の整備・確立に向けての有効な手段の一つとして推進していくとともに、消防の広域化にはなお時間を要する地域においても消防力を強化していくため、消防事務の一部について柔軟に連携・協力を行う「消防の連携・協力」を推進することとし、平成29年4月1日に「市町村の消防の連携・協力に関する基本指針」（以下「連携・協力基本指針」という。）を定め、その期限は、2023年4月1日とされました。

消防の連携・協力を実施するにあたっては、地域の災害特性や消防需要の見通し、地形的な状況等について把握分析しながら、関係する消防本部において積極的な検討を実施していくこととし、消防の連携・協力を行おうとするときは、市町村において、協議により「消防の連携・協力の円滑な実施を確保するための計画（連携・協力実施計画）」を作成することが求められています。

(2) 「市町村の消防の連携・協力に関する基本指針」の改正（平成30年4月1日）

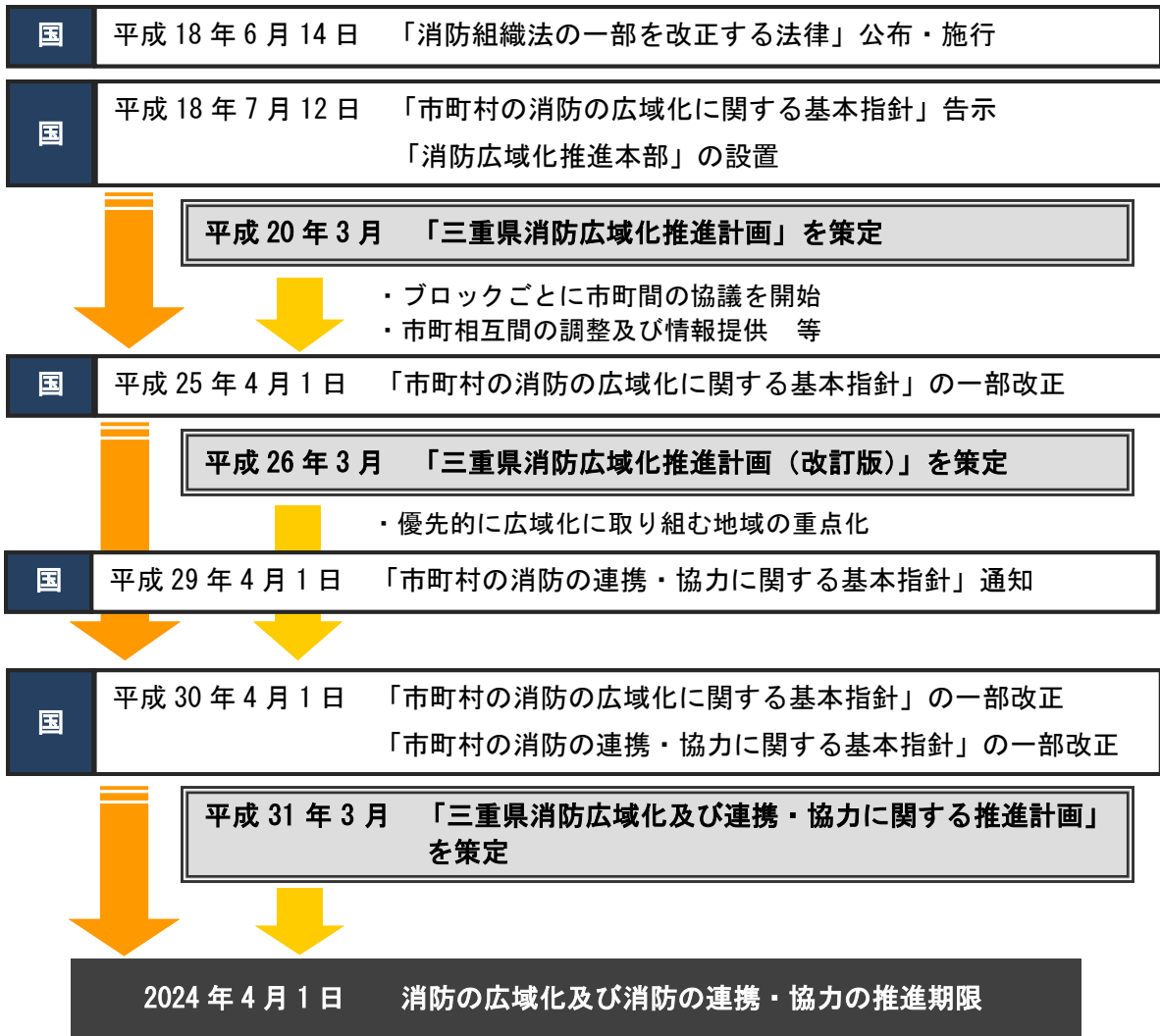
平成30年4月1日の「市町村の消防の広域化に関する基本指針」の改正に伴い、同日付で連携・協力基本指針についても改正が行われ、その中で県においても、高機能消防指令センターの共同運用などの市町村の消防の連携・協力について、広い視野で検討し、県推進計画において対象となる市町村を定めるものとされました。

また、広域化の実現の期限とあわせ、連携・協力の期限についても2024年4月1日まで延長されました。

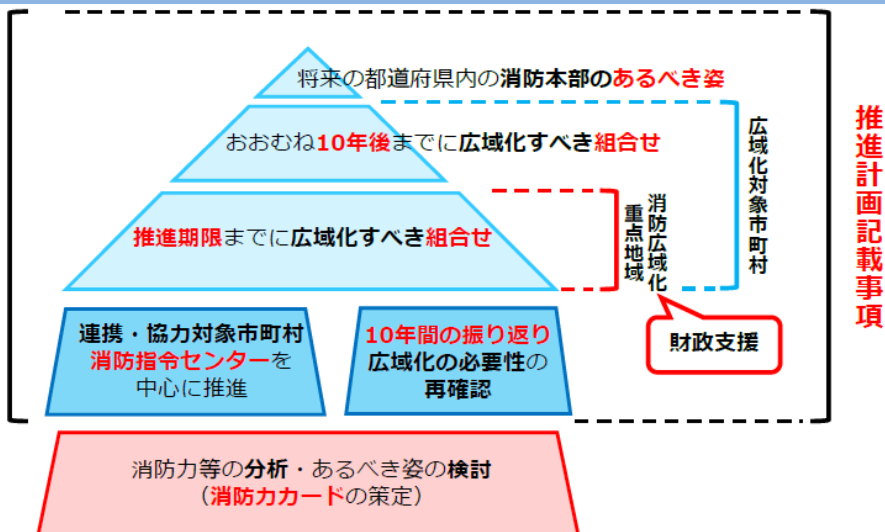
（連携・協力基本指針で示された連携・協力の具体例）

- ① 通信指令業務の共同運用
- ② はしご自動車や特殊災害車両等の出動頻度の高くない車両の共同整備
- ③ 管轄の境界付近における消防署所の共同設置
- ④ 高度・専門的な違反処理や特殊な火災原因調査等の予防業務における
連携・協力
- ⑤ 専門的な人材育成 等

消防の広域化及び連携・協力の経緯と今後のスケジュール



今後の広域化の全体の方向性（基本指針による）



2.2 全国の取組状況

2.2.1 広域化の取組状況

平成18年度当時、全国の811消防本部のうちには管轄人口10万人未満の消防本部が492本部（60.6%）存在しました。

平成18年の消防組織法の一部改正以降、全国の52地域で広域化が実現し、平成30年4月1日までの間に、全国の消防本部数は約1割の83消防本部が減少し、728消防本部となり、消防吏員50人以下の消防本部は73消防本部と約4割減少しましたが、管轄人口10万人未満の小規模消防本部が依然として、59.2%と約6割を占めています。

規模別の消防本部数及び減少数

本部規模	本部数		減少数 (H30←H18)	
	本部数	割合	減少数	減少割合
全消防本部	728	—	▲83	▲10%
うち 管轄人口10万人未満	431	6割	▲61	▲12%
消防吏員100人未満	283	4割	▲85	▲23%
消防吏員50人以下	73	1割	▲46	▲39%

出典：消防庁HP

2.2.2 連携・協力の取組状況

消防の連携・協力について、特に通信指令業務の共同運用については、平成30年4月1日現在で、47の地域・193消防本部において、消防指令センターの共同運用が実現しています。

また、平成29年度から消防庁において具体的な先進事例を積み上げ、より効果的な推進につなげるため、以下のモデル事業が実施されており、②については、平成29年度に鈴鹿市消防本部と亀山市消防本部の間ではしご自動車の共同整備に向けた調査研究が実施されました。

- ① 各種業務における職員の相互派遣を実施した場合のメリット・デメリット、組織統合に対する中長期的影響の調査
- ② はしご自動車等、年間出動件数の少ない車両の共同整備に向けた試算、統合整備による効果の検証
- ③ 他団体の応援体制及び自団体の応援実施中の消防力確保のあり方の検証
- ④ 車両の共同運用をはじめとする消防応援協定のあり方に関する調査研究

2.2.3 消防の広域化の成果（全国の事例）

実際、消防の広域化及び連携・協力を実現した全国の消防本部では、以下のとおり具体的なメリットが発揮されています。

（1）住民サービスの向上

①火災初動対応（第一出動）時の出動車両数等の充実

- ・奈良県広域消防組合：3～6台 → 6～7台
- ・宇部・山陽小野田消防局：5台 → 7台
- ・小田原市消防本部：6台 → 10台

②大規模災害時の対応

- ・熊本市消防局の広域化により平成28年4月の熊本地震時、益城町、西原村地域において、初回通報から1時間以内に消防車両24台、活動人員82人の大規模な消防力で対応することができた。

（広域化前の場合、4台12人＋非番招集で対応）

- ・とちぎ広域消防局の広域化により市町の境界を越える出動が可能になり、平成28年8月、台風10号による土砂災害時、芽室町に帯広消防署からボート艇と隊員13人を投入できた。また、清水町には本部員26人＋帯広消防署員4人＋幕別消防署員2人を投入できた。

③救急出動時における現場到着時間（覚知～現場到着）の短縮

- ・弘前地区消防事務組合：弘前市種市 ▲13分39秒
- ・小田原市消防本部：小田原市小竹 ▲4分51秒
- ・草加八潮消防局：草加市 ▲1分00秒～▲2分36秒

（2）人員配備の効率化と充実

①現場への手厚い人員体制が可能に

- ・奈良県広域消防組合：210人の人員を現場へ配置転換
本部要員▲156人（276→120人）、通信指令要員▲54人（94→40人）

②予防業務の充実による火災の未然防止強化

- ・富良野広域連合消防本部：予防担当者を専任化
- ・東近江行政組合消防本部：5消防署全てに予防査察担当者を専任配置
（3～4名体制）

③非番招集の減少による働き方改革

- ・埼玉東部消防組合消防局：広域化後は火災における非番招集を原則廃止

(3) 消防体制の基盤の強化

①高機能消防指令センターの整備

- ・ 共同整備を行った 19 本部の平均整備費 ▲49.8%
 - ・ 北はりま消防本部：整備費が半減（11.4 億円→5.8 億円）
 - ・ ちば消防共同指令センター：整備費が4割減（91 億円→58 億円）
- ・ 沖縄県では、指令人員体制が従前の3分の1に（現状29人体制）
整備費に比例するとされる毎年のシステム維持費も減少
→ 捻出した経費や人員を、設備の高度化や充実、現場要員充実に

②人事ローテーションによる組織の活性化

- ・ 埼玉東部消防組合消防局：広域化により異動先が増えたことで組織が活性化した。

③派遣研修の充実により消防職員の人材力が向上

- ・ 宇部・山陽小野田消防局：広域化により人員確保が容易になり消防大学校及び県消防学校への職員の派遣が可能となった。

出典：消防庁資料

2.2.4 広域化が進まなかった理由と今後の対応

平成28年5月23日、消防庁長官から消防審議会に対し「人口減少や災害の多様化等社会環境の変化に対応し、必要となる消防力を維持していくための消防体制のあり方等」について諮問があり、平成29年3月15日、消防審議会は、「消防の広域化及び連携・協力に関する答申」を取りまとめました。

この答申では、全国的に広域化が進まない主な理由として、以下の理由が挙げられています。答申では、こうした課題への対応策を示すとともに、消防は、複雑・多様化する災害に適切に対応し、将来にわたって持続可能な消防体制を整備・確立していく必要があるとしています。また、体制の整備・確立については、有効な方策である消防の広域化をより積極的に進めていく必要があるとしている一方で、広域化のための組織統合に向けた調整が困難である等、直ちに広域化を進めることが困難な地域においては、消防事務の性質に応じて事務の一部について連携・協力を推進することにより、消防力の強化に効果を生み出していくことが可能であるとしています。

広域化が進まなかった理由

- ① 地理的理由により広域化のメリットが得られない。既に合併、組合消防、事務委託しているので広域化は必要ないと考えており、広域化の協議に至らない。
- ② 小規模本部では、広域化により周辺地域となり消防力が低下することや負担金が増加することを懸念している。
- ③ 大規模本部では、現在の規模が適当・十分と考えており、広域化による消防力の流出を懸念している。
- ④ 広域化によって署所が削減される、地元と消防の結びつきが弱まる、防災部局や消防団との連携が困難になるといった懸念がある。
- ⑤ 人件費の調整が難航したり、施設整備の時期が不一致であることにより広域化の協議が進まない。

出典：消防審議会「消防の広域化及び連携・協力に関する答申」

3.1 消防を取り巻く環境の変化と対応すべき課題

1 大規模災害等への対応

東日本大震災から8年が経過し、震災の教訓をふまえた様々な災害対応力の強化がなされてきていますが、東日本大震災以降も熊本地震や平成30年7月豪雨など自然災害が多発しており、新たな課題への対応が必要となっています。

また、平成28年12月には昭和51年の酒田の大火以来40年ぶりとなる大規模な火災が糸魚川市の木造の建築物が密集した地域において発生し、本県でも平成30年1月に発生した伊勢市のアーケード火災、名張市の工場火災では、県内相互応援協定に基づき、近隣消防本部から部隊の派遣が行われました。

さらに、今後発生することが予想されている南海トラフ地震や首都直下地震では、東日本大震災を上回る被害の発生が懸念されています。

このような複雑・多様化する災害等をふまえ、さらなる消防体制の強化や安全対策の推進などに取り組む必要があります。

単独の市町では対応できないような大規模・特殊災害等においては、他の市町、県及び自衛隊等の関係機関と協力しつつ、広域的な対応体制を確保することが必要となります。また、体制の整備については、①合理的に人員を配置した警防活動体制及び現場指揮体制の整備、②高度で専門的な知識・経験を有する予防要員の確保、③救急業務の高度化・専門化に的確に対応した救急体制の整備等を図ることが必要となってきています。

2 人口減少、少子高齢化への対応

本県の将来推計人口は、2045年には143万1千人となり、平成27年の国勢調査による181万6千人と比べ38万5千人、21.2%の減少となります。

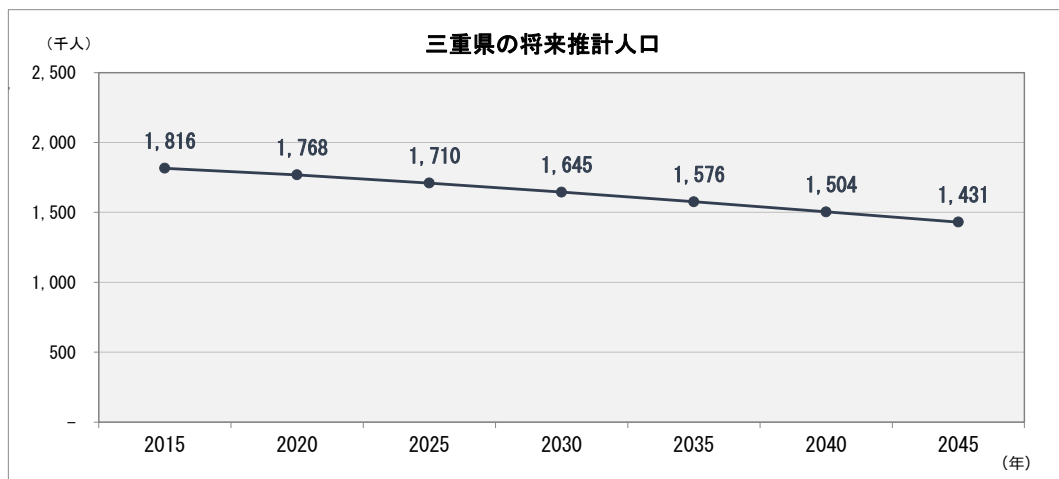
年齢階層別で見ると、年少人口(0～14歳)の構成比率は、平成27年の12.9%が、30年後の2045年には10.9%へと2.0ポイント減少する一方で、老年人口(65歳以上)の構成比率は、平成27年の27.9%が、30年後の2045年には38.3%へと10.4ポイント増加するという推計が出されており、人口減少とあわせて少子高齢化が一層進展するものと予測されます。

人口減少により、各消防本部の管轄人口も減少すると考えられることから、今後、各消防本部においては、管轄人口に応じて小規模化が進むことが懸念され、常備消防とともに地域の消防を担っている消防団の団員確保にも大きな支障が生じることが懸念されます。また、人口減少により低密度化が進展するものの、消防活動として必要な署所等の数に大きな変化はないと考えられ、即応体制の確保など消防力の維持に困難が伴う可能性も高くなります。

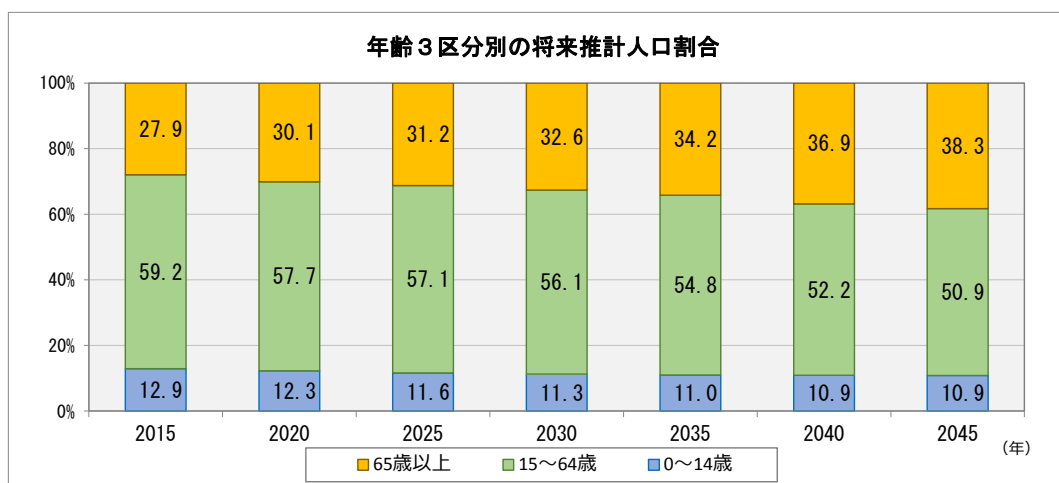
さらに、高齢者、特に高齢者独居世帯の増加に伴い、避難行動要支援者の数が増加していくことが想定され、消防防災活動における対応力の強化が求められることとなります。また、急病等の救急需要の増加傾向は今後も続くことが予想され、

救急業務の重要性が増している消防行政にとっては大変懸念される状況にあるとともに、生産年齢人口の減少に伴い市町財政が一層厳しさを増すことが予想される中で、行財政改革の推進などにより財政面での制約もさらに厳しくなることが見込まれます。

このような人口動態等による影響は消防本部の規模が小さいほど深刻であると考えられ、小規模消防本部の体制強化が必要となっています。



出典：国立社会保障・人口問題研究所 将来推計人口



出典：国立社会保障・人口問題研究所 将来推計人口

3 新たな社会資本整備への対応

県内では、新名神高速道路等の整備が進んでいますが、高速道路やトンネル内での事故等については、一般道路での事故に比べ多くの車両が巻き込まれ、大規模な事故となる可能性が極めて高いと予想されます。

また、高速道路のインターチェンジ周辺は大型施設の建設等によって都市構造が変化することも予想され、交通事故の発生、救急需要の増加、複数箇所での火災、災害発生等に対応できる消防体制が必要となってきます。

4 女性消防吏員の活躍推進への対応

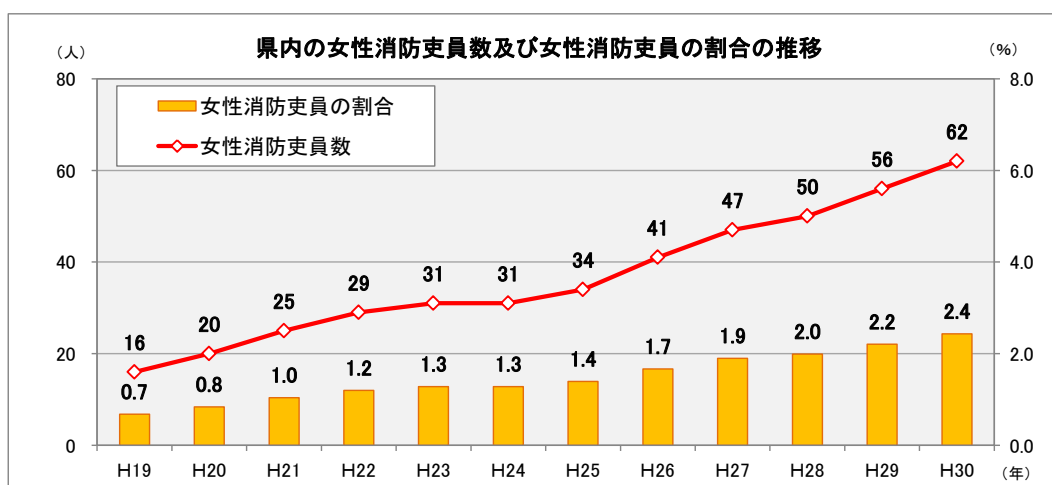
国を挙げて女性の活躍推進が取り組まれています。全国的に消防本部における女性消防吏員の割合は、平成30年4月現在で2.7%と、他の救助機関である警察、自衛隊、海上保安庁と比較して最も低水準にあります。

消防庁では、平成27年3月に「消防本部における女性職員の更なる活躍に向けた検討会」を開催し、検討会の提言内容をふまえ、「消防本部における女性消防吏員の更なる活躍に向けた取組の推進について」（平成27年7月29日付け消防消第149号消防庁次長通知）を発出し、消防分野においても、より多くの女性が参画、活躍することで、住民サービスの向上や消防組織の活性化、組織力の強化、士気の向上が図られるとして、消防全体として、消防吏員に占める女性消防吏員の全国の比率を、2026年度当初までに5%に引き上げることを共通目標とすることが示されました。

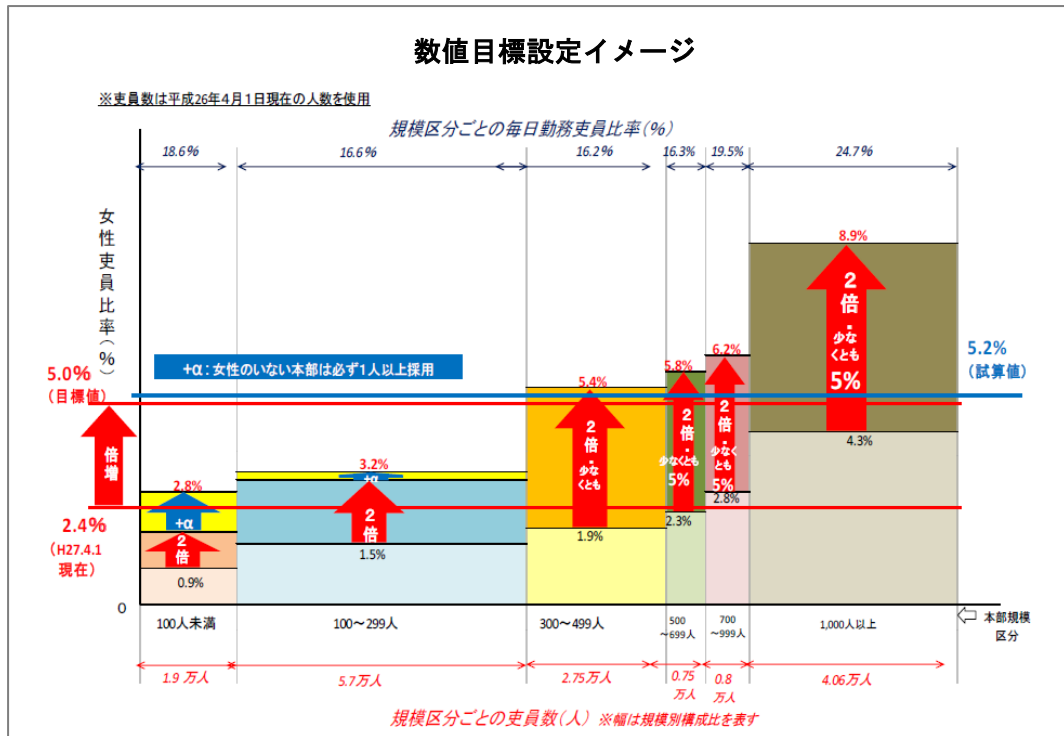
県内では、12消防本部において、女性消防吏員が在籍していますが、女性消防吏員の割合は、平成30年4月現在で2.4%と、全国平均の2.7%を下回っている状況です。こうした中、平成30年度には、4消防本部において初めて女性消防吏員が採用されるなど、年々、女性消防吏員は増加しています。

各消防本部では、消防本部の実情に応じながら、市町部局が開催する職員採用説明会、消防庁が主催する女子学生等を対象とした職業説明会（ワンデイ・インターンシップ）、民間主催の職業説明会などに参加し、多くの女性に職業選択するうえで、消防を選択肢の一つに含めてもらえるよう積極的なPR活動に取り組んでいます。また、消防庁舎の女性専用施設の計画的な整備や、消防庁の女性消防吏員活躍推進アドバイザーを招いての研修など、女性消防吏員が働きやすい職場環境づくり等に努めているところです。

このように、各消防本部においては、女性消防吏員の計画的な増員や女性消防吏員の職域拡大の推進、ライフステージに応じた様々な配慮、施設・装備の改善など、今後、継続してソフト・ハード両面からの具体的な取組の推進が必要となってきました。



出典：平成19年～30年度消防防災・震災対策現況調査



出典：消防庁資料

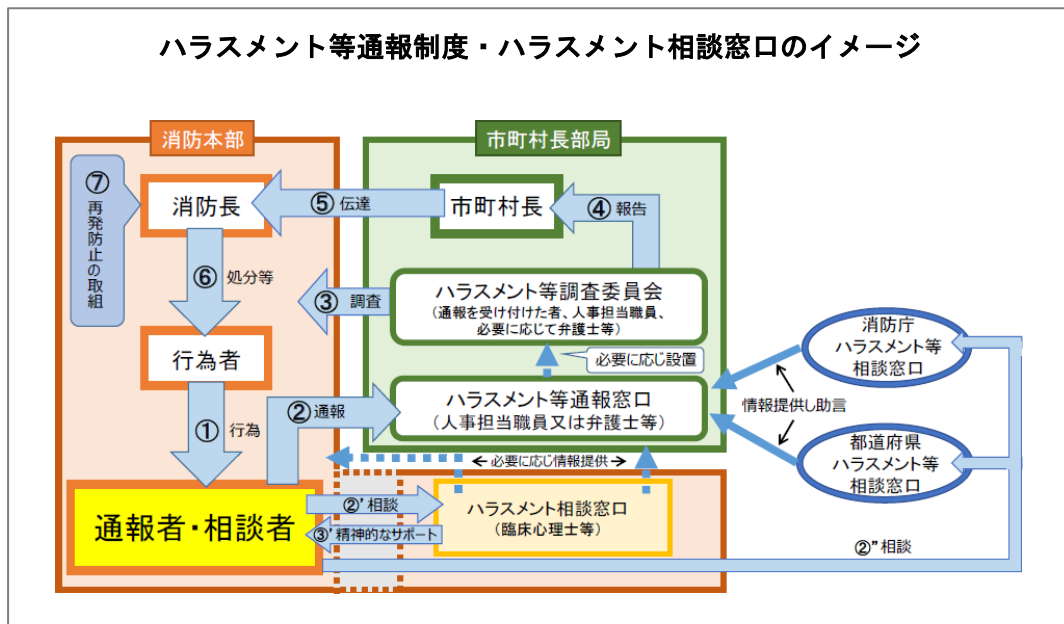
5 ハラスメント等への対応

ハラスメントや不祥事は、国民・住民の信頼を著しく損ねるものであるだけでなく、消防職員の士気の低下や職場環境の悪化により、住民サービスとしての消防力の低下にもつながりかねません。

消防庁では、パワーハラスメント、セクシュアルハラスメントなどのハラスメントやその他不祥事等（以下「ハラスメント等」という。）について、実態を調査し、各消防本部において講じる対策のあり方について検討するため、平成 29 年 2 月に「消防本部におけるハラスメント等への対応策に関するワーキンググループ」が開催され、同年 7 月 4 日に検討結果となる対応策が取りまとめられました。また、その検討結果をふまえ「消防本部におけるハラスメント等への対応策に関するワーキンググループの検討結果について」（平成 29 年 7 月 4 日付け消防消第 171 号消防庁次長通知。以下「消防庁通知」という。）が発出され、この消防庁通知では、各消防本部に対し、ハラスメント等を撲滅するため、消防長の宣言、ハラスメント等の対応策に関する内部規程の策定、ハラスメント等通報制度の確立及びハラスメント相談窓口の設置等が求められています。

県では、この消防庁通知を受けて、平成 29 年 7 月に県におけるハラスメント等相談窓口を消防・保安課に設置し、各消防本部を通じてそれぞれの所属職員に対して周知を行っています。また、県内の各消防本部では、ハラスメント等の撲滅に向けた取組が進められており、三重県消防長会では、消防長及び人事担当者を対象にした研修会が開催され、職員の意識向上にも取り組まれています。

しかしながら、消防庁において平成 29 年度に実施された「消防本部におけるハラスメント等への対応策取組実態調査（平成 29 年 11 月 1 日現在）」によると、消防庁から示されている項目について、県内消防本部では未実施の項目も見られることから、今後も引き続き着実な取組の推進を図り、ハラスメント等の撲滅に向けた体制の構築が必要となってきています。



出典：消防庁資料

3.2 三重県の消防の現況

3.2.1 消防本部の現状

県内には、15の消防本部があり、その内訳は、市町の単独設置7本部、事務委託方式4本部、一部事務組合方式4本部となっています。

県全体の面積は約5,774.41 km²で、消防本部によって管轄面積は約100 km²から700 km²超までと様々であり、一消防本部あたりの平均管轄面積は約385 km²となります。全国の一消防本部あたりの平均管轄面積は約509 km²であることから、平均管轄面積は全国と比べると小さい状況にあります。

一方、県全体の人口は1,815,865人（平成27年国勢調査）で、一消防本部あたりの平均管轄人口は約12.1万人です。全国の一消防本部あたりの平均管轄人口は17.5万人であり、全国を下回っています。県内15消防本部のうち、30万人以上の規模を有するのは四日市市消防本部のみで、人口10万人以上30万人未満は5消防本部、10万人未満の小規模消防本部は9消防本部となっており、小規模な消防本部が比較的多い状況にあります。

消防吏員数は、県全体が2,546人（平成30年4月1日現在）で、消防吏員数が100人以下の消防本部は5消防本部あり、そのうち特定小規模消防本部（消防吏員数が50人以下）が1消防本部、準特定小規模消防本部（消防吏員数が100人以下）が4消防本部あります。

県内15消防本部の概況

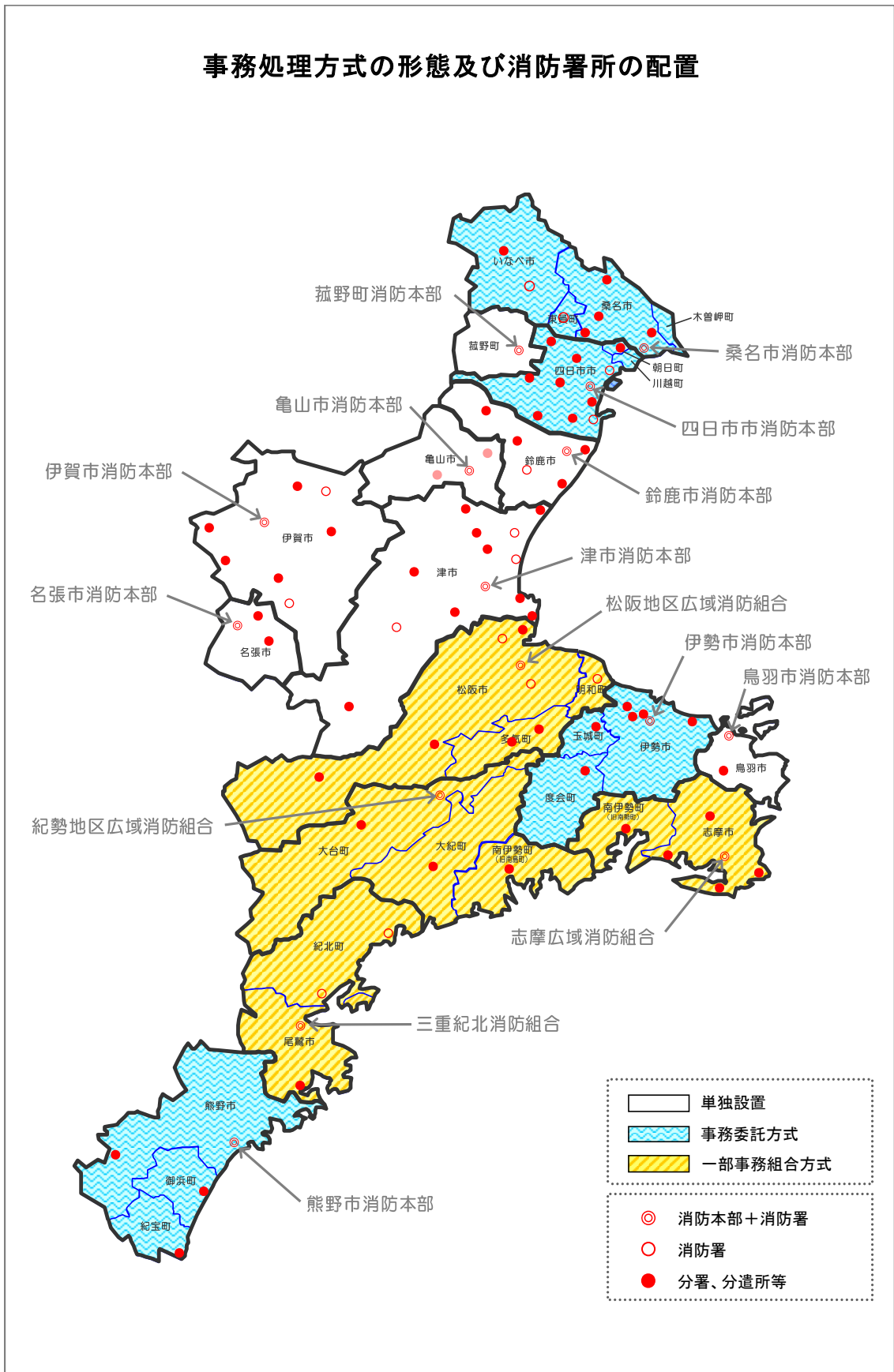
（平成30年4月1日現在）

消防本部名	消防吏員数 (人)	うち女性 吏員数 (人)	消防署	分署 及び 出張所	H27国調 管轄人口 (人)	管轄 面積 (km ²)	管轄市町名	事務処理 方式
桑名市消防本部	251	6	3	5	217,819	394.93	◎桑名市、いなべ市、 木曾岬町、東員町	事務委託
四日市市消防本部	358	15	3	8	336,343	221.16	◎四日市市、川越町、朝日町	事務委託
菰野町消防本部	52	0	1	0	40,210	107.01	菰野町	単独設置
鈴鹿市消防本部	203	4	2	4	196,403	194.46	鈴鹿市	単独設置
亀山市消防本部	85	1	1	2	50,254	191.04	亀山市	単独設置
津市消防本部	362	13	4	9	279,886	711.19	津市	単独設置
伊賀市消防本部	177	5	3	5	90,581	558.23	伊賀市	単独設置
名張市消防本部	117	1	1	2	78,795	129.77	名張市	単独設置
伊勢市消防本部	200	7	1	6	151,557	384.24	◎伊勢市、玉城町、度会町	事務委託
鳥羽市消防本部	45	0	1	1	19,448	107.34	鳥羽市	単独設置
志摩広域消防組合	141	3	1	5	57,837	287.80	志摩市、南伊勢町（ただし、旧南 勢町の区域に限る）	事務組合
松阪地区広域消防組合	278	5	4	5	201,327	767.68	松阪市、多気町、明和町	事務組合
紀勢地区広域消防組合	92	1	1	3	23,788	729.22	大台町、南伊勢町（ただし、旧南 島町の区域に限る）、大紀町	事務組合
三重紀北消防組合	105	1	3	1	34,347	449.24	尾鷲市、紀北町	事務組合
熊野市消防本部	80	0	1	3	37,270	541.10	◎熊野市、御浜町、紀宝町	事務委託
合 計	2,546	62	30	59	1,815,865	5,774.41	29市町	

※ 管轄市町名の「◎」は事務受託市

出典：平成30年度消防防災・震災対策現況調査

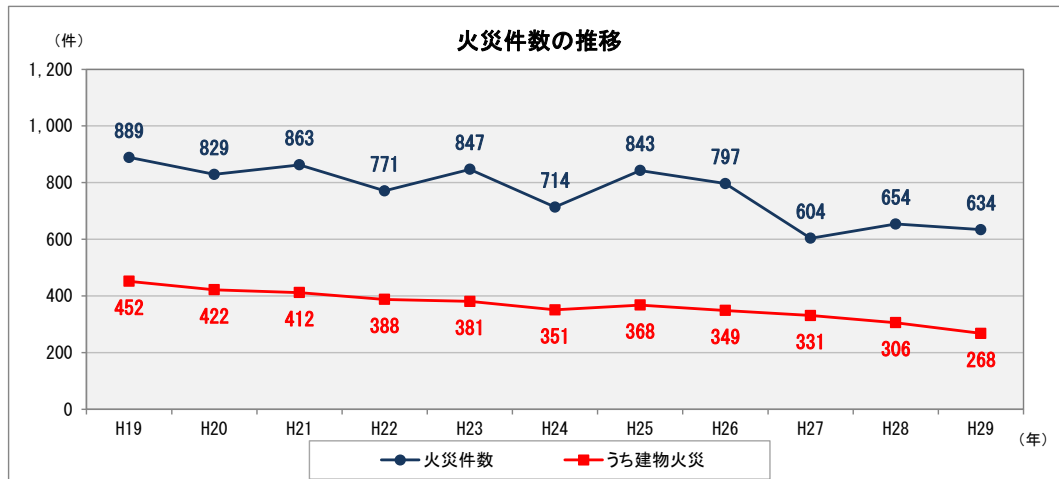
事務処理方式の形態及び消防署所の配置



3.2.2 消防の活動状況

(1) 火災出動の状況

県内の平成 19 年から平成 29 年までの火災件数の推移は、年によって若干の変動はあるものの、ゆるやかな減少傾向となっています。そのうち火災全体の 4～5 割程度を占めている建物火災件数については、一般住宅の火災が減少しており、全体の件数自体は減少傾向にあります。

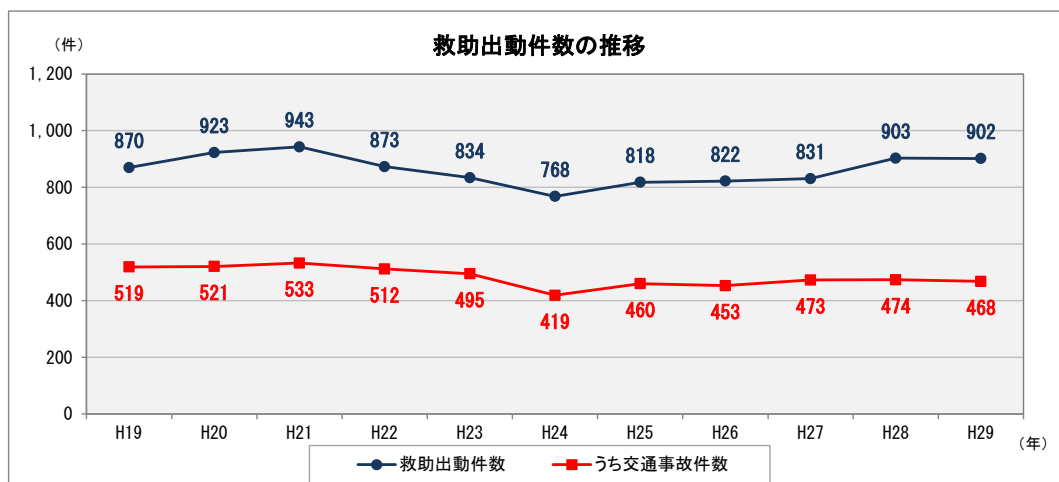


出典：平成 19～29 年火災報告

(2) 救助活動の状況

消防機関の行う救助業務は、昭和 61 年 4 月の消防法改正により、救助隊が法的に位置づけられ、対象とする事案は、火災、交通事故、水難事故、自然災害から特殊災害まで広範囲に及んでいます。

県内には 14 消防本部に 20 の救助隊が配置されており、毎年 800～900 件の救助出動が行われています。救助出動件数のうちでは、交通事故によるものが最も多く、全体の 5 割程度を占めています。



出典：平成 19～29 年救急・救助の現況

救助隊の現状

平成30年4月1日現在

消防本部名	救助隊	救助隊の種類	
		特別救助隊	高度救助隊
桑名市消防本部	2	0	0
四日市市消防本部	3	2	1
菰野町消防本部	1	0	0
鈴鹿市消防本部	1	1	0
亀山市消防本部	1	0	0
津市消防本部	2	1	1
伊賀市消防本部	1	0	0
名張市消防本部	1	0	0
伊勢市消防本部	1	1	0
鳥羽市消防本部	1	0	0
志摩広域消防組合	1	0	0
松阪地区広域消防組合	3	1	0
紀勢地区広域消防組合	1	0	0
三重紀北消防組合	1	0	0
熊野市消防本部	0	0	0
計	20	6	2

出典：消防力カード

- ※特別救助隊 … 救助隊の一般的な装備に加え、マット型空気ジャッキや陽圧式化学防護服などの特別な装備並びに救助工作車を有し、人命の救助に関する専門的な教育を受けた隊員で編成された救助隊
- ※高度救助隊 … 特別救助隊の装備に加え、画像探索機、熱画像直視装置、地震警報器などの高度な装備及び当該装備を積載できる救助工作車を有し、人命の救助に関する専門的かつ高度な教育を受けた隊員で編成された救助隊

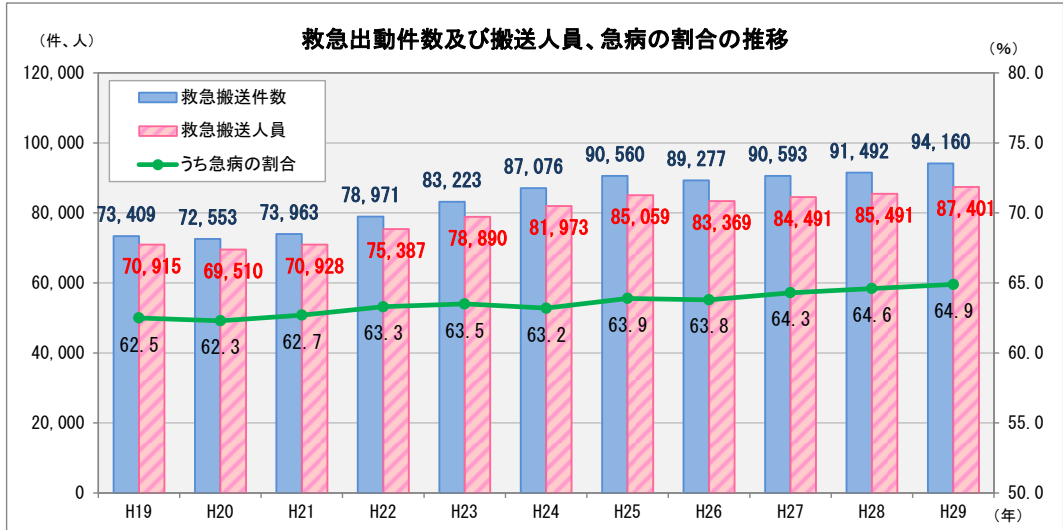
(3) 救急活動の状況

消防機関が行う救急業務は昭和 38 年に法制化され、平成 3 年には、救急現場や搬送途上における応急処置の充実による傷病者の救命率の向上を図るために救急救命士の制度が導入され、より高度な観察及び応急処置を行うことができるようになりました。

また、近年、救急現場や搬送途上における応急処置の充実、いわゆる病院前救護の質の向上が求められており、救急救命士が行うことのできる応急処置の範囲が、心肺機能停止傷病者に対する除細動をはじめ、気管挿管、薬剤投与等、年々拡大されてきており、各消防本部は救急救命士の養成を推進し、救急体制の充実に努めてきています。

しかしながら、高齢者人口の増加や核家族化の進展などの社会構造の変化に伴って救急需要が年々増加の一途をたどっており、県内の救急出動件数は平成 19 年から平成 29 年にかけて 28.3%の増加となっています。救急出動のうち急病の割合も年々増加傾向にあり、平成 29 年においては全体の約 65%を占めています。

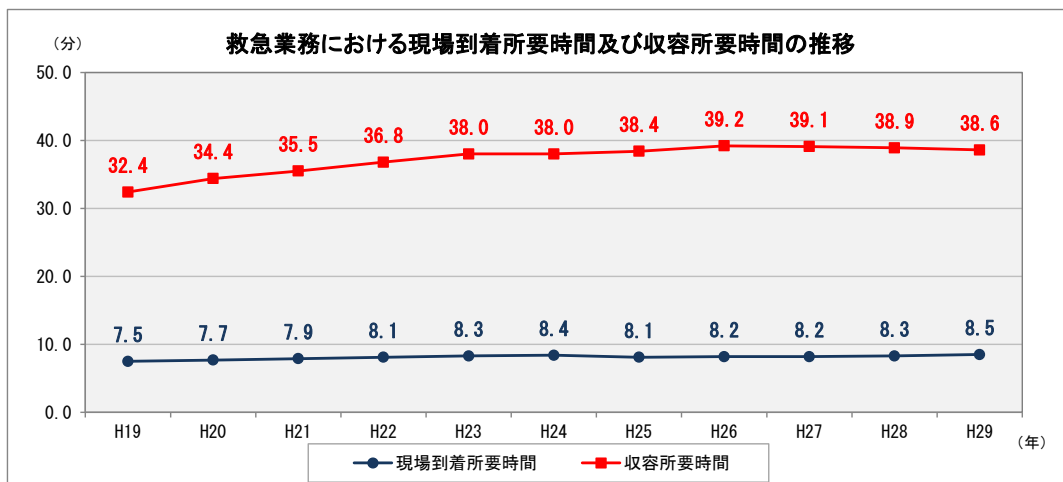
これを消防本部ごとに見ると、すべての消防本部で増加傾向となっており、高齢化の進展に伴い、救急搬送件数は今後も増加することが見込まれます。



出典：平成 19～29 年救急・救助の現況

また、救急活動における現場到着所要時間は延伸傾向にあり、収容所要時間（119 番の覚知から病院収容までの時間）は、ここ数年、わずかに短縮しているものの、県平均で平成 29 年には平成 19 年と比べ約 6 分延伸しています。消防本部ごとに見ても、現場到着所要時間及び収容所要時間ともに長くなっており、特に、収容所要時間については、3 消防本部で 10 分以上長くなっています。

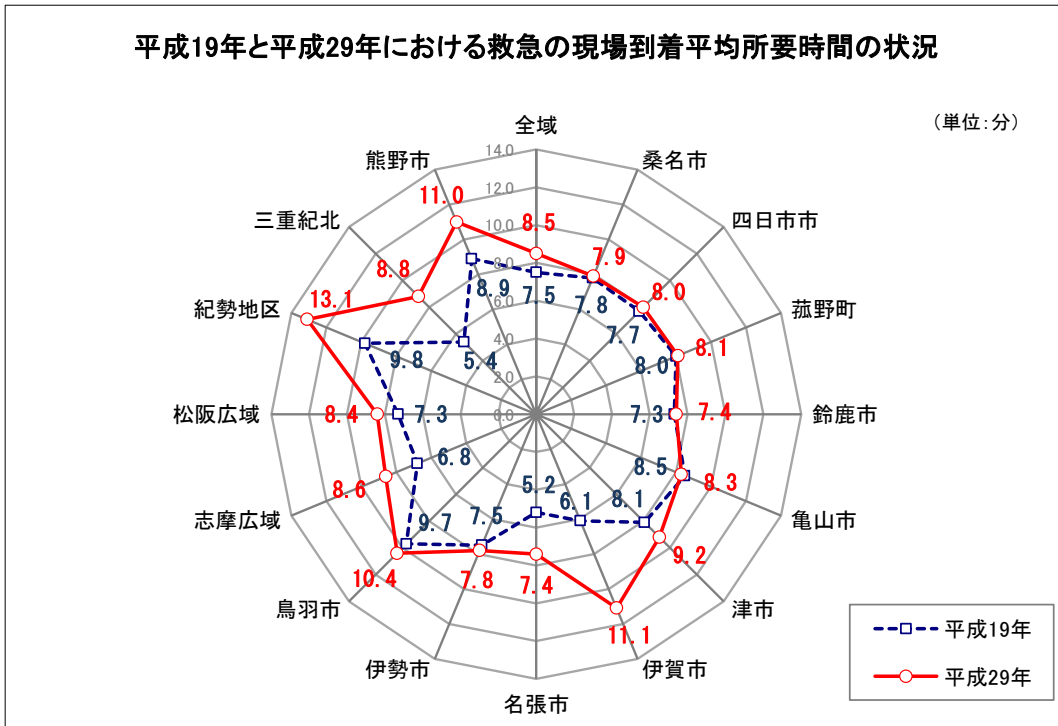
ここ 10 年間ににおける救急出動件数の 28.3% の増加に対して、救急隊数はこの 10 年間で 6.1% の増（平成 19 年 4 月 1 日現在 99 隊、平成 29 年 4 月 1 日現在 105 隊）にとどまっており、このような救急業務における需給ギャップの拡大が収容所要時間等の活動時間に影響を及ぼしていることも考えられます。



出典：平成 19～29 年救急年報報告

平成19年と平成29年における救急の現場到着平均所要時間の状況

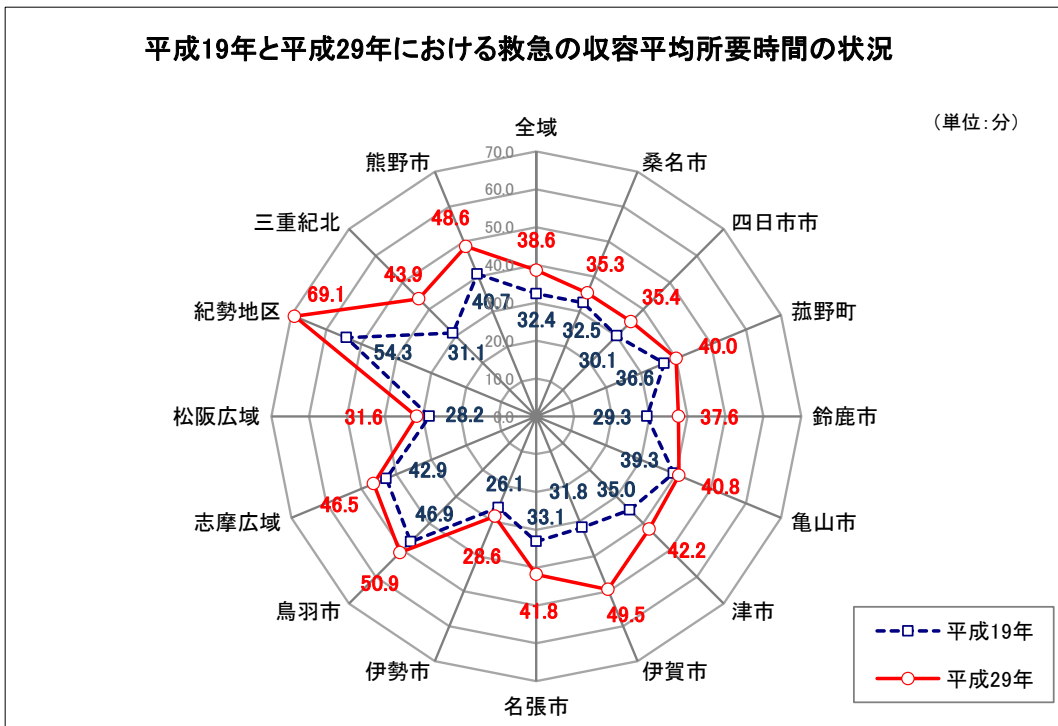
(単位:分)



出典：平成19年、平成29年救急年報報告

平成19年と平成29年における救急の収容平均所要時間の状況

(単位:分)



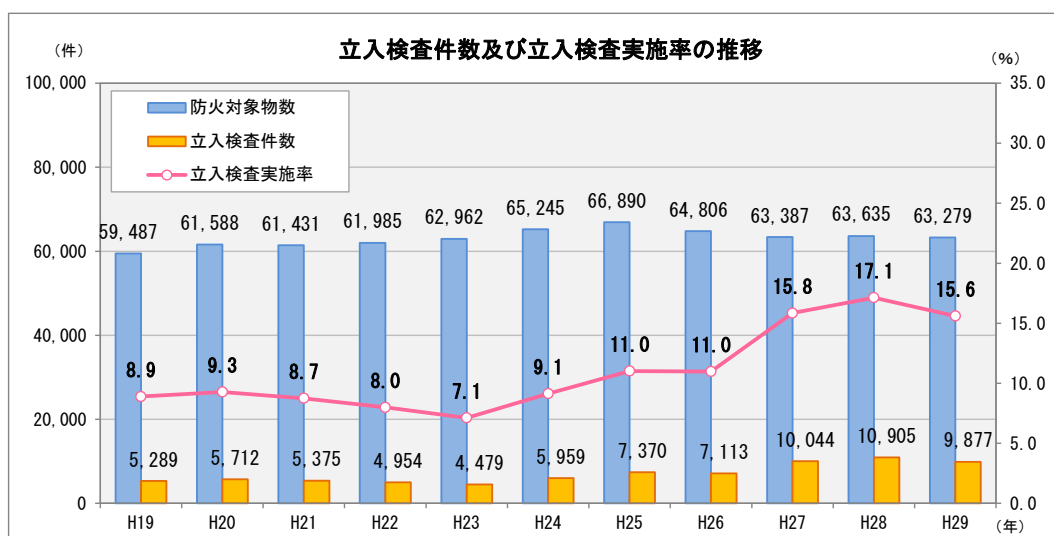
出典：平成19年、平成29年救急年報報告

(4) 予防行政の状況

火災予防運動等を通じ、住宅用火災警報器や住宅用消火器等の住宅用防災機器及び防災品の普及、たばこ火災に係る注意喚起広報等の住宅火災対策を推進してきていますが、全国の状況を見ると近年、ホテル火災や比較的小規模な福祉施設において、多数の人的被害を伴う火災、大規模な市街地火災や倉庫火災が発生しています。

また、県内の防火対象物への立入検査件数の推移を見ると、近年は立入検査実施率は増加傾向にあります。(平成28年の伊勢志摩サミットの緊急調査が影響しています)。これを消防本部の規模別で見ると、消防吏員300人以上の大規模な消防本部に比べて、それより規模の小さい消防本部の立入検査実施率が低くなっています。

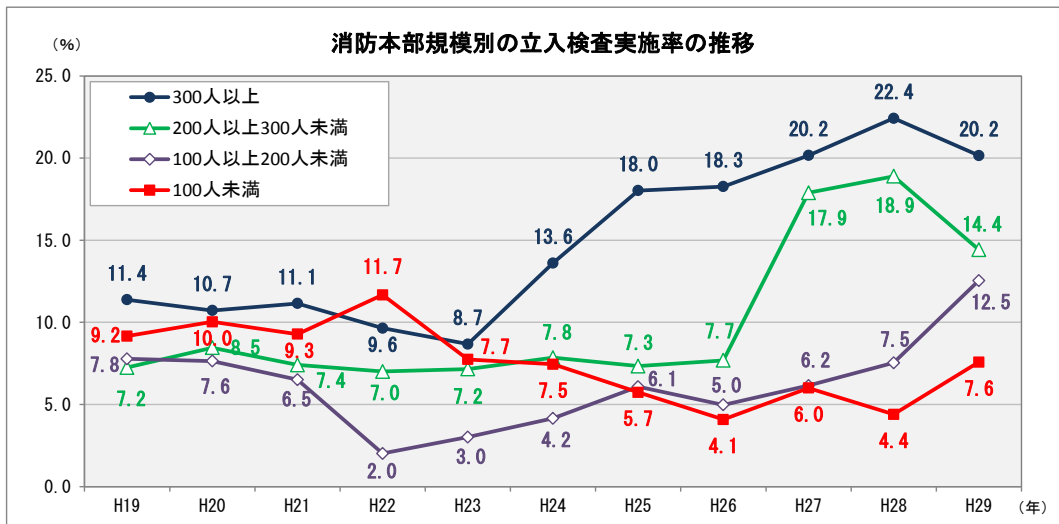
特に、消防吏員が100人未満の小規模な消防本部においては、平成29年度では7.6%となっており、県平均の15.6%を下回っています。



出典：平成19～29年防火対象物実態調査

※防火対象物

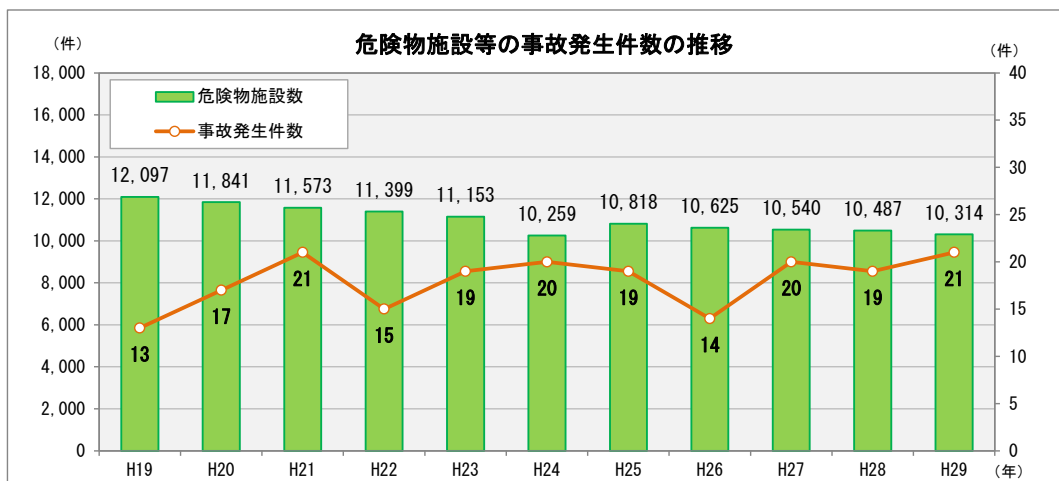
消防法では、建築物など火災予防行政の主たる対象となるものを「防火対象物」と定義し、そのうち政令で定められた防火対象物については、その用途や規模に応じて、火災予防のための人的体制の整備や消防用設備等の設置、防災物品の使用などを義務づけています。



出典：平成 19～29 年防火対象物実態調査

危険物施設は毎年減少傾向にあります。危険物施設における事故発生件数は、施設の老朽化の課題等もあり、むしろ増加傾向にあります。

危険物施設においては、許認可審査や完成検査の実施とともに、立入検査等を通じて危険物の取扱者に安全管理指導を行うなど、保安の確保に努めてきていますが、限られた人員と時間の中でいかに効率的かつ効果的に立入検査等を行っていくかが課題となっています。



出典：平成 19～29 年消防防災年報

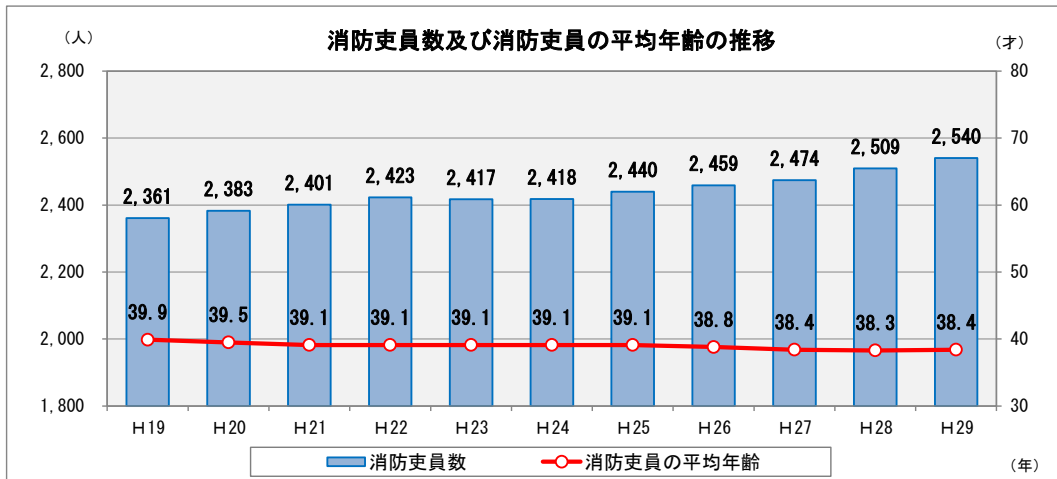
※危険物施設

ガソリンスタンドや地下タンク等、消防法で定められている「危険物」（ガソリン・灯油等）を一定の数量以上貯蔵し又は取り扱う施設をいいます。

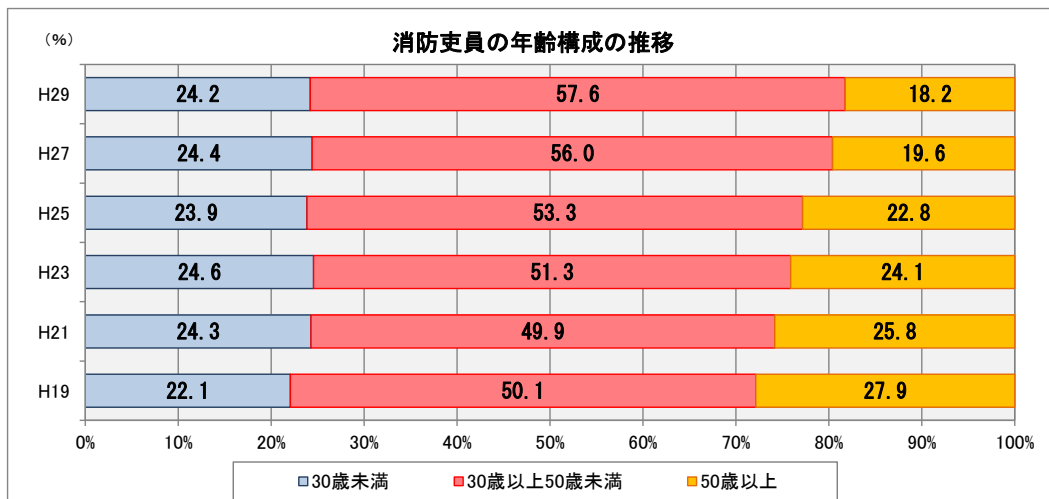
3.2.3 消防力の状況

(1) 消防吏員の状況

消防吏員数については、平成29年度までの10年間で179人、7.6%増加し、30歳未満と30歳以上50歳未満の割合が増える一方、50歳以上の割合は9.7ポイント減少しています。また、平均年齢は1.5歳下がっており、世代交代が進んでいます。



出典：平成19～29年度消防防災・震災対策現況調査



出典：平成19～29年度消防防災・震災対策現況調査

(2) 消防力の充足状況

消防ポンプ自動車及び救急自動車は、すべての消防本部が保有しており、「消防力の整備指針」（平成12年消防庁告示第1号）の基準に対する充足率はおおむね100%であり、全体的に充実した状況にあります。

一方、特殊自動車については、はしご自動車は、14消防本部が配置を要することとされていますが、そのうち11消防本部で充足率が100%である一方、3消防本部は未配置となっており、実際に必要となった場合には他の消防本部からの応援に頼らざるを得ない状況となっています。

また、化学消防車は、14消防本部が配置を必要とされており、そのうち11消防本部の充足率が100%となっていますが、残る3消防本部が配置しているものの、基準を満たしていません。

さらに、救助工作車は、14消防本部が配置を必要とされており、1消防本部が未配置となっています。

消火栓や防火水槽などの消防水利については、消防本部により充足率にかなりのばらつきが見られます。90%以上保有する消防本部が5消防本部、80%以上～90%未満が3消防本部ある一方で、40%程度が1消防本部となっています。

消防力の整備は年々推進されているものの、今後ますます複雑・多様化することが予想される事故や災害に対処し、消防の責務を果たすためには、なお一層消防力の整備を推進することが必要です。現下の厳しい財政状況のもとにあっては、従来にも増して効率的な消防施設の整備・充実を進めていくことが望まれています。

一方で、消防施設整備に対する国庫補助金については、一般財源化により耐震性貯水槽等の消防防災施設整備費補助金及び緊急消防援助隊設備整備費補助金に限定されていることから、例えば消防ポンプ自動車や救急自動車等の消防車両については、緊急消防援助隊用の災害対応特殊車両に限り補助対象となっています。

このため、はしご自動車や化学消防車などの出動頻度の高くない車両については、一定の圏域内で共同整備することで、財政面の効率化や複雑・多様化する災害への対応能力の向上が期待できます。また、消防水利の充足率は、消防本部間でばらつきがあることから、広域的な相互応援により、消防力を相互に補完し合い、引き続き取り組んでいく必要があります。

なお、消防職員数の充足率（76.3%）については、100%に満たない状況ですが、各消防本部において増員に努めていただいていることから、年々増加しており、また、全国との比較においては、全国平均（77.4%）とほぼ同程度となっています。

消防力の基準充足率の状況

消防本部名	消防ポンプ自動車			はしご自動車			化学消防車			救急自動車			救助工作車			消防職員数			消防水利		
	基準	現有	充足率	基準	現有	充足率	基準	現有	充足率	基準	現有	充足率	基準	現有	充足率	基準	現有	充足率	基準	現有	充足率
桑名市消防本部	16	16	100.0%	2	2	100.0%	3	3	100.0%	9	9	100.0%	2	2	100.0%	350	255	72.9%	4,158	3,290	68.1%
四日市市消防本部	14	12	85.7%	3	3	100.0%	3	3	100.0%	10	10	100.0%	2	2	100.0%	391	326	83.4%	3,523	3,227	89.7%
菰野町消防本部	2	2	100.0%	1	1	100.0%	1	1	100.0%	3	2	66.7%	1	1	100.0%	78	46	59.0%	913	880	90.9%
鈴鹿市消防本部	11	11	100.0%	2	2	100.0%	1	1	100.0%	8	8	100.0%	1	1	100.0%	304	202	66.4%	3,281	2,959	93.6%
亀山市消防本部	5	5	100.0%	1	1	100.0%	1	1	100.0%	3	3	100.0%	1	1	100.0%	156	84	53.8%	864	580	76.9%
津市消防本部	16	16	100.0%	2	2	100.0%	1	2	200.0%	14	13	92.9%	2	2	100.0%	436	357	81.9%	7,087	5,477	90.1%
伊賀市消防本部	11	11	100.0%	1	1	100.0%	1	1	100.0%	8	8	100.0%	1	1	100.0%	199	176	88.4%	2,367	1,524	70.8%
名張市消防本部	6	6	100.0%	1	1	100.0%	1	1	100.0%	4	4	100.0%	1	1	100.0%	171	117	68.4%	1,132	937	82.0%
伊勢市消防本部	8	8	100.0%	1	1	100.0%	2	1	50.0%	7	7	100.0%	1	1	100.0%	240	197	82.1%	2,334	1,452	63.1%
鳥羽市消防本部	2	2	100.0%	1	1	100.0%	1	1	100.0%	2	2	100.0%	1	0	0.0%	66	45	68.2%	493	433	63.8%
志摩広域消防組合	7	7	100.0%	1	0	0.0%	1	1	100.0%	6	6	100.0%	1	1	100.0%	190	144	75.8%	995	625	56.3%
松阪地区広域消防組合	13	13	100.0%	2	2	100.0%	2	2	100.0%	15	13	86.7%	3	3	100.0%	356	272	76.4%	2,955	2,628	96.6%
紀勢地区広域消防組合	5	6	120.0%	0	0	—	2	1	50.0%	4	4	100.0%	1	1	100.0%	100	91	91.0%	1,741	576	86.5%
三重紀北消防組合	8	8	100.0%	1	0	0.0%	2	1	50.0%	7	7	100.0%	1	1	100.0%	138	102	73.9%	986	850	94.0%
熊野市消防本部	6	6	100.0%	1	0	0.0%	1	1	100.0%	5	5	100.0%	0	0	—	93	79	84.9%	1,255	513	37.6%
計	130	129	99.2%	20	17	85.0%	23	21	91.3%	105	101	96.2%	19	18	94.7%	3,268	2,493	76.3%	34,084	25,951	76.1%

※ 消防職員数は、平成 27 年 4 月 1 日現在の消防吏員数に消防吏員以外の職員数を加算したものの。

出典：平成 27 年度消防施設整備計画実態調査

(3) 財政状況

平成 28 年度の消防本部における消防費の一般会計予算に占める割合の県平均は、3.8%となっています。平成 28 年度の全国平均が 3.5%であることをふまえると、県内の消防本部における消防費が一般会計予算に占める割合は、やや高い状況にあります。なお、県民一人あたりの消防費の県内平均は、15,028 円となっており、一般的に小規模な消防本部ほど割高となる傾向があります。

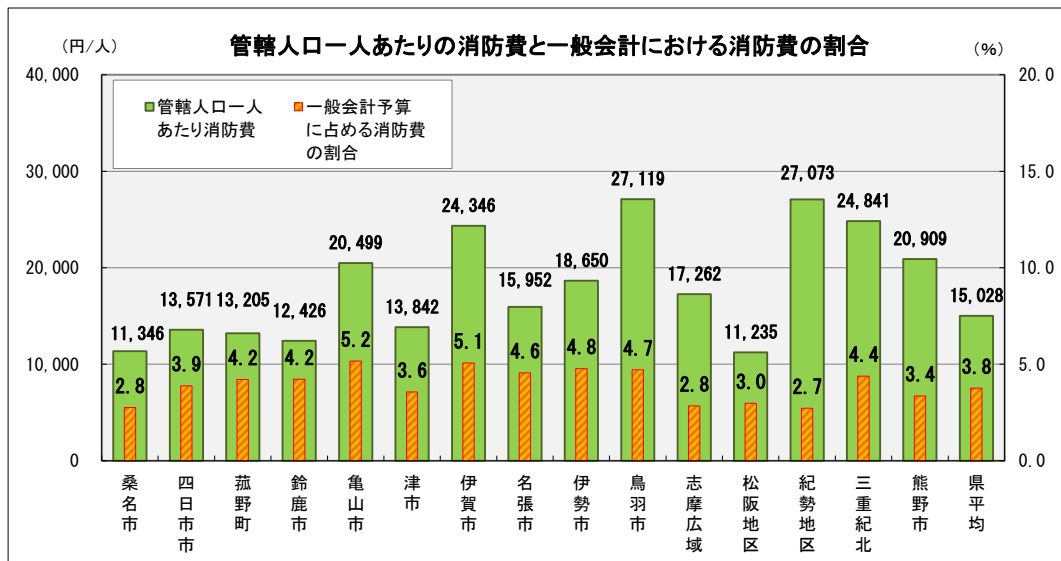
平成 28 年度消防費決算額の状況

消防本部名	一般会計 決算額 (百万円)	消防費 (百万円)	一般会計予算 に占める消防費 の割合	管轄人口 (人)	管轄人口一人 あたり消防費 (円)
桑名市消防本部	91,045	2,506	2.8%	220,875	11,346
四日市市消防本部	118,068	4,585	3.9%	337,859	13,571
菰野町消防本部	13,118	552	4.2%	41,803	13,205
鈴鹿市消防本部	58,969	2,487	4.2%	200,151	12,426
亀山市消防本部	19,756	1,019	5.2%	49,709	20,499
津市消防本部	109,582	3,900	3.6%	281,745	13,842
伊賀市消防本部	45,153	2,286	5.1%	93,896	24,346
名張市消防本部	27,982	1,275	4.6%	79,926	15,952
伊勢市消防本部	59,737	2,853	4.8%	152,972	18,650
鳥羽市消防本部	11,348	534	4.7%	19,691	27,119
志摩広域消防組合	36,402	1,034	2.8%	59,902	17,262
松阪地区広域消防組合	77,335	2,300	3.0%	204,723	11,235
紀勢地区広域消防組合	24,478	666	2.7%	24,600	27,073
三重紀北消防組合	20,025	878	4.4%	35,345	24,841
熊野市消防本部	23,655	795	3.4%	38,022	20,909
計	736,653	27,669	3.8%	1,841,219	15,028

※ 端数処理（四捨五入）の関係上、合計が一致しない場合があります。

※ 管轄人口は、住民基本台帳の平成 29 年 1 月 1 日現在の計数を用いている。

出典：消防力カード

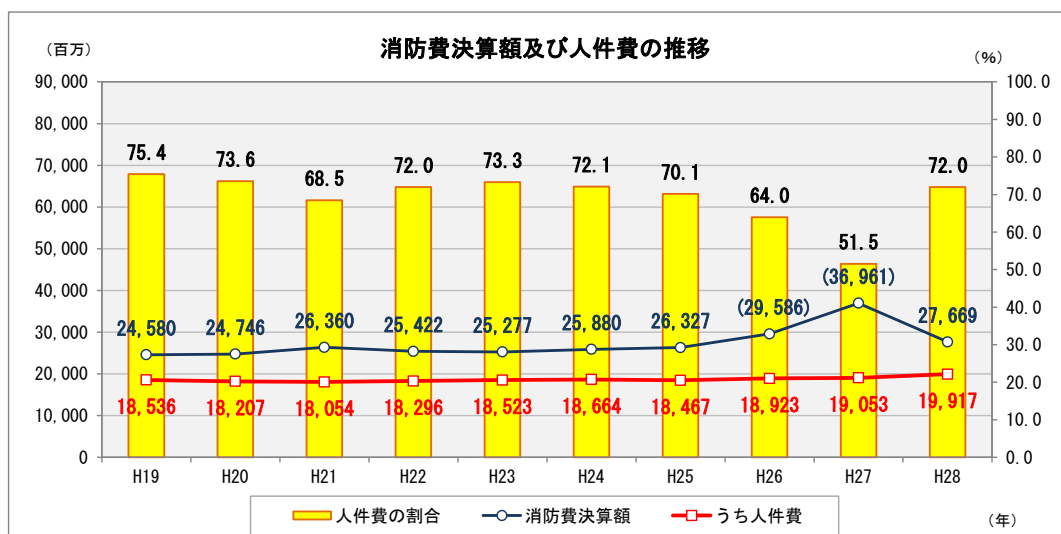


出典：消防力カード

平成19年度からの消防費の決算状況は、平成26、27年度は多くの消防本部において消防救急無線のデジタル化と消防指令台の更新が行われた影響で増加しているものの、概ね横ばいとなっています。消防費のうち人件費が占める割合は、県全体で約7割程度であり、消防費の多くを人件費が占めている状況は変わっていません。

また、事業費のうち消防車両等の導入に要する経費である機械購入費についても、平成28年度の消防費に占める割合は3.9%と低く、消防本部の規模によっては高額な消防車両等の導入が容易ではないことがうかがわれ、少ない経費でより高い水準の消防サービスの提供を図っていく必要があります。

人口減少や少子高齢化が進展する中で、小規模消防本部における一人あたりの消防費が高くなる傾向にあります。財政事情は年々厳しくなり、消防行政においても厳しい財政運営が強いられています。



※ 退職金に関する経費を除いたもの

出典：平成21年～平成29年度消防防災・震災対策現況調査

消防本部別消防費決算額の比較（平成19年度、平成28年度）

消防本部名		消防費	人件費	物件費	維持補修費	事業費	機械購入費	その他	人件費比率	機械購入費比率
		(千円)	(千円)	(千円)	(千円)	(千円)	(千円)	(千円)	(%)	(%)
桑名市消防本部	H19	2,998,472	1,849,098	263,216	4,828	95,827	175,217	0	61.7	5.8
	H28	2,506,232	2,138,369	215,967	5,043	70,471	9,557	0	85.3	0.4
	差し引き	-492,240	289,271	-47,249	215	-25,356	-165,660	0	23.7	-5.5
四日市市消防本部	H19	4,043,943	2,454,974	408,976	40,710	103,619	597,056	0	60.7	14.8
	H28	4,584,732	3,054,526	422,593	29,930	156,990	89,183	0	66.6	1.9
	差し引き	540,789	599,552	13,617	-10,780	53,371	-507,873	0	5.9	-12.8
菟野町消防本部	H19	569,006	330,178	74,422	4,637	52,990	78,826	0	58.0	13.9
	H28	552,459	404,597	80,555	3,498	38,106	0	0	73.2	0.0
	差し引き	-16,547	74,419	6,133	-1,139	-14,884	-78,826	0	15.2	-13.9
鈴鹿市消防本部	H19	2,129,217	1,552,025	207,546	9,533	87,006	112,135	0	72.9	5.3
	H28	2,487,229	1,914,913	186,966	11,027	93,959	153,544	0	77.0	6.2
	差し引き	358,012	362,888	-20,580	1,494	6,953	41,409	0	4.1	0.9
亀山市消防本部	H19	957,352	696,392	122,406	9,416	56,761	31,815	0	72.7	3.3
	H28	1,019,181	768,221	101,857	7,265	111,678	15,800	0	75.4	1.6
	差し引き	61,829	71,829	-20,549	-2,151	54,917	-16,015	0	2.6	-1.8
津市消防本部	H19	3,699,843	2,844,925	605,365	15,412	70,329	49,655	0	76.9	1.3
	H28	3,899,825	2,789,172	534,719	17,396	120,510	295,333	0	71.5	7.6
	差し引き	199,982	-55,753	-70,646	1,984	50,181	245,678	0	-5.4	6.2
伊賀市消防本部	H19	1,572,692	1,300,345	117,903	2,150	45,112	1,228	5,069	82.7	0.1
	H28	2,285,517	1,346,110	113,601	2,059	52,584	6,994	0	58.9	0.3
	差し引き	712,825	45,765	-4,302	-91	7,472	5,766	-5,069	-23.8	0.2
名張市消防本部	H19	925,770	776,920	69,606	2,180	36,197	13,155	0	83.9	1.4
	H28	1,275,019	913,163	79,200	253	51,067	222,142	0	71.6	17.4
	差し引き	349,249	136,243	9,594	-1,927	14,870	208,987	0	-12.3	16.0
伊勢市消防本部	H19	1,804,287	1,470,487	161,955	815	63,290	3,150	0	81.5	0.2
	H28	2,853,361	1,805,561	312,235	2,376	93,223	19,764	0	63.3	0.7
	差し引き	1,049,074	335,074	150,280	1,561	29,933	16,614	0	-18.2	0.5
鳥羽市消防本部	H19	354,826	281,086	33,099	997	22,614	9,832	0	79.2	2.8
	H28	533,554	352,659	86,233	460	30,100	35,045	0	66.1	6.6
	差し引き	178,728	71,573	53,134	-537	7,486	25,213	0	-13.1	3.8
志摩広域消防組合	H19	895,318	818,556	32,700	4,890	7,310	27,994	0	91.4	3.1
	H28	1,033,561	742,201	192,177	5,958	9,117	80,220	0	71.8	7.8
	差し引き	138,243	-76,355	159,477	1,068	1,807	52,226	0	-19.6	4.6
松阪地区広域消防組合	H19	2,333,658	2,119,724	182,274	2,252	0	29,408	0	90.8	1.3
	H28	2,300,244	1,934,062	267,132	3,823	20,889	74,338	0	84.1	3.2
	差し引き	-33,414	-185,662	84,858	1,571	20,889	44,930	0	-6.8	2.0
紀勢地区広域消防組合	H19	544,495	492,073	41,555	6,147	4,720	0	0	90.4	0.0
	H28	666,088	592,348	36,475	0	5,809	31,456	0	88.9	4.7
	差し引き	121,593	100,275	-5,080	-6,147	1,089	31,456	0	-1.4	4.7
三重紀北消防組合	H19	1,040,673	963,888	54,341	821	9,229	12,394	0	92.6	1.2
	H28	877,551	499,846	31,442	4,638	655	36,534	0	57.0	4.2
	差し引き	-163,122	-464,042	-22,899	3,817	-8,574	24,140	0	-35.7	3.0
熊野市消防本部	H19	710,678	585,458	72,107	2,455	28,686	21,972	0	82.4	3.1
	H28	794,808	661,691	81,084	757	38,401	11,561	0	83.3	1.5
	差し引き	84,130	76,233	8,977	-1,698	9,715	-10,411	0	0.9	-1.6
計	H19	24,580,230	18,536,129	2,447,471	107,243	683,690	1,163,837	5,069	75.4	4.7
	H28	27,669,361	19,917,439	2,742,236	94,483	893,559	1,081,471	0	72.0	3.9
	差し引き	3,089,131	1,381,310	294,765	-12,760	209,869	-82,366	-5,069	-3.4	-0.8

※ 退職金に関する経費を除いたもの

出典：平成21年、平成29年度消防防災・震災対策現況調査

3.3 広域化及び連携・協力の取組の継続の必要性

県内消防の現況を見ると、消防吏員数は平成29年度までの10年間で7.6%増加しているものの、特殊自動車や消防水利などは一部で不十分な状況が見受けられ、一方で救急出動件数は28.3%増加しています。また、小規模な消防本部は体制強化が課題となっています。

消防体制の現況をふまえると、行財政上の様々なメリットを実現することができる消防の広域化及び連携・協力は有効な一つの手段であり、引き続き、広域化や広域化につなげるための連携・協力の取組を進めていく必要があります。

第4章 消防力の向上に向けた取組

4.1 10年間の振り返り

4.1.1 消防力カードに基づく消防力の推移

各消防本部においては、社会経済環境の変化や消防に対する様々な住民ニーズ、自然災害や事故等に的確に対応していくため、着実に消防力の充実強化が進められています。前章においても記述しましたが、各消防本部の隊数や消防車両等の状況を示した「消防力カード」に基づく、消防組織、消防施設、消防活動の推移については、以下のとおりです。

(1) 消防組織

項目	平成19年度 現況調査	消防力カード (H29年度)	増減(率)
管轄人口	1,866,963人	1,841,219人	▲25,744人(▲1.4%)
消防吏員数	2,361人	2,540人	179人(7.6%)
消防費	24,580百万円	27,669百万円	3,089百万円(12.5%)
人口一人あたり消防費	13,166円	15,028円	1,862円(14.1%)
救急隊数	99隊	105隊	6隊(6.0%)
救急救命士数	240人	532人	292人(121.7%)
緊急消防援助隊登録部隊数	55隊	101隊	46隊(83.6%)

※ 消防力カードの消防費と人口一人あたり消防費については、28年度の数値

出典：平成19年度消防防災・震災対策現況調査、消防力カード

(2) 消防施設

項目	平成18年度 実態調査	消防力カード (H29年度)	増減(率)
消防署所数	85	88	3(3.5%)
消防ポンプ自動車 充足率	89.7%	99.2%	9.5ポイント
はしご自動車 未配備消防本部数	3消防本部	3消防本部	0
化学消防車充足率 100%未満消防本部数	4消防本部	3消防本部	▲1消防本部(▲25.0%)

※ 実態調査は3年ごとに行われるため、18年度の数値

出典：平成18年度消防施設整備計画実態調査、消防力カード

(3) 消防活動

項目	平成 19 年度 現況調査	消防力カード (H29 年度)	増減 (率)
火災出動件数	889 件	634 件	▲255 件(▲28.7%)
火災出動吏員一人あたり	37.8%	25.0%	▲12.8 ポイント
救急出動件数	73,409 件	94,160 件	20,751 件(28.3%)
救急出動件数一隊あたり	703.6 件	888.3 件	184.7 件(26.3%)
現場到着平均時間	7.5 分	8.5 分	1.0 分(13.3%)
病院収容平均時間	32.4 分	38.6 分	6.2 分(19.1%)

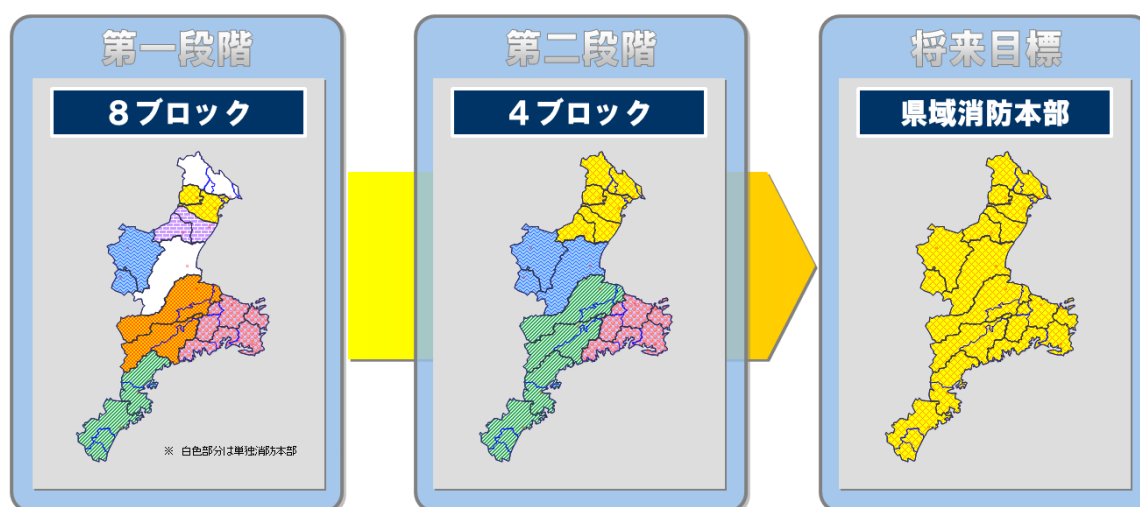
出典：平成 19 年度消防防災・震災対策現況調査、消防力カード

4.1.2 三重県における広域化及び連携・協力の取組状況

本県においては、平成 20 年 3 月に策定した「三重県消防広域化推進計画」(以下「旧推進計画」という。)では、広域化の形として、最もスケールメリットが働く県域を一つの組合せとした県域消防本部が効果的であるとしながらも、県内全ての市町の合意を得ることに多くの時間を要し、広域化の期限(平成 24 年度末)内に実現することは困難であると予想されるため、将来目標を県域消防本部としつつ、段階的な広域化を推進していくこととしました。

具体的には、第一段階は、平成 24 年度末までの当面の目標として、管轄人口 10 万人未満の小規模消防本部の解消等を考慮しつつ、より実現可能で一定の効果を得ることができる組合せとして 8 ブロックに、第二段階は、基本指針に示された管轄人口 30 万人の規模目標に合わせて 4 ブロックにするというものです。

消防の広域化の段階的な推進



また、その後、消防庁の基本指針の改正を受け、旧推進計画を見直し、平成 26 年 3 月に策定した「三重県消防広域化推進計画（改訂版）」（以下「旧推進計画（改訂版）」という。）では、単に管轄人口規模等を問題にするだけでなく、地域の特性や実情、広域化の必要性の認識や期待感などを十分にふまえ、進めていくこととしました。

具体的には、優先的に広域化に取り組む地域の重点化を行い、広域化の気運の高まりをさらに促進すべき地域として「伊賀市・名張市地域」、「四日市市・菰野町地域」を、急ぎ消防体制の強化が必要な地域として「鳥羽市」を記載し、広域化を推進してきました。

この 10 年間における各地域の取組状況は様々であり、広域化及び連携・協力に関しての具体的な取組の状況については以下のとおりです。

1 各地域における広域化及び連携・協力の取組状況

（1）伊賀市・名張市地域

平成 29 年度末頃から、伊賀市消防本部と名張市消防本部との間で、通信指令業務の共同運用に関する勉強会を開催し、その中で、データ移行による業務の一元化のための指令台改修が技術的に困難であることが判明しましたが、引き続き、次の通信指令台更新時における連携・協力の取組について検討することとなりました。

（2）四日市市・菰野町地域

平成 28 年度から桑名市・四日市市・菰野町の 3 消防本部で三重北消防指令センターにおいて通信指令業務の共同運用に取り組むとともに、四日市市・菰野ブロック消防広域化研究会において広域化の研究を進めてきました。

現時点で広域化の進展には至りませんでした。今後幅広く広域化や連携・協力について研究することとしています。

〔三重北消防指令センター〕

平成 19 年度から、桑名市消防本部と四日市市消防本部との間において、通信指令業務の共同運用が行われており、消防救急無線のデジタル化に伴う通信指令台の更新に合わせ、平成 28 年 4 月 1 日からは従前の桑名市消防本部と四日市市消防本部の 2 消防本部に菰野町消防本部を加えた 3 消防本部による「三重北消防指令センター」が、四日市市中消防署中央分署内に設けられ、通信指令業務の共同運用が開始されています。

更新された高機能消防指令台は、災害発生場所を特定する「発信地表示システム」や災害発生場所の最も近くにいる消防車両を出動させる「車両動態管理システム」などの機能が強化されています。また、3 消防本部の共同運用により災害情報の一元化が図られ、大規模災害や広域的な災害、特異な災害等が発生した場合には、早期に相互応援を行うことが可能となっています。

(3) 鳥羽市（志摩広域・鳥羽地域）

過去の検討において近隣自治体との広域化のメリットが見出せず、広域化の検討は進んでいませんが、志摩広域消防組合と鳥羽市消防本部との間で通信指令業務の共同運用など、連携・協力の取組について検討することとなりました。

(4) 津市・鈴鹿市・亀山市地域

鈴鹿市消防本部と亀山市消防本部は、平成 29 年度に消防庁の「消防の連携・協力のモデル構築事業」を活用し、年間の災害出動頻度が少なく、車両の購入費・維持管理費が高額な、はしご自動車等の共同整備に関する検討に取り組み、適正な車両配置や運用効果、経済的効果の試算等を行い、合理的で妥当性のある整備方策が計画されています。現在は、具体的な整備運用方策や諸課題を協議する検討委員会が設置され、はしご自動車の共同整備に向けた協議が行われています。

また、津市消防本部、鈴鹿市消防本部、亀山市消防本部において、通信指令業務の共同運用について、新たに検討することとなりました。

(5) その他の地域

松阪・紀勢地域については、研究会等の設置に至りませんでした。また、東紀州地域については、平成 21 年 10 月に消防のあり方勉強会（消防の諸課題の検討）が設置されましたが、広域化への進展はありませんでした。

4.2 10年後の消防体制の姿

1 10年後の各消防本部の状況

(1) 小規模消防本部における管轄人口の減少

今から約10年後の2030年には、県全体で約1割の人口が減少し、全ての消防本部で管轄人口が減少すると推計されています。小規模な消防本部ほど人口減少率が大きくなる傾向にあり、そのうち4消防本部については、3割以上の減少が見込まれており、消防本部の小規模化の進展が懸念されます。

消防本部別 約10年後の管轄人口

消防本部名	平成29年度 (2017年) 管轄人口 (人)	2030年 管轄人口 (人)	増減 (人)	増減率 (%)
桑名市消防本部	220,875	207,141	▲ 13,734	▲ 6.2
四日市市消防本部	337,859	332,431	▲ 5,428	▲ 1.6
菟野町消防本部	41,803	39,402	▲ 2,401	▲ 5.7
鈴鹿市消防本部	200,151	180,224	▲ 19,927	▲ 10.0
龜山市消防本部	49,709	47,807	▲ 1,902	▲ 3.8
津市消防本部	281,745	256,703	▲ 25,042	▲ 8.9
伊賀市消防本部	93,896	70,883	▲ 23,013	▲ 24.5
名張市消防本部	79,926	69,929	▲ 9,997	▲ 12.5
伊勢市消防本部	152,972	137,375	▲ 15,597	▲ 10.2
鳥羽市消防本部	19,691	13,492	▲ 6,199	▲ 31.5
志摩広域消防組合	59,902	41,186	▲ 18,716	▲ 31.2
松阪地区広域消防組合	204,723	180,789	▲ 23,934	▲ 11.7
紀勢地区広域消防組合	24,600	16,433	▲ 8,167	▲ 33.2
三重紀北消防組合	35,345	23,552	▲ 11,793	▲ 33.4
熊野市消防本部	38,022	27,703	▲ 10,319	▲ 27.1
計	1,841,219	1,645,050	▲ 196,169	▲ 10.7

出典：平成29年度消防防災・震災対策現況調査、消防力カード

(2) 高齢化と人口の低密度化

人口の減少、少子高齢化が進む中で、消防の需要が大きく変化する要素があり、高齢者、特に高齢者独居世帯の増加に伴い、避難行動要支援者の数が増加していくことが想定されています。

救急業務については、高齢者、特に後期高齢者になるほど救急搬送率が高いことから、今後予想される高齢者人口の推移は地域によって様々ですが、全国の救急搬送人員数は2035年まで増加することが予想されており、消防防災活動における対応力の強化が求められています。

また、人口減少による人口の低密度化は、市街地であっても、市街地面積の減少や防火構造の改善を伴わない場合、必要な署所等の数はあまり変化しないものと考えられることに加え、救急や救助の対応を考慮すると、人口が低密度化しても、引き続き即応体制を確保していくことが求められると考えられます。

消防本部別 約10年後の65歳以上人口割合

消防本部名	2015年 (%)	2030年 (%)	増減 (ポイント)
桑名市消防本部	25.7	30.3	4.6
四日市市消防本部	24.4	27.1	2.7
菰野町消防本部	25.5	28.5	3.0
鈴鹿市消防本部	24.0	30.6	6.6
亀山市消防本部	25.2	30.0	4.8
津市消防本部	27.9	32.0	4.1
伊賀市消防本部	31.7	38.7	7.0
名張市消防本部	28.3	36.6	8.3
伊勢市消防本部	29.2	33.8	4.6
鳥羽市消防本部	35.3	47.7	12.4
志摩広域消防組合	38.9	49.4	10.5
松阪地区広域消防組合	28.5	33.9	5.4
紀勢地区広域消防組合	43.9	53.0	9.1
三重紀北消防組合	41.7	49.9	8.2
熊野市消防本部	38.4	46.3	7.9
計	27.9	32.6	4.7

出典：国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所将来推計人口

(3) 指令センター等の大規模施設の更新

消防指令センターについては、平成26～28年頃に消防救急無線のデジタル化と同時に更新した団体が多数あり、消防指令センターの使用期間の目安としておおむね10年程度とされていることから、全国的に2023年から2025年までが更新のピークとなっています。本県においても、2025年から2026年にかけて、7消防本部において次期消防指令センターの更新が予定されています。

次期消防指令センター更新時に通信指令業務の共同運用を見据えた体制を検討するのであれば、今の時期から検討を開始していく必要があると考えられます。

消防指令センターの更新予定時期

年度	2022年 以前	2023年	2024年	2025年	2026年	2027年 以降
消防本部数	3	0	1	3	4	4

出典：消防力カード

※指令装置の型について

指令装置は、管轄人口規模に応じて指令台や回線の数が設定され、Ⅰ型～Ⅲ型に区分されます。(Ⅰ型・離島型：10万未満、Ⅱ型：10万以上40万未満、Ⅲ型：40万以上)

2 10年後の消防体制の方向性について

(1) これまでの取組

これまで、大規模災害等への対応、高齢化に伴う救急需要への対応が求められる中で、消防吏員の増員や救急隊、緊急消防援助隊の増隊とともに、平成30年7月豪雨への緊急消防援助隊の派遣、県内消防の応援協定による相互応援による平成30年1月の伊勢市のアーケード火災や名張市の工場火災の対応をしてきたところです。

また、広域化及び連携・協力の取組については、各地域における積極的な取組により、県内人口の約3分の1を占める60万人を管轄する「三重北消防指令センター」の設置や、鈴鹿市、亀山市によるはしご自動車の共同整備の検討などが実現したほか、そのほかの地域においても、様々な検討や研究がなされ、引き続き広域化を見据えた議論の動きが出てきています。

(2) 10年後の消防体制の方向性

こうした中、救急業務については、高齢化等に伴う需要の増加とともに、病院収容時間が延伸傾向にあること、また、消防施設について、特殊自動車や消防水利などが一部の消防本部で不十分な状況があることから、さらなる体制強化と連携・協力等による効率化が課題となっています。

また、今後10年間には、さらなる人口減少、人口の低密度化、高齢化が予想され、人口減少による消防本部の小規模化の進展が懸念される中で、必要な署所数や即応体制の確保と、消防防災活動の対応力の強化が求められています。

さらに、女性消防吏員の活躍推進への対応やハラスメント等への対応については、組織管理体制の基盤強化が必要となっています。

このため、こうした課題とこれまでの各地域における取組を十分ふまえ、広域化の道筋をつける連携・協力を中心とした取組を進め、消防の体制強化の実現をめざします。

また、小規模消防本部のうち、特に特定小規模消防本部については、体制強化に向けた取組を行っていくこととします。

4.3 今後の消防の広域化及び連携・協力の推進について

4.3.1 消防の連携・協力の推進について

人口減少社会においても大規模地震、豪雨災害、テロ災害や市街地における大規模な火災等の複雑・多様化する災害に適切に対応していくためには、人的・財政的な資源を有効活用し、将来にわたって持続可能な消防体制を整備・確立していくことが必要です。常備消防については、社会経済情勢の変化、各般の技術の進展等に依りて、より高度・専門的な活動を実施できるようにしていく必要があります。

連携・協力については、これまで広域化を進めてきた地域を中心に新たな検討会の設置や検討項目の追加の動きがあり、前向きな議論が進められつつあります。消防庁が示す推進期限の5年間に於いて、県としてもオブザーバーとして参加するなど積極的に支援し、集中的に議論を進め結論を得ることをめざします。

1 通信指令業務の共同運用

(連携・協力の気運の高まりをさらに促進すべき地域)

① 津市・鈴鹿市・亀山市地域

津市消防本部、鈴鹿市消防本部及び亀山市消防本部は、平成31年2月に「津・鈴鹿・亀山消防連携・協力勉強会」を設置し、通信指令業務等の共同運用に関する検討に取り組んでいます。

この地域は、過去にも通信指令業務の共同運用に関して協議を行っており、消防指令台の次期更新時期（2024年から2026年頃）が比較的近いこと、消防指令台のメーカーが同じであることなどから、再び次の指令台更新時に向けた検討が進められています。

② 志摩広域・鳥羽市地域

志摩広域消防組合と鳥羽市消防本部は、平成30年11月に「志摩広域・鳥羽消防連携・協力検討会」を設置し、通信指令業務等の共同運用に関する検討に取り組んでいます。

鳥羽市消防本部は、2020年度の本部庁舎移転に合わせて、単独で高機能消防指令台を導入する予定ですが、その後の更新時における通信指令業務の共同運用に向けた検討が進められています。

③ 伊賀市・名張市地域

伊賀市消防本部と名張市消防本部は、平成31年2月に「伊賀・名張消防連携・協力勉強会」を設置し、通信指令業務等の共同運用に関する検討に取り組んでいます。

名張市消防本部は、数年後に単独で高機能消防指令台を導入する予定ですが、その後の更新時における通信指令業務の共同運用に向けた検討が進められています。

2 はしご自動車の共同整備

(連携・協力の気運の高まりをさらに促進すべき地域)

① 鈴鹿市・亀山市地域

鈴鹿市消防本部と亀山市消防本部は、平成30年5月に「はしご車共同整備検討委員会」を設置し、具体的な整備運用方策や諸課題など、はしご自動車の共同整備に関する協議が進められています。

はしご自動車については、年間の災害出動回数が少なく、購入費用が約2億円、オーバーホールなどの維持管理費も数千万円と高額であり、特に財政面において負担となっています。鈴鹿市消防本部と亀山市消防本部が所有するはしご自動車については、更新時期が近いことから、両市の圏域内において、はしご自動車を共同整備し、有効活用することは、購入費用や維持管理費の低減化が図られ、使用頻度の高い資機材の整備や現場要員の増強などへ財政的資源が効率的に配分されるなど、消防力の充実強化が期待されます。

4.3.2 消防の広域化の推進について

1 広域化の推進について

消防庁は、消防本部の規模が大きいほど災害対応能力が強化され、組織管理、財政運営等の観点からも管轄人口 30 万以上の規模を一つの目標としながらも、地域の事情を十分に考慮し、規模目標にこだわることなく、着実に小規模消防本部の広域化を推進していく必要があるとしています。

また、人口減少社会の到来、少子高齢化の進展等の社会情勢の変化に対応していくためには、消防の広域化が消防力の維持・強化には有効な手段の一つであることから、原則として、現行の広域化対象市町の組合せを踏襲しつつ、連携・協力などの取組をステップとして中長期的な広域化も展望しながら、取組を進めていきます。

2 特定小規模消防本部の課題と対応

鳥羽市消防本部は、平成 30 年 4 月 1 日現在で消防吏員 45 名と、消防庁が基本指針において定める消防吏員 50 人以下の特定小規模消防本部に県内で唯一該当しており、1 消防本部 1 署 1 出張所（管轄人口約 19,000 人）と、有人離島（神島、答志島、菅島、坂手島）及び県内有数の観光地を管轄内に有する消防本部です。

消防力の整備指針では、人口規模に応じた数の救急自動車（救急隊）が配置されることとなっていますが、救急出動件数を見ると管内人口が倍ある菰野町消防本部（管轄人口約 40,000 人）とほぼ同じ件数（平成 29 年出動件数：菰野町 1,480 件、鳥羽市 1,461 件）となっています。これは、宿泊、観光客が救急出動の約 3 分の 1 を占めているためであり、高齢化とともに観光客の増大に伴う救急需要の増加への対応が課題となっています。加えて、県内有数の国際観光都市である鳥羽市にとっては、大規模災害や複数箇所での火災・災害等から住民・観光客を守るため、消防力を充実強化していく必要があります。

現時点では、広域化に向けた具体的な取組は見られませんが、志摩広域消防組合との連携・協力の取組の実現に努めるとともに、消防防災施設等の整備に対する財政支援を国に働きかけながら施設設備整備等に係る財政面での効率化を図るなど、消防体制の充実強化を支援していきます。

3 広域化の気運の醸成

消防の諸課題を解決し、各地域においてより充実した消防防災体制を確立するためには、消防の広域化について、他の地域においても今後も引き続き検討を重ねていく必要があります。

そのため、広域化のメリットや広域化をより円滑に行うためのノウハウに関する適切な情報提供や必要な調整等について、地域の実情に応じてきめ細かに行っていきます。

第5章 消防の広域化及び連携・協力のために必要な措置

5.1 広域化及び連携・協力推進のための措置事項

5.1.1 国の支援措置

消防庁では、消防庁長官を本部長とする「消防広域化推進本部」を設置して消防の広域化及び連携・協力を推進しているところであり、消防広域化推進アドバイザーの派遣等を行っています。また、市町村の消防の広域化及び連携・協力に伴って必要となる経費に対してソフト・ハード両面からの総合的な支援措置を講じています。

消防の広域化及び連携・協力に対する国の財政支援措置は、下表のとおりです。

消防の広域化に対する国の財政支援措置（平成30年度）

項目	財政支援措置
消防広域化準備経費	消防の広域化の準備に要する広域消防運営計画策定経費、広域化協議会負担金、協議会委員報酬、広報誌作成費及び住民意向調査費等の経費について特別交付税措置を講じる。
消防広域化臨時経費	消防の広域化に伴い臨時的に必要となる次の経費について特別交付税措置を講じる。 ① 消防本部・施設の統合、署所の再配置に伴う通信等施設・設備に要する経費 ② 本部の名称・場所の変更等に伴い必要となる経費 ③ 業務の統一に必要となるシステム変更、統一規程の整備等に要する経費 ④ その他広域化整備に要する経費
消防署所等の整備	(1) 広域消防運営計画等に基づき、必要となる消防署所等の増改築（一体的に整備される自主防災組織等のための訓練・研修施設を含む。また、再配置が必要と位置づけられた消防署所等の新築を含む。）を支援する。 ・緊急防災・減災事業債 充当率100%（交付税算入率 元利償還金の70%） (2) 統合される消防本部を消防署所等として有効活用するために必要となる改築を支援する。 ・緊急防災・減災事業債 充当率100%（交付税算入率 元利償還金の70%）
	上記（1）、（2）以外の消防の広域化に伴う消防本部の整備を支援する。 ・防災対策事業債 充当率90%
高機能消防指令センターの整備	広域消防運営計画等に基づく、高機能消防指令センターの整備を支援する。 ・緊急防災・減災事業債 充当率100%（交付税算入率 元利償還金の70%）
消防車両等の整備	広域消防運営計画等に基づく消防本部の統合による効率化等により、機能強化を図る消防用車両等の整備を支援する。 ・緊急防災・減災事業債 充当率100%（交付税算入率 元利償還金の70%）
国庫補助金の配分について	消防の広域化に伴う消防防災施設等の整備については、消防防災施設整備費補助金及び緊急消防援助隊設備整備費補助金の交付の決定に当たって、特別の配慮を行う。

※2020年度以降は、内容が見直される可能性があります。

消防の連携・協力に対する国の財政支援措置（平成30年度）

項目	財政支援措置
高機能消防指令センターの整備	連携・協力実施計画に基づき、必要となる高機能消防指令センターの整備を支援する。 ・緊急防災・減災事業債 充当率 100%（交付税算入率 元利償還金の 70%）
消防車両等の整備	連携・協力実施計画に基づき、必要となる消防車両等の整備を支援する。 ・防災対策事業債 充当率 90%（交付税算入率 元利償還金の 50%）
国庫補助金の配分について	消防の連携・協に伴う消防防災施設等の整備については、消防防災施設整備費補助金及び緊急消防援助隊設備整備費補助金の交付の決定に当たって、特別の配慮を行う。

※2020年度以降は、内容が見直される可能性があります。

5.1.2 県の支援措置

1 先進事例等の情報提供や課題に対する解決策等の助言

各地域における消防の広域化及び連携・協力に関する必要性の認識や期待感をふまえ、県は、市町や消防本部に対して、広域化及び連携・協力のメリットや広域化及び連携・協力をより円滑に行うための情報提供、それぞれの消防本部が抱える課題の解決に役立つ先進事例等、きめ細かな情報提供を行います。

2 関係市町間の協議の積極的な仲介、調整等

県は、各地域における検討会等にオブザーバーとして参加するなど、積極的に支援するとともに、市町や消防本部からの求めに応じて関係市町や消防本部間の消防の広域化及び連携・協力に関する幅広い仲介・連絡調整等の必要な調整を行います。

3 消防体制強化の支援

消防の広域化及び連携・協力を見据えた消防資機材の規格統一や消防車両・資機材等の整備に対する財政支援の拡充を国に働きかけていきます。

三重県消防広域化及び連携・協力に
関する推進計画

[資料編]

目 次

市町村の消防の広域化に関する基本指針	… 資－ 1
(平成 18 年 7 月 12 日 消防庁告示第 33 号、改正 平成 25 年 4 月 1 日 消防庁告示第 4 号、 改正 平成 30 年 3 月 30 日 消防庁告示第 8 号)	
市町村の消防の連携・協力に関する基本指針	… 資－ 7
(平成 29 年 4 月 1 日 消防消第 59 号 消防庁長官通知、 改正 平成 30 年 4 月 1 日 消防消第 82 号 消防庁長官通知)	
市町村の消防の広域化に関する基本指針の一部改正について	… 資－11
(平成 30 年 4 月 1 日 消防消第 81 号 消防庁長官通知)	
市町村の消防の連携・協力に関する基本指針の一部改正について	… 資－13
(平成 30 年 4 月 1 日 消防消第 82 号 消防庁長官通知)	
消防の広域化及び連携・協力に関する答申	… 資－14
(平成 29 年 3 月 15 日 消防審議会)	
市町村合併の状況及び消防本部組織の変遷	… 資－18
消防本部別火災出動件数（平成 19 年と平成 29 年の比較）	… 資－20
消防本部別救助出動件数（平成 19 年と平成 29 年の比較）	… 資－21
消防本部別救急出動件数（平成 19 年と平成 29 年の比較）	… 資－22
消防本部別立入検査件数及び立入検査率の推移	… 資－23
平成 19 年と平成 29 年における消防吏員の年齢構成	… 資－25
消防本部別管轄区域における将来推計人口	… 資－27
消防力カード様式	… 資－29

○消防庁告示第三十三号

消防組織法（昭和二十二年法律第二百二十六号）第三十一条第一項の規定に基づき、市町村の消防の広域化に関する基本指針を次のように定める。
平成十八年七月十二日

消防庁長官 板倉 敏和

市町村の消防の広域化に関する基本指針

一 自主的な市町村の消防の広域化の推進に関する基本的な事項

1 市町村の消防の広域化の必要性

消防は、災害や事故の多様化及び大規模化、都市構造の複雑化、住民ニーズの多様化等の消防を取り巻く環境の変化に的確に対応し、今後とも住民の生命、身体及び財産を守る責務を全うする必要がある。

しかしながら、小規模な消防本部においては、出動体制、保有する消防用車両、専門要員の確保等に限界があることや、組織管理や財政運営面での厳しさが指摘されることがあるなど、消防の体制としては必ずしも十分でない場合がある。

これを克服するためには、市町村の消防の広域化により、行財政上の様々なスケールメリットを実現することが極めて有効である。具体的には、広域化によって、

- ① 災害発生時における初動体制の強化
- ② 統一的な指揮の下での効果的な部隊運用
- ③ 本部機能統合等の効率化による現場活動要員の増強
- ④ 救急業務や予防業務の高度化及び専門化
- ⑤ 財政規模の拡大に伴う高度な資機材の計画的な整備
- ⑥ 消防署所の配置や管轄区域の適正化による現場到着時間の短縮

等、消防力の強化による住民サービスの向上や消防に関する行財政運営の効率化と基盤の強化が期待される。

こうしたことから、平成六年以降、自主的な市町村の消防の広域化が推進されてきた。全国の消防本部の数は、最も多かった平成三年十月の九百三十六本部から、平成十八年四月には八百一十一本部にまで減少しているが、広域化と並行して進められた市町村合併の状況と比較す

ると、広域化が十分進んだとは言いがたい状況にあった。そこで、平成十八年においては、都道府県の役割の明確化と、市町村における十分な議論を確保するための関係者の議論の枠組みの創設と併せ、災害の大規模化・多様化等の環境の変化に的確に対応するために広域化の目標となる消防本部の規模を引き上げること等を内容として、広域化を更に推進するための消防組織法の改正及びこれに基づく本指針の策定を行った。

以来、改正後の消防組織法に基づき各都道府県において定められた推進計画に基づく取組が進められてきたところであるが、本指針が策定された当初の広域化の実現の期限としていた平成二十四年度末には平成十八年四月から更に二十七本部が減少し、消防本部数は七百八十四本部となり、平成二十五年に改正された本指針の新たな推進期限としていた平成三十年四月一日には更に五十六本部が減少し、消防本部数は七百一十八本部となったところである。広域化を行った消防本部においては、人員配達の効率化と充実、消防体制の基盤の強化を通じた住民サービスの向上等の成果が現れており、広域化に伴う現象として一部の地方公共団体が懸念する、消防署所の配置替えによる一部地域での消防力低下や消防本部と市町村との関係の希薄化といった事実は認められない。

このように、広域化した消防本部においては、広域化の意図する成果が現れてはいるものの、全体的には、管轄人口十万未満の小規模な消防本部（以下「小規模消防本部」という。）が全消防本部数の約六割を占めるなど、広域化の進捗はまだ十分とはいえず、小規模消防本部が抱える前記の課題が依然として克服されていない。

一方で、日本の総人口は、平成十七年に戦後初めて減少に転じ、既に人口減少社会が到来している。

これにより一般的に現在の各消防本部の管轄人口も減少し、消防本部の小規模化がより進むと同時に、生産年齢人口の減少を通じた財政面の制約もより厳しくなるものと考えられる。また、消防本部とともに地域の消防を担っている消防団員の担い手不足の問題も更に懸念される状況にある。また、人口減少により低密度化が進展しているが、消防活動として必要な署所等の数は大きくは変化しないものと考えられ、即応体制の確保など消防力の維持に困難が伴う可能性も高い。このような人口動態等による影響は消防本部の規模が小さいほど深刻であると考えられる。

さらに、高齢化の進展に伴い、自力避難困難者の増加

により予防業務の重要性がより一層増しているほか、救急需要が拡大しており、特にこうした面では、消防力の強化をしていかなければならない。

また、消防力に関し、消防力の整備指針（平成十二年消防庁告示第一号）及び消防水利の基準（昭和三十九年消防庁告示第七号）に規定する消防力に対する整備率を見ると、平成二十七年四月一日現在、消防職員については七十七・四％、消防水利については七十三・六％にとどまっているなど、依然として整備率が低いものがある。とりわけ、小規模消防本部においては、大規模な消防本部よりも整備率が低い傾向にあり、例えば、消防職員については、管轄人口三十万以上の消防本部が八十七・〇％である一方、小規模消防本部においては、六十六・一％にとどまっている。そのほか、はしご車、化学消防車、救助工作車、消防水利等についても、消防本部の規模による顕著な差が見られる。

さらに、昨今注目されている、消防本部におけるハラメント等への対応や女性活躍を推進するという観点でも、組織管理体制の基盤の強化が重要な課題となっている。

加えて、近年の東日本大震災での教訓や自然災害の多発、大規模市街地火災等の発生、また、今後の災害リスクの高まりも指摘される状況を踏まえても、広域化による小規模消防本部の解消が重要である。

以上のことから、国、都道府県及び市町村が一体となり、消防力の維持・強化に当たって最も有効な消防の広域化を推進し、小規模消防本部の体制強化を図ることがこれまで以上に必要となっており、喫緊の最重要課題となつている。

2 消防組織法における市町村の消防の広域化の基本的な考え方

消防組織法では市町村の消防の広域化に関し、次の事項について定めている。

- ① 市町村の消防の広域化の理念及び定義
 - ② 消防庁長官による基本指針の策定
 - ③ 都道府県による推進計画の策定及び都道府県知事の関与等
 - ④ 広域化対象市町村による広域消防運営計画の作成
 - ⑤ 国の援助及び地方債の特別の配慮
- この市町村の消防の広域化は、消防の体制の整備及び確立を図ることを旨として、行わなければならないこととされているため、広域化によって消防本部の対応力が低下するようなことはあってはならない。

また、市町村の消防の広域化とは、二以上の市町村が消防事務（消防団の事務を除く。）を共同して処理することとする。こと又は市町村が他の市町村に消防事務を委託することをいうと定義されている。

したがって、広域化の対象は、いわゆる常備消防であり、消防団はその対象ではない。

加えて、広域化については、一部事務組合等の共同処理又は事務委託の方式により行われることとなるが、関係市町村間においてそれぞれの方式の利点及び問題点を十分に比較考慮の上、その地域に最も適した方式を選択することが必要である。

3 平成三十年度以降の市町村の消防の広域化の推進の方向性

平成十八年の消防組織法の改正後、平成三十年四月一日に至るまでの広域化の状況を踏まえると、広域化の進捗状況は地域の実情によって左右される面があるものと考えられる。また、本指針一、一でも述べたように、平成十八年からの広域化の継続した推進により、気運の高い地域等において、広域化は一定程度進み、成果が現れているが、依然として、広域化の必要性が高い小規模消防本部が残されている。

まずは、市町村が自らの消防本部を取り巻く状況と自らの消防力を分析し、広域化や連携・協力といった手段を織り込みながら、今後のあるべき姿を考えることが必要である。特に小規模消防本部については、今後のあり方を抜本的に議論する必要がある。

また、地域の実情を熟知した広域な地方公共団体である都道府県の役割が特に重要である。平成二十年及び平成二十一年の消防組織法の改正により、緊急消防援助隊に関する事務と傷病者の搬送及び受入れの実施基準に関する事務が都道府県の事務に追加されたことから、も明らかのように、消防の分野における都道府県の役割の重要性は高まっている。広域化についても、本指針一、一で示された現下の消防を取り巻く状況を踏まえると、国の取組とあわせ、都道府県には、関係市町村間の必要な調整、情報の提供その他の必要な支援を行う役割を果たすことが更に期待される。とりわけ、関係市町村間の連絡調整はもとより、広域化に係る市町村の財政負担又は事務負担に対する支援等について、より積極的によりその役割を果たし、自主的な市町村の消防の広域化の推進に取り組むことが求められる。

広域化の推進に当たっては、消防組織法が改正された平成十八年以降の十年以上にわたる取組を振り返った上で、今一度原点に立ち返り、推進計画を再策定する必要がある。その際、都道府県は、市町村が行った自らの

消防本部を取り巻く状況と自らの消防力の分析を生かしつつ、積極的にリーダーシップを取り、都道府県内の消防体制のあり方を再度議論していく必要がある。

なお、本指針一、4に掲げる国の施策及び本指針三、5に掲げる各都道府県における措置を重点的に実施する地域（以下「消防広域化重点地域」という。）については、これまで以上に積極的に指定し、広域化を推進するものとする。

あわせて、消防事務の一部について柔軟に連携・協力を行うこと（以下「消防の連携・協力」という。）についても、推進していくものとし、消防の広域化と同様、関係市町村間の必要な調整、情報の提供その他の必要な支援を行う役割を果たすことが期待される。

4 国における自主的な市町村の消防の広域化を推進するための施策

本指針一、3を踏まえ、国は、自主的な市町村の消防の広域化を推進するため、次のような施策を講ずる。

(1) 消防広域化推進本部の設置

消防庁に、都道府県及び市町村における広域化の取組を支援するための消防広域化推進本部を設置する。

(2) 広報及び普及啓発

市町村の消防の広域化を推進するためには、消防サービスを提供を受ける国民、広域化に直接取り組む市町村及び指導助言や連絡調整等を市町村に対して行う都道府県が広域化の必要性、メリットや全国的な状況等について、十分に理解することが重要であることから、あらゆる機会を捉え、また、適当な広報媒体を活用することにより、広域化に関する広報及び普及啓発を行う。

(3) 都道府県及び市町村に対する情報提供

広域化の推進に関する制度、広域化を行った先進事例、実際に広域化を行う際の留意事項等について、都道府県及び市町村のニーズに応じた情報提供を行い、関係者における広域化に関する取組の促進を図る。

(4) 相談体制の確保充実

広域化を実現した消防本部の幹部職員等で消防庁に登録された者を市町村等に派遣し、助言等を行う消防広域化推進アドバイザーの活用等により、広域化に関する協議を進めるに当たっての諸課題への対処方策等広域化に関する個別具体の相談に積極的に応じる。

(5) 財政措置

① 広域化関連事業

都道府県に対して、広域消防運営計画の作成等に関する広域化対象市町村への情報提供若しくは助言、本指針三、3に定める消防広域化重点地域の指定、協議会への参画、調査研究又は広報啓発等に必要経費について所要の普通交付税措置を講ずるとともに、都道府県が広域化対象市町村に対して行う補助金、交付金等の交付に要する経費について所要の特別交付税措置を講ずるほか、地方自治法（昭和二十二年法律第六十七号）第二百八十四条第一項の地方公共団体の組合（以下「組合」という。）で広域化を行った広域化対象市町村の加入するもの若しくは広域化を行った広域化対象市町村又は組合で広域化を行う広域化対象市町村の加入するもの若しくは広域化を行う広域化対象市町村（以下「広域化対象市町村等」という。）に対して、当該広域化対象市町村等が広域消防運営計画を達成するために事業に要する経費等について、財政運営に支障を生ずることのないよう、次の財政措置を講ずる。

なお、これらの措置については、消防広域化重点地域に対するものに重点化して行うこととしている。

(一) 市町村の消防の広域化（都道府県の推進計画に定める市町村の組合せを構成する市町村の全部又は一部からなる地域の広域化に限る。以下この①において「市町村の消防の広域化」という。）に伴う広域消防運営計画の作成を含めた広域化の準備に要する経費及び臨時に増加する経費について所要の特別交付税措置を講ずる。

(二) 市町村の消防の広域化（平成三十六年四月一日までに行われるものに限る。）に伴い、広域消防運営計画又は消防署所等（消防署、出張所及び指令センターをいう。以下同じ。）の再編整備計画（以下「広域消防運営計画等」という。）に基づき、必要となる消防署所等（一体的に整備する自主防災組織等のための訓練研修施設を含む。）の増改築（広域消防運営計画等において消防署所等の再配置が必要であると位置付けられたものについては、新築を含む。）であって、当該広域化後十年以内完了するもの（ただし、広域化前に完了す

るものを含み、平成十八年の消防組織法の改正に基つて平成三十年四月一日までに広域化した消防本部にあつては平成四十年四月一日までに完了するもの。において同じ。）に要する経費について所要の地方財政措置を講ずる。

(三) 市町村の消防の広域化（平成三十六年四月一日までに行われるものに限る。）に伴い、統合される消防本部庁舎を消防署所等として有効活用するために必要となる改築であつて、当該広域化後十年度以内に完了するものに要する経費について所要の地方財政措置を講ずる。

(四) 市町村の消防の広域化に伴う消防本部庁舎の整備に要する経費について所要の地方債措置を講ずる。

(五) 消防通信・指令施設（消防救急デジタル無線、高機能消防指令センター）の整備に要する経費について所要の地方財政措置を講ずる。

(六) 市町村の消防の広域化（平成三十六年四月一日までに行われるものに限る。）に伴い、広域消防運営計画等に基づく消防署所の統合による効率化等により、機能強化を図る消防用車両等の整備事業であつて、当該広域化後五年度以内に完了するもの（ただし、広域化前に完了するものを含み、平成十八年の消防組織法の改正に基つて平成三十年四月一日までに広域化した消防本部にあつては平成三十五年四月一日までに完了するもの。）に要する経費について所要の地方財政措置を講ずる。

(七) 市町村の消防の広域化に伴う消防防災施設等の整備については、消防防災施設等整備費補助金及び緊急消防援助隊設備整備費補助金の交付の決定に当たつて、特別の配慮をするものとする。

② 連携・協力関連事業

組合で消防の連携・協力をを行う市町村の加入するもの又は消防の連携・協力をを行う市町村（以下「連携・協力実施市町村等」という。）に対して、当該連携・協力実施市町村等が消防の連携・協力の円滑な実施を確保するための計画（以下「連携・協力実施計画」という。）を達成するために必要な事業のうち特に消防の広域化につなげる効果が高いものに要する経費等について、財政運営に支障を生ずることのないよう、次の財政措置を講ずる。

(一) 消防の連携・協力を伴い、連携・協力実施計画に基つき、必要となる高機能消防指令センターの新築・増改築であつて、平成三十六年四月一日までに完了するものに要する経費について所要の地方財政措置を講ずる。

(二) 消防の連携・協力を伴い、連携・協力実施計画に基つき、必要となる消防用車両等の整備であつて、平成三十六年四月一日までに完了するものに要する経費について所要の地方財政措置を講ずる。

(三) 消防の連携・協力を伴う消防防災施設等の整備については、消防防災施設等整備費補助金及び緊急消防援助隊設備整備費補助金の交付の決定に当たつて、特別の配慮をするものとする。

二 自主的な市町村の消防の広域化を推進する期間

市町村の消防の広域化は、消防の体制の整備及び確立のため、不断に取り組んでいかなければならない課題であるが、地域における広域化についての合意形成には相当の時間を要するものと考えられる一方で、大規模災害等が発生する懸念が高まつており、広域化の取組が急がれることや過度に長期の期限を設けると集中的な広域化の取組を阻害するおそれがあることを踏まえ、平成三十六年四月一日を期限として広域化に取り組むことが必要である。

(一) 都道府県の推進計画等
平成三十年度中を別途として、消防本部、市町村等と緊密に連携し、検討した上で推進計画の再策定又は策定を行うよう努めること。

(二) 市町村の消防の広域化
各広域化対象市町村においては、広域消防運営計画の作成等、広域化に向けた取組を行い、平成三十六年四月一日までに広域化を実現すること。

三 推進計画に定める市町村の組合せ及び都道府県における必要な措置に関する基準

1 推進計画の策定
都道府県が、本指針に基つき、当該都道府県の区域内において自主的な市町村の消防の広域化を推進する必要があると認める場合に、その市町村を対象として定めるよう努めることとされている推進計画には、おおむね次のような事項を定めることとなる。

(1) 市町村の消防の広域化の推進に関する基本的な事項
次のような事項に留意して定めること。

① 推進計画は、広域化を推進する必要があると認められる市町村について、その広域化を計画的かつ円滑に推進することを目的とする。

② 広域化は、消防の体制の整備及び確立を図るため推進するものであること。

③ 広域化は、市町村、住民、消防関係者等の理解を得て進めていくことが肝要であり、これらの関係者のコンセンサスを得ながら推進していくように努めること。

(2) 市町村の消防の現況及び将来の見通し
次のような事項に留意して定めること。

① 広域化を推進するに当たつては、まずは、市町村が自らの消防本部を取り巻く状況と自らの消防力を分析し、広域化や連携・協力といった手段を織り込みながら、今後のあるべき姿を考えることが必要であるため、都道府県が市町村に対し、当該分析・検討を行うために積極的な助言・支援を行う必要があること。

② 市町村の分析・検討を踏まえた上で、消防組織法が改正された平成十八年以降の約十年間における、推進計画に対する広域化の進捗、広域化消防本部の効果、各都道府県における消防需要の動向等を振り返り、消防力の実情、消防本部の財政、人事管理等の状況などの市町村の消防の現況を把握し、改めて広域化の必要性を十分認識した上で、今後の人口の減少、消防需要の変化、消防職員の高齢化等の進展も踏まえ、おおむね十年後の消防体制の姿を見通す必要があること。

(3) 広域化対象市町村の組合せ
本指針三、2に基つき定めること。

なお、広域化対象市町村の組合せに基づく本指針三、3に定める消防広域化重点地域の指定等を行う場合については、本指針三、3によること。

また、都道府県が推進する必要があると認める自主的な消防の連携・協力の対象となる市町村（以下「連携・協力対象市町村」という。）についても、本指針三、4に基つき定めること。

(4) 自主的な市町村の消防の広域化を推進するために必要な措置に関する事項
本指針三、5に基つき定めること。

(5) 広域化後の消防の円滑な運営の確保に関する基本的な事項
本指針四を参考にしつつ、各都道府県の実情を

勘案して定めること。

(6) 市町村の防災に係る関係機関相互間の連携の確保に関する事項

本指針五を参考にしつつ、各都道府県の実情を勘案して定めること。

なお、都道府県が推進計画を定めるに当たっては、都道府県に、都道府県、市町村の代表、消防機関の代表(常備消防・消防団)、住民代表及び学識経験者等で構成する委員会等の協議機関を設置するなどして、関係者のコンセンサスの形成に努めることが重要である。

また、都道府県が推進計画を定め、又は変更しようとするときは、あらかじめ、関係市町村の意見を聴かなければならないとされているところである。

2 推進計画に定める広域化対象市町村の組合せに関する基準

各都道府県は、以下の点を十分考慮した上で、推進計画において、広域化対象市町村及びその組合せを定めること。

(1) 市町村の消防の広域化の規模

一般論としては、消防本部の規模が大きいほど火災等の災害への対応能力が強化されることとなり、また組織管理、財政運営等の観点からも望ましい。現行の推進計画において、一の都道府県全体を一つの単位とした区域(以下「全県一区」という。)での広域化を規定した都道府県が一定数あるが、全県一区での広域化は理想的な消防本部のあり方の一つとも言える。

その上で、現状を踏まえつつ、これからの消防に求められる消防力、組織体制、財政規模等に鑑みると、管轄人口の観点から言えばおおむね三十万以上の規模を一つの目標とすることが適当である。

しかしながら、各市町村は、管轄面積の広狭、交通事情、島嶼部などの地理的条件、広域行政、地域の歴史、日常生活圏、人口密度及び人口減少などの人口動態等の地域の事情をそれぞれ有しているため、広域化対象市町村の組合せを検討する際には、上記の規模目標には必ずしもとらわれず、小規模消防本部の広域化を着実に推進するという観点から、これらの地域の事情を十分に考慮する必要がある。

しかしながら、本指針一、一でも述べたように、消防の広域化を推進し、小規模消防本部の体制強化を図ることがこれまで以上に必要となっている

ことに鑑み、小規模消防本部及び消防吏員数が百人以下の消防本部については、可能な限り広域化対象市町村に指定する方向で検討する必要がある

とりわけ、消防吏員数が五十人以下の消防本部(以下「特定小規模消防本部」という。)については、原則、広域化対象市町村に指定する方向で検討する必要がある。

以上のことを踏まえ、まずは、都道府県内の消防のあるべき姿を議論し、おおむね十年後までに広域化すべき組合せを定めた上で、推進期限までに広域化すべき組合せを定めるものとする。その際、必要に応じ、段階を踏んだ組合せや実現可能性のある複数の組合せも定めるものとする。

(2) 配慮すべき事項

非常備市町村の常備化の必要性に配慮する必要がある。

3 消防広域化重点地域の指定等

(1) 消防広域化重点地域の指定の趣旨

十分な消防防災体制が確保できないおそれがある市町村等を消防広域化重点地域に指定し、他の広域化対象市町村よりも先行して集中的に広域化を推進することにより広域化対象市町村の組合せにおける自主的な市町村の消防の広域化を着実に推進するものとする。

(2) 都道府県知事による消防広域化重点地域の指定及び公表等

都道府県知事は、広域化対象市町村のそれぞれの組合せを構成する市町村の全部又は一部からなる地域のうち、広域化の取組を先行して重点的に取り組む必要があるものとして次に該当すると当該都道府県知事が認めるものを消防広域化重点地域として指定することができる。

① 今後、十分な消防防災体制が確保できないおそれがある市町村を含む地域

② 広域化の気運が高い地域

なお、推進期限である平成三十六年四月一日までに広域化を実現させべき地域は消防広域化重点地域に指定することが望ましく、その中でも、具体的には、次に掲げる地域について、消防広域化重点地域に可能な限り指定することが望ましい。

(一) 特定小規模消防本部

(二) 非常備市町村

(三) 広域化を希望しているが、広域化の組合せが決まっていない消防本部
広域化対象市町村の一の組合せを越える地域を

消防広域化重点地域に指定しようとするときは、当該指定しようとする地域が広域化対象市町村の一の組合せの全部又は一部を構成するよう、事前又は事後に推進計画の変更を行うものとする。

なお、消防広域化重点地域の指定を行ったときはその旨を、当該消防広域化重点地域に対する都道府県の支援の内容とともに公表するものとする。

(3) 関係市町村の意見の聴取等
消防広域化重点地域の指定に当たっては、都道府県知事は、あらかじめ関係市町村の意見を聴くものとする。

また、消防広域化重点地域に指定された市町村以外の市町村から消防広域化重点地域の指定を求める意見等があった場合においては、都道府県知事は当該意見等を尊重し、当該市町村を対象とする消防広域化重点地域の指定等に努めるものとする。

(4) 消防広域化重点地域の指定の変更
(2)及び(3)は、消防広域化重点地域の指定の変更について準用する。

4 推進計画に定める連携・協力対象市町村の組合せに関する基準

(1) 消防の連携・協力の意義

消防の広域化は消防力の維持・強化に当たって最も有効な方策であるが、消防の広域化の実現にはなお時間を要する地域もあり、そのような地域においては、消防の広域化につなげるべく、消防の連携・協力を行うことが必要である。

(2) 推進計画へ位置付ける上での基本的な考え方
連携・協力対象市町村の組合せを定めるに当たっては、消防の広域化と同様に地域の実情を考慮し、市町村の自主的かつ多様な消防の連携・協力を尊重する必要がある。

しかしながら、消防の連携・協力が喫緊の最重要課題である消防の広域化につながるものであるということとを十分に認識した上で、どの市町村間でどのような連携・協力が可能であるかについて、都道府県においても広い視野で検討することが必要である。

なお、推進計画に位置付けることが望ましい消防の連携・協力としては、高機能消防指令センターの共同運用、消防用車両・消防署所の共同整備等が挙げられる。

(3) 高機能消防指令センターの共同運用

高機能消防指令センターを共同運用することにより、整備費の削減、現場要員の充実等を図ることがで

きることに加え、災害情報を一元的に把握し、効果的・効率的な応援態勢が確立されるなどの効果が見込まれる。また、現場に最先着できる隊に自動で出動指令を行ういわゆる「直近指令」、出動可能な隊がなくなつた場合に高機能消防指令センターを共同運用している他消防本部の隊に自動で出動指令を行ういわゆる「ゼロ隊運用」などの高度な運用により、区域内の消防力を大きく向上させることも可能である。

さらには、人事交流が生まれるなど消防本部間の垣根を低くする効果もあり、消防の連携・協力の中でも、消防の広域化につながる効果が特に大きい。

以上のことから、高機能消防指令センターの共同運用については、広域化の推進と併せて、積極的に検討する必要がある。

都道府県においては、上記のことを十分に認識した上で、まずは市町村の高機能消防指令センターの更新時期を把握し、消防本部等と緊密に連携し、高機能消防指令センターの共同運用について検討し、その結果を推進計画に反映させることが必要である。

なお、高機能消防指令センターを共同運用する規模については、広域化と同様、一般論としては、規模が大きいほど望ましいことにも鑑み、面積、人口等において、標準的な規模の都道府県であれば、原則、全県一区とする必要がある。また、既に高機能消防指令センターを共同運用している地域にあつては、上記のような高度な運用により、その効果を最大限に生かすことが望ましい。

5 自主的な市町村の消防の広域化を推進するために必要な措置に関する基準

消防組織法第三十三条において、都道府県知事が行う市町村相互間における必要な調整及び情報の提供その他の必要な援助等について定められていることを踏まえ、各都道府県は、推進計画において、当該各都道府県における自主的な市町村の消防の広域化を推進するために必要な措置を定めること。

- ① 広域化を推進するための体制の整備
- ② 住民及び関係者に対する情報提供、普及啓発等
- ③ 各市町村に対する情報提供、相談対応体制の確保、職員への派遣等
- ④ 関係市町村間の協議の積極的な推奨、仲介、調整等
- ⑤ 広域化に関する調査研究

等が考えられるところであり、これらを参考にしつつ、必要な措置を定め、都道府県として広域化の推進に積極的に取り組むこと。

四 広域化後の消防の円滑な運営の確保に関する基本的な事項

- 1 広域化後の消防の体制の整備
市町村の消防の広域化が行われた後に、広域化の効果を十分に發揮することができるよう、広域化後の消防において一元的な部隊運用、出動体制、事務処理等が行われることが重要である。

- 2 構成市町村等間の関係
市町村の消防の広域化は、主に組合又は事務委託により行われることとなるが、その場合広域化後の消防は、組合の構成市町村又は受託市町村若しくは委託市町村（以下「構成市町村等」という。）との意思疎通及び情報共有に特に意を用いる必要がある。

- 3 広域化後の消防の体制の整備のために考えられる方策
このように、広域化後の消防の円滑な運営の確保のためには、広域化後の消防の体制を適切に整備することが重要であるが、そのための方策としては、例えば、以下のような事項について、構成市町村等間において十分協議の上、可能な限り、組合又は事務委託の規約、規程等において定めることとすることが有効である。

- ① 経常的経費、投資的経費それぞれについての構成市町村ごとの負担金の額又は負担割合等に係る基本的なルール
- ② 職員の任用、給与、教育訓練等に関する計画を策定すること。
- ③ 中長期的な整備費用の見直しを含めた消防力の整備計画を策定すること。
- ④ 部隊運用、指令管制等に関する計画を策定すること。
- ⑤ 災害時等に構成市町村の長と消防長、消防署長又は消防団長とが緊密に連携することができるよう、相互連絡、情報共有等に関する計画を策定すること。
- ⑥ 構成市町村間の連絡会議の定期的開催、消防長の専決対象の明確化等構成市町村間の迅速な意見調整を可能とするための仕組みを構築すること。

- ⑦ 組合の運営に関し、住民の意見を反映できるようにすること。
- (2) 事務委託の方式による場合

- ① 委託料に係る基本的なルール
- ② 災害時等に委託市町村の長と消防長、消防署長又は消防団長とが緊密に連携することができるよう、相互連絡、情報共有等に関する計画を策定すること。
- ③ 消防事務の運営に関し、住民の意見を反映できるようにすること。

- 4 推進計画及び広域消防運営計画への記載
以上の点を踏まえ、都道府県においては、必要な事項を推進計画において定めるとともに、広域化対象市町村においては、広域化に係る協議の際にこれらの事項について十分協議の上、可能な限り広域消防運営計画において定めること。

五 市町村の防災に係る関係機関相互間の連携の確保に関する事項

- 1 消防団との連携の確保
消防団は、地域に密着した消防防災活動を行うという特性上、本指針一、二のとおり、消防組織法に基づき推進する自主的な市町村の消防の広域化の対象とされておらず、従来どおり、消防力の整備指針第三十七条に基づき、市町村の合併等消防団の沿革その他の特段の事情がある場合を除き、一市町村に一団を置くものとする。この場合、広域化後の消防本部と消防団との緊密な連携の確保が必要となる。

- ① 常備消防の管轄区域内の複数の消防団の団長の中から連絡調整担当の団長を指名することによる常備消防との一元的な連絡調整
- ② 平素からの各消防団合同又は常備消防を含めた訓練等の実施
- ③ 構成市町村等の消防団と当該構成市町村等の区域に存する消防署所との連携確保のための、消防署所への消防団との連絡調整担当の配置、定例的な連絡会議の開催等
- ④ 常備消防と消防団との連絡通信手段の確保以上のような方策を参考としつつ、地域の実情に応じて広域化後の消防本部と消防団との連携の確保を図ることが必要である。

2

防災・国民保護担当部局との連携の確保

防災・国民保護業務は、住民の安心・安全の確保という最も基本的かつ重要な業務であり、また、関係部局・関係機関が多岐にわたるため、それら全体を総合的に調整できる責任者が実施することが必要である。

この場合、市町村の消防の広域化を行うときには、広域化後の消防本部と構成市町村等の防災・国民保護担当部局との緊密な連携の確保が必要となる。

そのため、次のような具体的方策が考えられる。

- ① 夜間・休日等における市町村の防災業務について、初動時の連絡体制などを消防本部に事務委託
 - ② 各構成市町村等の長及び危機管理担当幹部と消防長及び消防署長による協議会の設置
 - ③ 各構成市町村等と当該構成市町村等の区域に存する消防署所との連携確保のための、定例的な連絡会議の開催、各市町村の災害対策本部への各消防署所の消防職員の派遣等
 - ④ 防災・国民保護担当部局と消防本部との人事交流
 - ⑤ 総合的な合同防災訓練の実施
 - ⑥ 防災・国民保護担当部局と消防本部との情報通信手段の充実による連絡体制の強化
 - ⑦ 防災行政無線の親機や遠隔操作機を消防本部の通信指令部門に設置することによる二十四時間体制の確保
- 以上のような方策を参考としつつ、地域の実情に応じて広域化後の消防本部と構成市町村等の防災・国民保護担当部局との連携の確保を図ることが必要である。

3

推進計画及び広域消防運営計画への記載

以上の点を踏まえ、都道府県においては、必要な事項を推進計画において定めるとともに、広域化対象市町村においては、広域化に係る協議の際にこれらの事項について十分協議の上、可能な限り広域消防運営計画において定めること。

市町村の消防の連携・協力に関する基本指針

第1 消防の連携・協力についての基本的な考え方

1 消防をとりまく課題とその対応方策

人口減少の進行により、人的・財政的な資源に限られる一方で、消防は、大規模火災、大規模地震、豪雨災害、火山災害、テロ災害等の複雑化・多様化する災害に適切に対応していかなければならない。

消防は、今後とも、人的・財政的な資源を有効活用し、将来にわたって持続可能な消防体制を整備・確立していく必要がある。

そのため、常備消防は、社会経済情勢の変化、各般の技術の進展等に応じて、より高度・専門的な活動を実施できるようにしていかなければならない。

これまで、消防庁では、常備消防の体制の整備・確立については、「消防の広域化」（消防組織法の規定に基づき実施される消防組織の統合を行うもの。以下同じ。）を推進してきたところであり、最も有効な方策である消防の広域化については、より積極的に進めていくこととする。

一方で、消防の広域化は、組織の統合に向けた調整が困難である等、実現にはなお時間を要する地域もあり、そのような地域においては、消防事務の性質に応じて事務の一部について柔軟に連携・協力すること（以下「消防の連携・協力」という。）により、消防力の強化に効果を生み出していくことが可能となる。

2 消防の連携・協力の推進

(1) 消防の連携・協力の必要性等

(ア) 必要性と効果

直ちに広域化を進めることが困難な地域においても必要となる消防力を確保・充実していくため、消防事務の性質に応じて事務の一部について連携・協力を推進することが必要である。

消防の連携・協力による効果は、連携・協力を行う消防事務の種類やその方式によって様々だが、一般的に、

- 災害対応能力の向上
- 施設整備や維持管理に係る経費の効率的な配分
- 人員の効率的な配置、現場要員の増強（※）
- 消防本部間の人材交流による職員の能力・職務意欲の向上（※）

といった効果がある。（※）の事項については、消防の広域化を行った場合と異なり、その効果は消防の連携・協力を行う消防事務（指令の共同運用における指令業務など）にとどまるものの、当該事務の範囲では十分な効果が得られる。）

このように、消防の連携・協力による人的・財政的な資源の効率的な活用によって、現場要員の増強など消防力を充実強化することができる。

さらに、消防の連携・協力を進めていくことで、

- 職員間のつながり、意識の共有
- 広域的に消防事務を行うことの効果の実感
- 共同で消防事務の処理を行うという実績の蓄積

等の広域化を実現していくための下地が作られることとなる。こうしたことを契機として、消防力の確保・充実の方策としてより有効である消防の広域化を目指すことが適当である。

(イ) 連携・協力を進める上で留意すべき事項

- 消防力を充実強化していくことは喫緊の課題であり、実施することが可能な消防の連携・協力については早期に順次実施していくこと。
- 消防の連携・協力を進めるに当たっては、都道府県の境界を越えて、地理的なメリットのある消防本部間での連携・協力を検討すること。
- 複雑化・多様化する災害に対応できる高度かつ専門的な消防体制を確保するためには、地域の中核となる比較的大規模な消防本部が中心となり、近隣の消防本部との広域的な連携を図ること。
- 住民の防災意識が低下し、地域防災力の低下につながるがないよう、地域の住民や企業などの自発的な防災活動への参加を継続して推進するなど、地域防災力を向上させるために、常備消防がさらに積極的に取り組んでいくこと。

(2) 消防の連携・協力の推進方策

消防の連携・協力を推進するため、消防の連携・協力の実施主体となる市町村、都道府県及び国はそれぞれ以下の役割を果たすこととする。

(ア) 市町村の役割

市町村は、消防の連携・協力を行おうとするときは、協議により消防の連携・協力の円滑な実施を確保するための計画（以下「連携・協力実施計画」という。）を作成するものとする。

連携・協力実施計画には、おおむね以下の事項について定めるものとする。

- 連携・協力の円滑な実施を確保するための基本方針

- 連携・協力をを行う消防事務の内容及び方法
- 連携・協力をを行う消防事務とそれ以外の消防事務の連携の確保に関する事項

市町村は、別紙「連携・協力実施計画に定める事項について」を参考

にし、管内の消防需要等の情勢分析を適切に行った上で、連携・協力実施計画を作成するものとする。

(イ) 都道府県の役割

都道府県は、地域の実情を考慮し、市町村の自主的かつ多様な消防の連携・協力を尊重する必要がある。

しかしながら、都道府県が消防組織法に基づき広域化を推進すべき立場にあり、消防の連携・協力が喫緊の最重要課題である消防の広域化につながるものであるということ十分に認識した上で、どの市町村間でどのような連携・協力が可能であるかについて、都道府県においても、広い視野で検討し、推進計画において、都道府県が推進する必要があると認める自主的な消防の連携・協力の対象となる市町村（以下「連携・協力対象市町村」という。）を定めるものとする。

なお、推進計画に位置付けることが望ましい消防の連携・協力としては、高機能消防指令センターの共同運用（以下「指令の共同運用」という。）、消防用車両・消防署所の共同整備等が挙げられる。とりわけ、指令の共同運用については、消防の広域化につなげる効果が特に大きいことから、市町村の高機能消防指令センターの更新時期を把握し、消防本部等と緊密に連携し、指令の共同運用について検討し、その結果を推進計画に反映させることが必要である。

また、消防の広域化と同様、関係市町村間の必要な調整、情報の提供その他の必要な支援を行うものとする。

(ウ) 消防庁の役割

消防の連携・協力の具体的なメリットや、連携・協力する消防事務の具体的内容と当該連携・協力を実施するための地方自治法上の手法について、各消防本部の十分な理解を得ることが必要であり、そのため、消防庁において、全国レベルでの研修会の開催、個別の消防本部に対する働きかけやアドバイザーの派遣などソフト面の支援を積極的に行うこととする。

また、消防の連携・協力をを行う地方公共団体の財政運営に支障が生じることのないよう、次の財政措置を講じる。

- 連携・協力をを行う市町村が、連携・協力実施計画に基づき実施する高機能消防指令センターの整備・改修について緊急防災・減災事業債の対象とする。
- 連携・協力をを行う市町村が、連携・協力実施計画に基づき実施する消防用車両等の整備について防災対策事業債の対象とする。
- 本指針に基づく消防指令業務の共同化に伴う高機能消防指令センターの整備については、消防防災施設整備費補助金の交付の決定に当たって特別の配慮を行う。
- 本指針に基づく共同化に伴う緊急消防援助隊設備の整備については、緊急消防援助隊設備整備費補助金の交付の決定に当たって特別の配慮を行う。

(3) 消防の連携・協力の具体例

消防の連携・協力を実施するに当たっては、地域の災害特性や消防需要の見通し、地形的な状況等について把握分析しながら、関係する市町村において積極的な検討を実施していくことが必要である。

地域における検討の参考となるよう、下の（ア）～（カ）のとおり消防の連携・協力の具体例を示す。なお、消防の連携・協力は、以下の6つの例以外のもも考えられ、消防体制の整備・確立に向けて地域の自主的かつ積極的な検討が必要となる。

(ア) 指令の共同運用

指令の共同運用は、既に多くの消防本部で実施されているが、全国的な広がりには依然として不十分であり、消防の連携・協力の一類型として、今後も積極的に検討を進めていく必要がある。

指令の共同運用を行うことで、災害情報を一元的に把握し、効果的・効率的な応援体制が確立されることや、消防本部間で災害情報の様式を統一することによって、災害情報の統計資料としての活用も容易になること等の効果がある。

なお、指令の共同運用の実施に際しては、現場に再先着できる隊に自動で出動指令を行ういわゆる「直近指令」、出動可能な隊がなくなった場合に高機能消防指令センターを共同運用している他消防本部の隊に自動で出動指令を行ういわゆる「ゼロ隊運用」などの高度な運用を併せて行うことで、地域の消防体制の向上に一層資するものとなる。既に指令の共同運用を実施している消防本部も含め、上記のような高度な運用によるより効果的・効率的な部隊運用について検討することが望ましい。

また、指令の共同運用を実施する規模については、広域化と同様、一般論としては、規模が大きいほど望ましいことにも鑑み、面積、人口等において、標準的な規模の都道府県であれば、原則、全県一区（一の都道府県全体を一つの単位とした区域をいう。）とする必要がある。なお、地理的な事情等によりそれが困難な場合であっても、できる限り広域的な範囲での共同運用を目指すことが必要である。

(イ) 消防用車両の共同整備

はしご自動車や特殊災害車両等、出動頻度の高くない車両については、一定の圏域内で共同して整備し、当該圏域内の事案に対して出動する体制とすることによって、車両の購入費・維持管理費を効率化することができる。

また、複数の消防本部で共同整備することで、より高度な車両の配置が可能になり、複雑化・多様化する災害への対応能力の向上も期待できる。

(ウ) 境界付近における消防署所の共同設置

消防本部の管轄の境界付近において複数の消防本部がそれぞれ署所を配置しており、圏域全体で考えると非効率な配置になっている場合がある。こうした場合においては、署所を共同で設置することで、効果的・効率的に境界付近の消防力を確保することができる。

(エ) 高度・専門的な違反処理や特殊な火災原因調査等の予防業務における消防の連携・協力

予防業務については、高度・専門的な違反処理や特殊な火災原因調査等の業務について、各地域における予防業務の実情等に応じて、広域的な圏域での消防の連携・協力を図っていく必要がある。

また、一定の圏域内で消防の連携・協力を実施することによって、ノウハウの共有や職員の知識・技能の向上が図られる。

(オ) 専門的な人材育成の推進

救急や予防など、特に高度・専門的な知識・技能が求められる業務については、中核的な消防本部が近隣の消防本部の職員を研修生として受け入れることにより専門的な人材を育成し、圏域内の消防力の向上を図ることができる。

(カ) 応援計画の見直し等による消防力の強化

複数の消防本部が連携・協力して、応援計画の見直しや訓練の実施、車両・資機材の配備調整を行うことにより、大規模災害発生時に、早期に必要な部隊を集結させ、活動能力の大幅な増強を図るとともに、災害対応をより実効性あるものとする事ができる。

第2 消防の連携・協力を推進する期間

消防の連携・協力に係る積極的な取組を促す観点から、推進期限を設けて取り組むこととする。

大規模災害やテロ災害は全国どの地域において、いつ発生してもおかしくないことから、早急な消防の連携・協力の取組が必要である。一方、消防の連携・協力の実施に当たっては一定の準備期間も必要であることから、消防の連携・協力の推進期限については、消防の広域化の推進期限も踏まえ、平成36年4月1日までとする。

第3 市町村が連携・協力実施計画を作成する際の留意事項

1 検討体制の整備

消防事務は、住民の生命、身体及び財産を保護するという最も基本的なサービスであり、サービスを直接受ける住民に大きな影響を与えるものであるため、消防の連携・協力を検討する際には、関係消防本部のみならず、必要に応じて都道府県、市町村、消防団、自主防災組織、学識経験者等の多様な主体が参画する協議機関を設けることも考えられる。

なお、その際の協議機関としては、地方自治法252条の2の2に基づく協議会のほか、任意の協議組織を設けることも考えられる。

2 連携・協力実施計画の早期の策定

消防の連携・協力の推進による消防力の確保・充実をいち早く実現するために、各消防本部においては、消防の連携・協力を実施しようとする場合には、できる限り早期に連携・協力実施計画を作成することが望ましい。

3 モデル事業の実施結果を踏まえた検討

消防の連携・協力について、具体的な先進事例を積み上げ、より効果的な推進につなげるため、国の委託事業として、平成29年度に連携・協力のモデル構築事業を実施するので、その状況も参考にしながら計画を作成すること。

連携・協力実施計画に定める事項について

消防の連携・協力の円滑な実施を確保するための計画（以下「連携・協力実施計画」という。）に定めるべき事項については、以下のとおりとする。

なお、各地域の実情に応じ、その他の事項について定めることも差し支えない。

1 連携・協力の円滑な実施を確保するための基本方針

(1) 連携・協力を行おうとする地域における消防の現況・課題、将来予測

消防の連携・協力の実施を検討するに当たり、まず、連携・協力を行おうとする地域の各消防本部の消防力・消防需要の現況や課題、将来予測を分析しておくことが必要であり、具体的には、

- 消防需要の現況と将来予測
- 消防力の現況と将来予測
- 財政の現況と将来予測
- 組織・人員の現況と将来予測

等について分析の上、計画に記載する。

(2) 連携・協力実施後の消防についての基本的な方針

(1) の分析を踏まえ、連携・協力によって目指すべき消防の姿についての基本的な考え方を定めておく。

具体的には、連携・協力の実施によって、初動対応部隊の増強、特殊な車両の整備等による災害対応能力の向上、現場到着時間の短縮、人材育成の充実等の目指すべき消防の姿について、基本的な方針を定めることが考えられる。また、連携・協力を契機として、他の消防事務の連携・協力をさらに進めていくことや、将来的な広域化に向けた議論を進めていくということを内容に盛り込むことも考えられる。

(3) 連携・協力実施の検討体制

連携・協力の実施までの準備期間において関係消防本部が協議する体制について定める。また、連携・協力の実施後において各種事項を調整する際の協議体制についても定める。

(4) 実施スケジュール

消防の連携・協力の実施に当たっては、各消防本部における組織体制の変更や車両・施設等の整備等を計画的に進めるため、あらかじめスケジュールを定める。

また、連携・協力する事務が複数ある場合には、事務ごとの実施時期についても明確にする。

2 連携・協力を行う消防事務の内容及び方法

消防事務のうち、連携・協力を行う事務の内容及び方法について、連携・協力を実施する消防事務ごとに次の(1)から(6)までの事項が明確になるよう計画に定める。

(1) 連携・協力を行う消防事務の内容

連携・協力を行う事務の内容を明示する。

(2) 連携・協力を行う地域

境界付近における消防署所の共同設置など、一部の地域に限定して連携・協力を行う場合、連携・協力を実施する地域を明確にする。

(3) 連携・協力を行う方法

(1) で定めた連携・協力を行う消防事務ごとに、活用する地方自治法又は消防組織法上の方法を明示する。

(4) 連携・協用に要する人員の配置

連携・協力を行う消防事務に従事する人員の必要数及び配置部署並びに各本部から派遣する人員数について定める。

(5) 連携・協用に伴う車両、施設等の整備計画

連携・協力を行う消防事務に直接関係する車両、施設等の整備計画について定める。

(6) 連携・協用に係る費用の見通しと分担方法

連携・協力を実施するに当たり必要となる人件費、車両・施設等の整備費、維持管理費等について、総額の見通しと消防本部間での分担方法について定める。

3 連携・協力を行う消防事務とそれ以外の消防事務の連携の確保に関する事項

連携・協力の実施に当たって、連携・協力を実施していない他の消防事務との連携を十分に確保しておくことが必要であり、情報の共有・伝達体制の整備方法等、管内の消防事務全体を円滑に実施するために必要となる事項について定める。

各都道府県知事 } 殿
各指定都市市長 }

消防庁長官

市町村の消防の広域化に関する基本指針の一部改正について（通知）

市町村の消防の広域化に関する基本指針の一部を改正する件（平成30年消防庁告示第8号。以下「改正告示」という。）が平成30年3月30日に告示され、本日施行されました。

貴職におかれましては、下記事項に留意されるとともに、各都道府県にあつては、貴都道府県内の市町村（消防の事務を処理する一部事務組合等を含む。）に対して、この旨周知されるようお願いいたします。

なお、本通知は、消防組織法（昭和22年法律第226号）第37条に基づく助言として発出するものであることを申し添えます。

記

第1 主な改正内容

1 市町村の消防の広域化の必要性（改正告示による改正後の市町村の消防の広域化に関する基本指針（平成18年消防庁告示第4号。以下「基本指針」という。）一、1）人口減少社会の到来、低密度化・高齢化の進展等に鑑み、消防力の維持・強化に当たって最も有効な消防の広域化を推進し、小規模消防本部の体制強化を図ることがこれまで以上に必要となっており、喫緊の最重要課題となっていることを追記したこと。

2 平成30年度以降の市町村の消防の広域化の推進の方向性（基本指針一、3）

(1) 方向性の概要

まずは、市町村が自らの消防本部を取り巻く状況と自らの消防力を分析し、今後のあるべき姿を考えた上で、都道府県が、当該分析を生かしつつ、積極的にリーダーシップを取り、都道府県内の消防体制のあり方を再度議論し、推進計画を再策定する必要があることとしたこと。

(2) 都道府県の役割

消防広域化重点地域について、これまで以上に積極的に指定することとしたこと。また、消防事務の一部について柔軟に連携・協力を行うこと（以下「消防の連携・協力」という。）についても推進していくものとし、必要な支援を行う役割が期待されることを追記したこと。

3 財政措置

(1) 広域化関連事業（基本指針一、4、(5)、①）

広域化関連事業に対する財政措置に関して、消防広域化重点地域に対するものに重点化して行うことを明記したこと。

(2) 連携・協力関連事業（基本指針一、4、(5)、②）

連携・協力関連事業に対する財政措置を追記したこと。

4 自主的な市町村の消防の広域化を推進する期間（基本指針二）

平成36年4月1日を期限として消防の広域化を推進することとしたこと。

5 推進計画に定める市町村の組合せ及び都道府県における必要な措置に関する基準

(1) 市町村の消防の現況及び将来の見通し（基本指針三、1、(2)）

都道府県において、市町村が消防の現況の分析・今後のあるべき姿の検討を行うために積極的な助言・支援を行う必要があることに留意することとしたこと。

また、市町村の分析・検討を踏まえた上で、過去約10年間における推進計画に対する広域化の進捗、広域化消防本部の効果、各都道府県における消防需要の動向等を振り返り、市町村の消防の現況を把握し、改めて広域化の必要性を十分認識した上で、おおむね10年後の消防体制の姿を見通す必要があることに留意することとしたこと。

(2) 広域化対象市町村の組合せ（基本指針三、1、(3)）

連携・協力対象市町村についても、基本指針三、4に基づき定めることとしたこと。

(3) 市町村の消防の広域化の規模（基本指針三、2、(1)）

一の都道府県全体を一つの単位とした区域（以下「全県一区」という。）での広域化が理想的な消防本部のあり方の一つであることを追記したこと。

また、管轄人口10万未満の小規模な消防本部及び消防吏員数が100人以下の消防本部については、可能な限り広域化対象市町村に指定する方向で検討する必要があることとしたこと。さらに、消防吏員数が50人以下の消防本部（以下「特定小規模消防本部」という。）については、原則、広域化対象市町村に指定する方向で検討する必要があることとしたこと。

上記のことを踏まえ、まずは、都道府県内の消防のあるべき姿を議論し、おおむね 10 年後までに広域化すべき組合せを定めた上で、推進期限までに広域化すべき組合せを定めるものとする事としたこと。また、必要に応じ、段階を踏んだ組合せや実現可能性のある複数の組合せも定めるものとする事としたこと。

6 消防広域化重点地域の指定（基本指針三、3、(2)）

推進期限までに広域化を実現させるべき地域は消防広域化重点地域に指定することが望ましく、その中でも、具体的には、次に掲げる地域について、消防広域化重点地域に可能な限り指定することが望ましいこととしたこと。

- (1) 特定小規模消防本部
- (2) 非常備市町村
- (3) 広域化を希望しているが、広域化の組合せが決まっていない消防本部

7 推進計画に定める連携・協力対象市町村の組合せに関する基準

(1) 推進計画へ位置付ける上での基本的な考え方（基本指針三、4、(2)）

連携・協力対象市町村の組合せを定めるに当たっては、消防の連携・協力が広域化につながるものであるということ十分に認識した上で、どの市町村間でどのような連携・協力が可能であるかについて、都道府県においても、広い視野で検討することが必要であることとしたこと。

(2) 高機能消防指令センターの共同運用（基本指針三、4、(3)）

高機能消防指令センターの共同運用が、消防の連携・協力の中でも、消防の広域化につなげる効果が特に大きいこと等を十分に認識した上で、まずは市町村の高機能消防指令センターの更新時期を把握し、消防本部等と緊密に連携し、高機能消防指令センターの共同運用について検討し、その結果を推進計画に反映させることが必要であることとしたこと。

また、高機能消防指令センターを共同運用する規模については、原則、全県一区とする必要があることとしたこと。

さらに、既に高機能消防指令センターを共同運用している地域にあつては、現場に再先着できる隊に自動で出動指令を行ういわゆる「直近指令」、出動可能な隊がなくなった場合に高機能消防指令センターを共同運用している他消防本部の隊に自動で出動指令を行ういわゆる「ゼロ隊運用」などの高度な運用により、その効果を最大限に生かすことが望ましいこととしたこと。

第2 留意事項

1 消防力カード（基本指針一、3・三、1、2 関連）

市町村が自らの消防本部を取り巻く状況と自らの消防力を分析し、今後のあるべき姿を考えるに当たっては、消防力カード（別添様式）を活用されたいこと。また、都道府県が推進計画を再策定する際には、市町村が作成した消防力カードを参考にされたいこと。

市町村は、都道府県が推進計画を再策定する期間にも鑑み、遅くとも平成 30 年 7 月までには、消防力カードを作成し、今後のあるべき姿を考える必要があること。その際、都道府県は、市町村に対し積極的な助言・支援を行う必要があること。

なお、消防力カードについては、策定後、都道府県を通し、消防庁に提出していただきたい。

2 推進計画の再策定

(1) 広域化の具体的な効果の検証（基本指針一、3・三、1、(2) 関連）

推進計画の再策定に当たっては、広域化の具体的な効果を、住民、議会等に分かりやすく説明することが望ましいこと。例えば、全県一区など、広域的な消防体制を取った場合の救急車の現場到着時間の短縮効果等のシミュレーションを行うこと等が有効である。

(2) 関係者のコンセンサスの形成（基本指針二、(1)・三、1）

推進計画の再策定に当たっては、都道府県に、都道府県、市町村の代表、消防機関の代表（常備消防・消防団）、住民代表及び学識経験者等で構成する委員会等の協議機関を設置するなどして、関係者のコンセンサスの形成に努めること。

3 財政措置

(1) 広域化関連事業（基本指針一、4、(5)、①）

平成 31 年度から、消防防災施設等整備費補助金及び緊急消防援助隊設備整備費補助金の交付の決定に当たって、配慮をする対象を拡充する予定としていること。

(2) 連携・協力関連事業（基本指針一、4、(5)、②）

連携・協力関連事業に関する財政措置について、平成 31 年度以降、連携・協力対象市町村として推進計画に定められている市町村に対するものに重点化することを検討することとしていること。

4 推進期限（基本指針二 関連）

広域化の推進期限を平成 36 年 4 月 1 日としているが、都道府県においては、平成 30 年度中までをめどとした約 1 年間で推進計画を再策定し、市町村においては、推進計画が策定されてから、平成 36 年 4 月 1 日までの約 5 年間で広域化を実現されたいこと。

第3 施行日

平成 30 年 4 月 1 日

各都道府県知事 } 殿
各指定都市市長 }

消 防 庁 長 官

市町村の消防の連携・協力の基本指針の一部改正について（通知）

市町村の消防の広域化の基本指針の一部を改正する件（平成 30 年消防庁告示第 8 号。以下「改正告示」という。）が平成 30 年 3 月 30 日に告示され、本日施行されたことに伴い、「市町村の消防の連携・協力に関する基本指針」の一部について別添資料のとおり改正しました。

貴職におかれましては、下記事項に留意されるとともに、各都道府県にあつては、貴都道府県内の市町村（消防の事務を処理する一部事務組合等を含む。）に対して、この旨周知されるようお願いいたします。

なお、本通知は、消防組織法（昭和 22 年法律第 226 号）第 37 条に基づく助言として発出するものであることを申し添えます。

記

第 1 主な改正内容

1 都道府県の役割（本通知による改正後の「市町村の消防の連携・協力に関する基本指針」（以下「連携・協力基本指針」という。）第 1、2、(2)、(イ)）

改正告示による改正後の市町村の消防の広域化の基本指針（以下「広域化基本指針」という。）を踏まえ、都道府県においても、高機能消防指令センターの共同運用などの市町村の消防の連携・協力について、広い視野で検討し、推進計画において、都道府県が推進する必要があると認める自主的な消防の連携・協力の対象となる市町村（以下「連携・協力対象市町村」という。）を定めるものとしたこと。また、消防の広域化と同様、関係市町村間の必要な調整、情報の提供その他の必要な支援を行うものとしたこと。

2 消防庁の役割（連携・協力基本指針第 1、2、(2)、(ウ)）

広域化基本指針を踏まえ、財政措置について追記したこと。

3 消防の連携・協力を推進する期間（連携・協力基本指針第 2）

消防の連携・協力の推進期限を、消防の広域化の推進期限も踏まえ、平成 36 年 4 月 1 日までとしたこと。

第 2 留意事項

消防の連携・協力に対する財政措置について、平成 31 年度以降、連携・協力対象市町村として推進計画に定められている市町村に対するものに重点化することを検討することとしていること。

消防の広域化及び連携・協力に関する答申

平成 29 年 3 月 15 日
消 防 審 議 会

平成 28 年 5 月 23 日付けで諮問のあった「人口減少や災害の多様化等社会環境の変化に対応し、必要となる消防力を維持していくため体制あり方等」について、別紙のとおり答申する。

平成 29 年 3 月 15 日

消防審議会長 田中 淳

消防庁長官 青木 信之

(別紙)

消防の広域化及び消防の連携・協力に関する答申

1 消防をとりまく課題とその対応方策

人口減少の進行により、人的・財政的な資源に限られる一方で、消防は、大規模地震、豪雨災害、火山災害、テロ災害等の複雑化・多様化する災害に適切に対応していかなければならない。また、平成 28 年 12 月に、地震以外を原因とする市街地における火災としては昭和 51 年の酒田の大火以来 40 年ぶりとなる大規模な火災が糸魚川市の木造の建築物が密集した地域において発生したところであり、このような火災にも的確に対応していかなければならない。消防は、今後とも、人的・財政的な資源を有効活用し、将来にわたって持続可能な消防体制を整備・確立していく必要がある。

このため、第 27 次消防審議会において審議・答申したとおり、住民や企業など地域の総力を結集した幅広い防災体制づくりや、より多様な方法で多彩な人材を消防団員として確保^{注1}していくことが必要となる。

常備消防については、社会経済情勢の変化、各般の技術の進展等に応じて、より高度・専門的な活動を実施できるようにしていかなければならない。

本答申は、この常備消防の体制の整備・確立について述べることとする。

これまで、常備消防の体制の整備・確立については、「消防の広域化」（消防組織法の規定に基づき実施される消防組織の統合を行うもの。以下同じ。）を推進してきたところであり、最も有効な方策である消防の広域化については、より積極的に進めていく必要がある。

一方で、消防の広域化は、組織の統合に向けた調整が困難である等、実現にはなお時間を要する地域もある。そのような地域においては、消防事務の性質に応じて事務の一部について柔軟に連携・協力すること（消防の連携・協力）により、消防力の強化に効果を生み出していくことが可能となる。

注1 地域防災力の充実強化については、「消防団を中核とした地域防災力の充実強化に関する法律」に基づき、着実に実施していく必要がある。

2 消防の連携・協力の推進

(1) 消防の連携・協力の推進の必要性等

(ア) 必要性と効果

直ちに広域化を進めることが困難な地域においても必要となる消防力を確保・充実していくため、消防事務の性質に応じて事務の一部について連携・協力を推進することが必要である。

消防の連携・協力による効果は、連携・協力を行う消防事務の種類やその方式によって様々だが、一般的に、

- 災害対応能力の向上
- 施設整備や維持管理に係る経費の効率的な配分^{注2}
- 人員の効率的な配置、現場要員の増強^{注2}
- 消防本部間の人材交流による職員の能力・職務意欲の向上^{注2}

といった効果がある。

注2 これらの事項については、消防の広域化を行った場合と異なり、その効果は消防の連携・協力をを行う消防事務（指令の共同運用における指令業務など）にとどまるものの、当該事務の範囲では十分な効果が得られる。

このように、消防の連携・協力による人的・財政的な資源の効率的な活用によって、現場要員の増強など消防力を充実強化することができる。

さらに、消防の連携・協力を進めていくことで、

- 職員間のつながり、意識の共有
- 広域的に消防事務を行うことの効果の実感
- 共同で消防事務の処理を行うという実績の蓄積

等の広域化を実現していくための下地が作られることとなる。こうしたことを契機として、消防力の確保・充実の方策としてより有効である消防の広域化を目指すべきである。

(イ) 連携・協力を進める上で留意すべき事項

- 消防力を充実強化していくことは喫緊の課題であり、実施することが可能な消防の連携・協力については早期に順次実施していくことが重要である。
- 消防の連携・協力を進めるにあたっては、都道府県の境界を越えて、地理的なメリットのある消防本部間での連携・協力を検討することも必要である。
- 複雑化・多様化する災害に対応できる高度かつ専門的な消防体制を確保するためには、地域の中核となる比較的大規模な消防本部が中心となり、近隣の消防本部との広域的な連携を図ることも必要である。
- 住民の防災意識が低下し、地域防災力の低下につながるような、地域の住民や企業などの自発的な防災活動への参加を継続して推進するなど、地域防災力を向上させるため、常備消防がさらに積極的に取り組んでいくことが重要である。

(2) 消防の連携・協力の推進方策

消防の連携・協力を推進するため、消防の連携・協力の実施主体となる市町村、都道府県及び国はそれぞれ以下の役割を果たすことが求められる。

なお、国が消防の連携・協力を推進する際には、消防の広域化に積極的に取り組んでいる地域における消防の広域化に向けた取組が阻害されないよう留意する必要がある。

(ア) 市町村の役割

市町村は、消防の連携・協力を行おうとするときは、協議により消防の連携・協力の円滑な実施を確保するための計画（以下「連携・協力実施計画」という。）を作成するものとするのが適当である。

連携・協力実施計画には、おおむね以下の事項について定めるものとする。

- 連携・協力の円滑な実施を確保するための基本方針
- 連携・協力をを行う消防事務の内容及び方法
- 連携・協力をを行う消防事務とそれ以外の消防事務の連携の確保に関する事項

(イ) 都道府県の役割

都道府県は、消防組織法に基づき広域化を推進すべき立場であり、また、市町村の自主的かつ多様な消防の連携・協力を尊重する観点から、消防の連携・協力について、組合せを示す等の計画の策定は行わないこととすることが適当であるが、管内の市町村の消防の連携・協力の取組について、必要な調整を行う等、都道府県には広域的な地方公共団体としてリーダーシップを発揮することが期待される。

(ウ) 国の役割

国は、消防の連携・協力を推進することについて、都道府県、市町村に対してその姿勢を明確にするとともに、市町村の連携・協力実施計画の作成に関し、次に掲げる基本的な指針を示すこととすることが適当である。

- 消防の連携・協力についての基本的な考え方
- 消防の連携・協力を推進する期間
- 市町村が連携・協力実施計画を作成する際の留意事項

また、消防の連携・協力の具体的なメリットや、連携・協力する消防事務の具体的な内容と当該連携・協力を実施するための地方自治法上の手法について、各消防本部の十分な理解を得ることが必要であり、そのため、消防庁は、全国レベルでの研修会の開催、個別の消防本部に対する働きかけやアドバイザーの派遣などソフト面の支援を積極的に行うべきである。

さらに、消防の連携・協力を行うにあたっては、指令の共同運用や車両の共同整備等のために一時的に大きな財政負担が生じること、及び連携・協力が進むことが全国の消防ひいては地方行財政全体の効率化に資するものであることから、地方財政措置による支援を行うことが適当である。

(3) 推進期間

消防の連携・協力に係る積極的な取組を促す観点から、推進期間を設けて取り組むことが必要である。

大規模災害やテロ災害は全国どの地域において、いつ発生してもおかしくないことから、早急な消防の連携・協力の取組が必要である。一方、消防の連携・協力の実施にあたっては一定の準備期間も必要であることから、消防の連携・協力の推進期間については、消防の広域化の推進期間も踏まえ、平成29年4月1日から平成35年4月1日までの6年間とすることが適当である。(最終的な目標の一つである消防の広域化の推進期間については、平成30年4月1日までとされているが、仮にこれまでと同様5年程度の延長をした場合には、平成35年4月1日までの期間となる。)

(4) 消防の連携・協力の具体例

消防の連携・協力を実施するにあたっては、地域の災害特性や消防需要の見通し、地形的な状況等について把握分析しながら、関係する市町村において積極的な検討を実施していくことが必要である。

地域における検討の参考となるよう、下の(ア)～(カ)のとおり消防の連携・協力の具体例を示す。なお、消防の連携・協力は、以下の6つの例以外のものも考えられ、消防体制の整備・確立に向けて地域の自主的かつ積極的な検討を期待する。

(ア) 指令の共同運用

指令の共同運用は、既に多くの消防本部で実施されているが、全国的な広がりには依然として不十分であり、消防の連携・協力の一類型として、今後も積極的に検討を進めていく必要がある。

指令の共同運用を行うことで、災害情報を一元的に把握し、効果的・効率的な応援体制が確立されることや、消防本部間で災害情報の様式を統一することによって、災害情報の統計資料としての活用も容易になること等の効果がある。

なお、指令の共同運用の実施に際しては、ゼロ隊運用^{注3}や直近指令^{注4}による自動応援を併せて行うことで、地域の消防体制の向上に一層資するものとなる。既に指令の共同運用を実施している消防本部も含め、自動応援等を活用したより効果的・効率的な部隊運用について検討することが望ましい。

また、指令の共同運用は、原則として都道府県で一つの指令センターとすることが望ましく、地理的な事情等によりそれが困難な場合であっても、できる限り広域的な範囲での共同運用を目指すことが必要である。

注3「ゼロ隊運用」：受援消防本部の署所に出動可能な車両がなくなった場合に、自動的に応援出動すること。

注4「直近指令」：災害等が発生した場合に、その要請場所に最先着できる隊に対して、管轄内であるか否かに関わらず、出動指令を行うこと。

(イ) 消防用車両の共同整備

はしご自動車や特殊災害車両等、出動頻度の高い車両については、一定の圏域内で共同して整備し、当該圏域内の事案に対して出動する体制とすることによって、車両の購入費・維持管理費を効率化することができる。

また、複数の消防本部で共同整備することで、より高度な車両の配置が可能になり、複雑化・多様化する災害への対応能力の向上も期待できる。

(ウ) 境界付近における消防署所の共同設置

消防本部の管轄の境界付近において複数の消防本部がそれぞれ署所を配置しており、圏域全体で考えると非効率な配置になっている場合がある。こうした場合においては、署所を共同で設置することで、効果的・効率的に境界付近の消防力を確保することができる。

(エ) 高度・専門的な違反処理や特殊な火災原因調査等の予防業務における消防の連携・協力

予防業務については、高度・専門的な違反処理や特殊な火災原因調査等の業務について、各地域における予防業務の実情等に応じて、広域的な圏域での消防の連携・協力を図っていく必要がある。

また、一定の圏域内で消防の連携・協力を実施することによって、ノウハウの共有や職員の知識・技能の向上が図られる。

(オ) 専門的な人材育成の推進

救急や予防など、特に高度・専門的な知識・技能が求められる業務については、中核的な消防本部が近隣の消防本部の職員を研修生として受け入れることにより専門的な人材を育成し、圏域内の消防力の向上を図ることができる。

(カ) 応援計画の見直し等による消防力の強化

複数の消防本部が連携・協力して、応援計画の見直しや訓練の実施、車両・資機材の配備調整を行うことにより、大規模災害発生時に、早期に必要な部隊を集結させ、活動能力の大幅な増強を図るとともに、災害対応をより実効性あるものとする事ができる。

消防の連携・協力の方策は、上記の例以外についても、各市町村で地域の実情に応じて柔軟に検討し、実施されることが望ましい。

3 消防の広域化の更なる推進

(1) 消防の広域化の推進の必要性

消防の広域化を実施することにより、消防業務の一層の高度化・専門化を進め、多数の部隊の機動的な運用による災害対応力の大幅な向上とともに現場到着時間の短縮を図ることが可能となる。また、人事ローテーションの多様化による組織の活性化など組織管理の点の効果も指摘されており、消防力の確保・充実のための方策として極めて有効である。

さらに、都道府県、市町村からも広域化を積極的に推進すべきとの意見もあり、今後とも、消防体制の整備・確立の手段として、最も有効なものとして推進していくことが重要である。

(2) 消防の広域化に関する課題への対応策

消防の広域化に向けた課題の解決に資するよう、これまで当審議会においてなされた議論を基に、対応策を参考資料2に示すこととし、主なものを以下のとおり抜粋する。

【主な課題と対応策】

広域化に関する課題	対応策
大規模消防本部が、消防力の流出を懸念している。	消防力の配置は、都市化の状況や起こりうる災害の態様に依りて適切に行うものであり、広域化の実施は消防力の流出にはつながらない。 また、広域化に際して、管内の消防力を均一にしなければならないわけではなく、地域の実情に応じて必要があれば、中長期的に管内の消防力を均一化させることも考えられる。
小規模消防本部が、周辺地域となり消防力が低下することを懸念している。	組合又は事務委託の規約・規定等において、将来的にも広域化前の小規模消防本部の地域において署所や職員を減らさないことを明記しておくことが有効。 熊本地震における益城町・西原村地域（「高遊原南消防本部」という一部事務組合を結成していたが、H26.4.1に熊本市に委託）での消防活動においても、熊本市消防局に委託し、広域化していたことによつて、従前よりも災害対応能力が向上している。そのような先進事例も踏まえて検討する必要がある。
広域化によつて署所が削減される、地元と消防の結びつきが弱まるといった懸念があり、反対する意見がある。	広域化は消防力の削減を目的として行うものではなく、消防署所の最適配置の観点から、必要なものは残される。また、構成市ごとの基幹消防署に消防団・自主防災組織に関する事務や窓口の機能を残すことによつて地元とのつながりを保つことができる。
職員の処遇の統一が困難である。	処遇の統一を段階的に行う等、既に広域化を実施した地域の実例を参考にしつつ、柔軟に対応する。

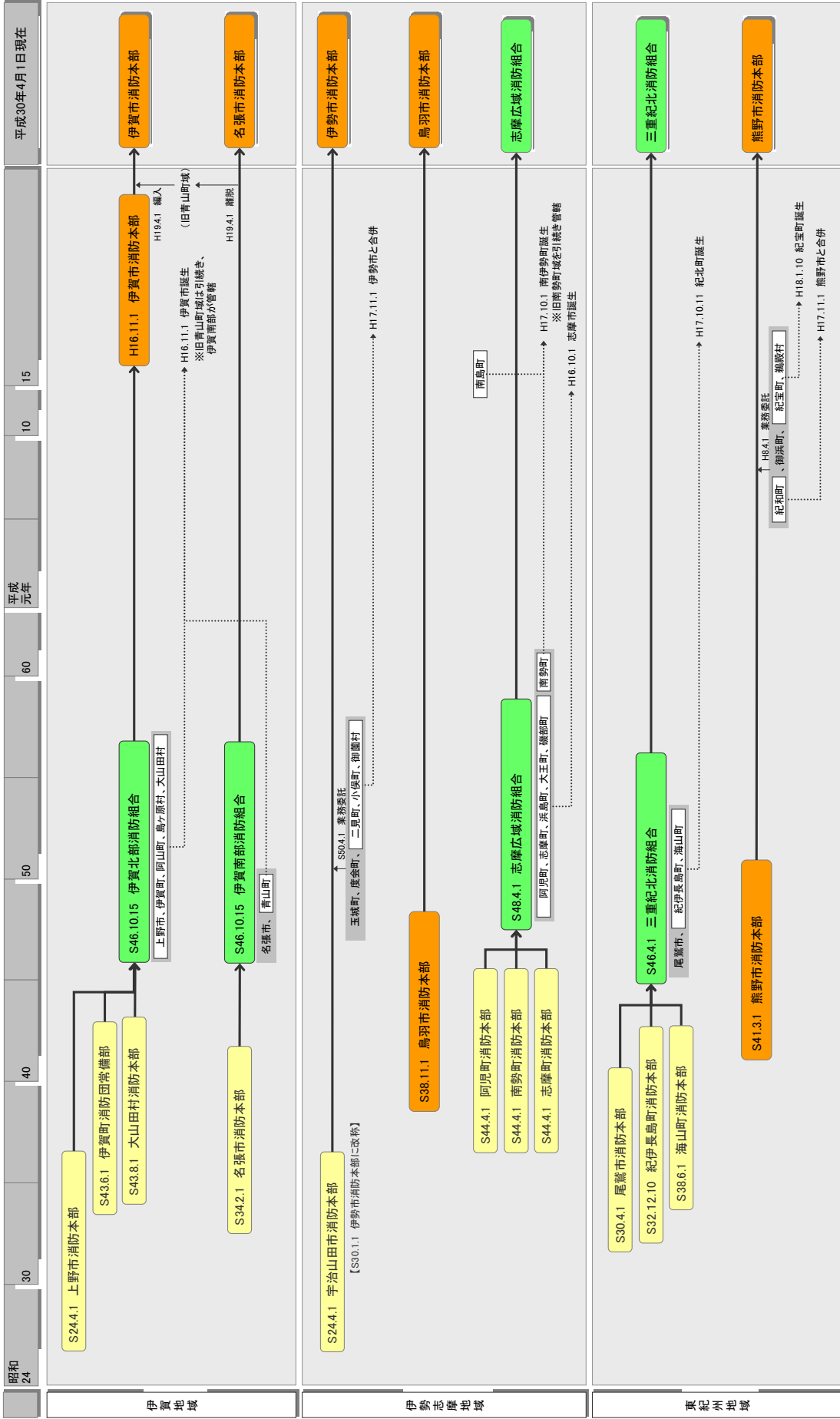
都道府県及び市町村においては、これらの対応策を踏まえ、広域化の実現に向けた議論を粘り強く進めていくことが求められる。

4 連携・協力実施計画と広域化推進計画の関係

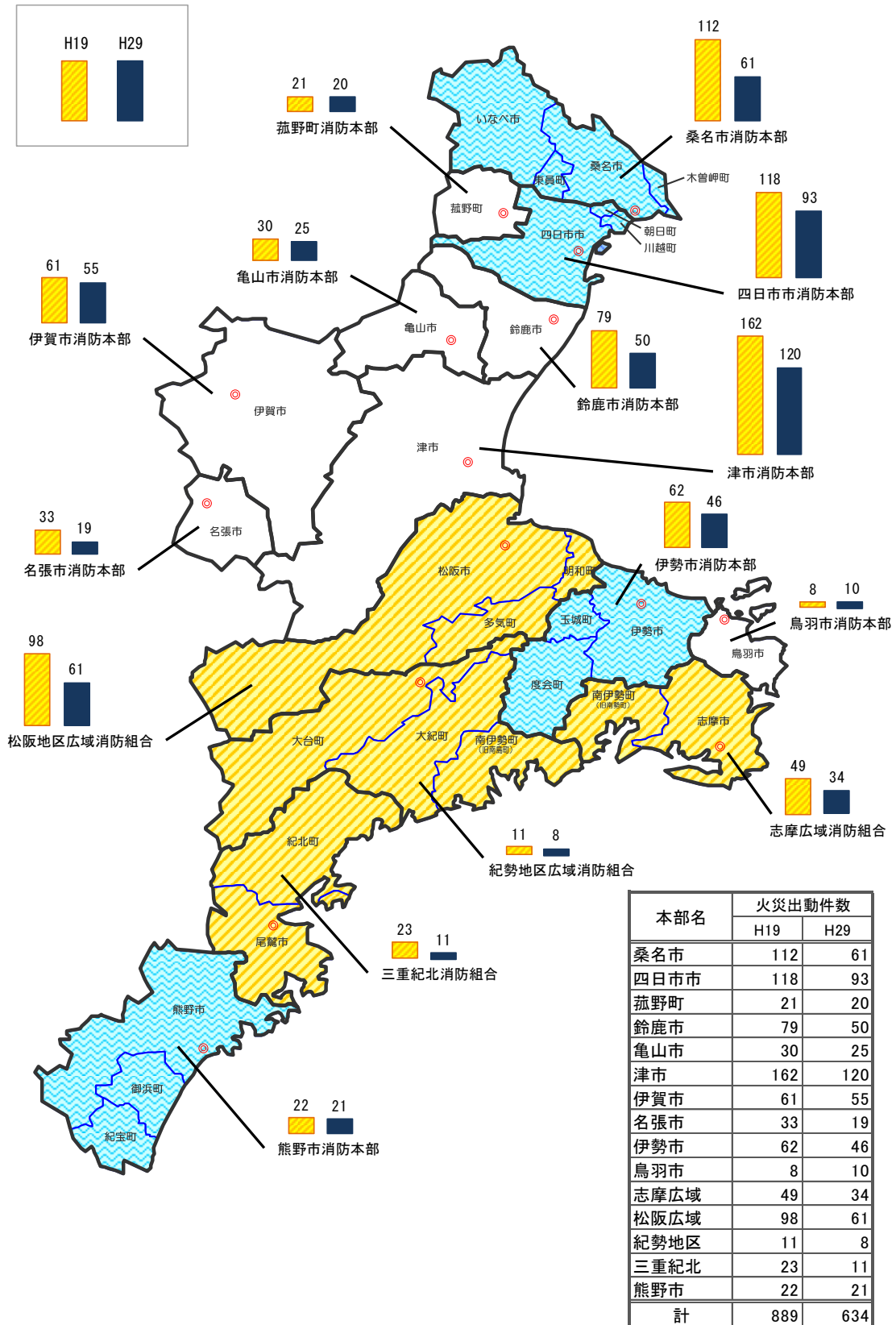
消防の連携・協力については、都道府県は計画を策定せず、消防の連携・協力をを行う市町村の組合せは市町村の自主的な判断に基づくこととなるため、都道府県が広域化推進計画に定める広域化の組合せと異なる組合せで消防の連携・協力が検討され、実施される場合が想定される。

こうした場合においても、将来、当該消防の連携・協力の組合せで広域化が行われることが確実になった場合には、都道府県が広域化推進計画を変更する必要があるため、その場合には、適切に対応する必要がある。

市町村合併の状況及び消防本部組織の変遷

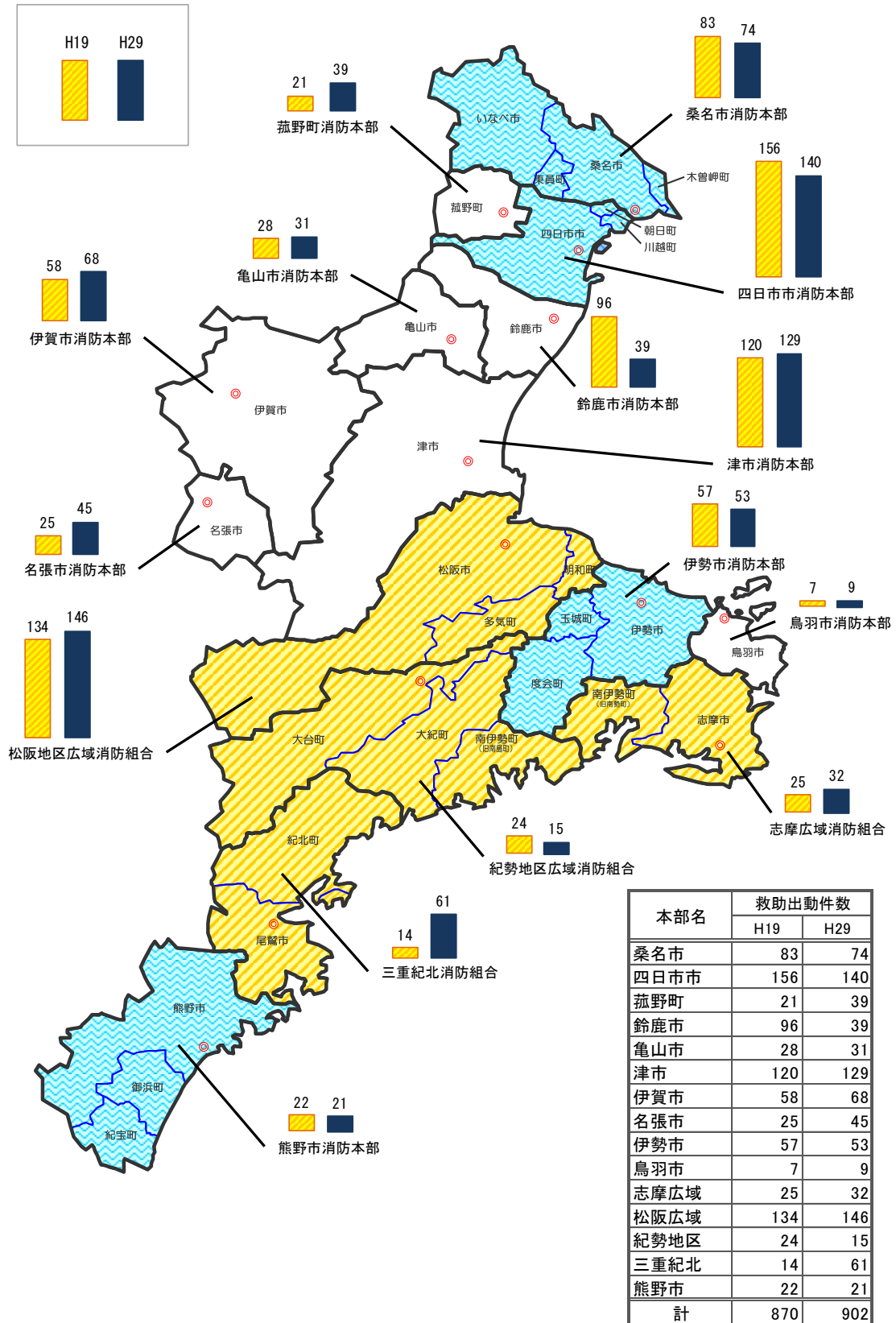


消防本部別火災出動件数 (平成19年と平成29年の比較)



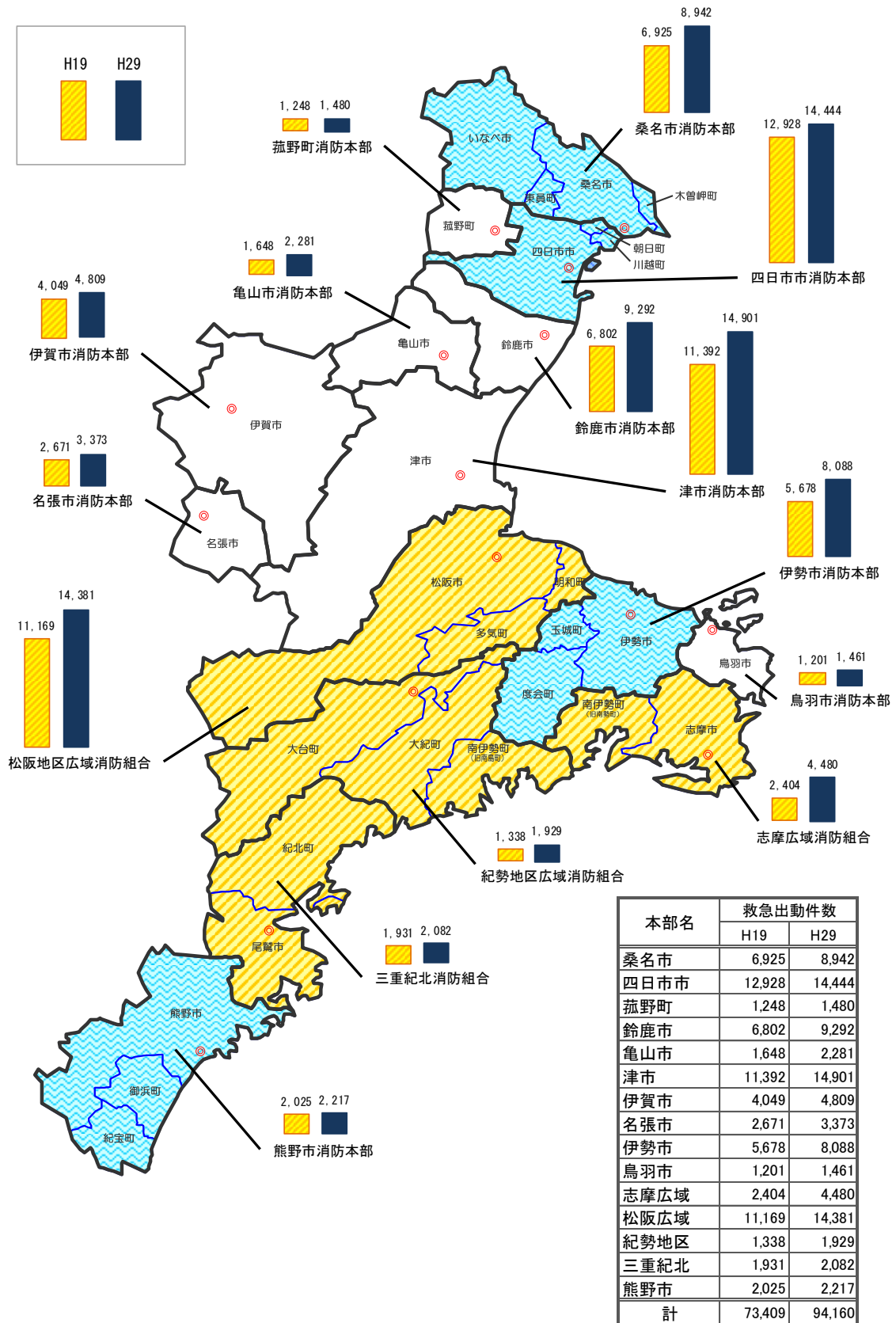
出典：平成19年火災報告、平成29年火災報告

消防本部別救助出動件数 (平成19年と平成29年の比較)



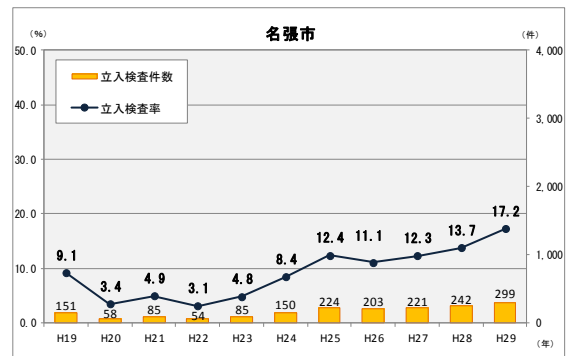
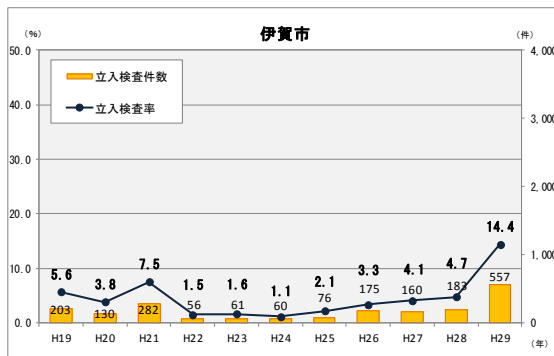
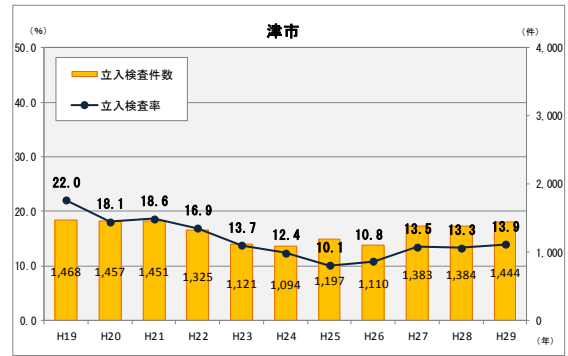
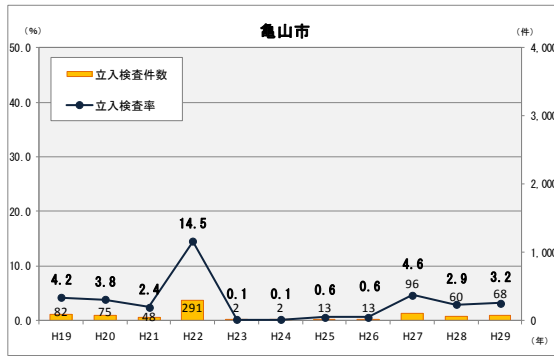
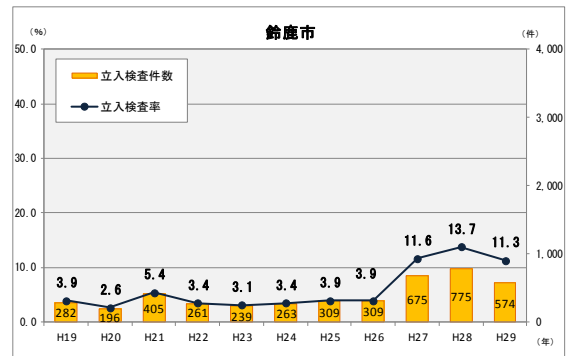
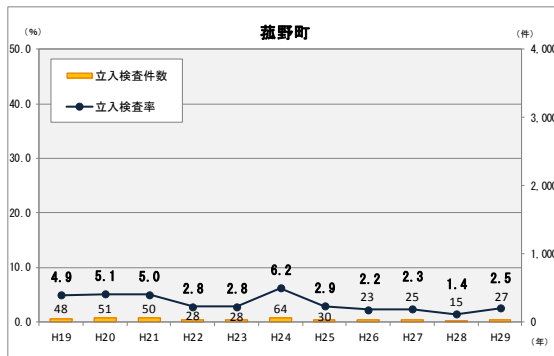
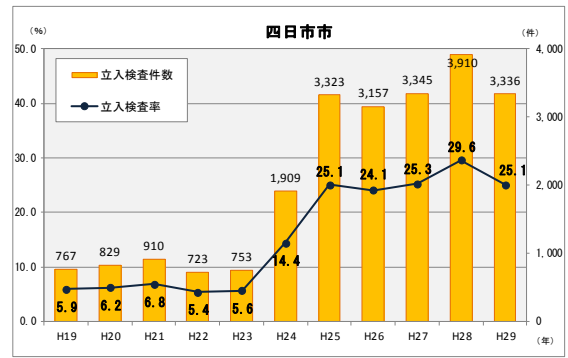
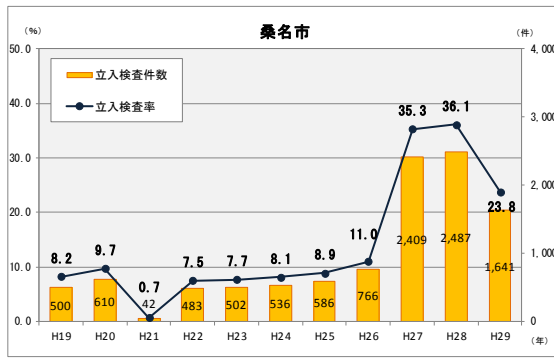
出典：平成19年救助調査、平成29年救助調査

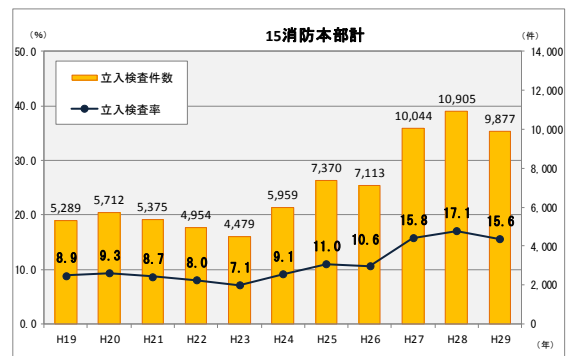
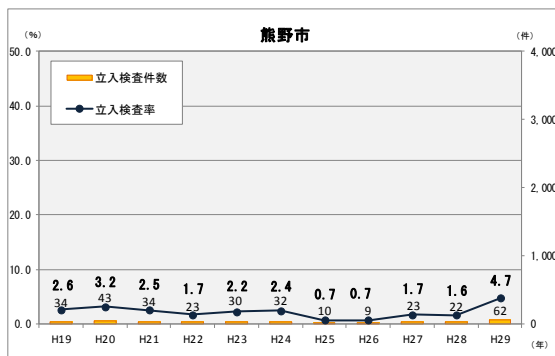
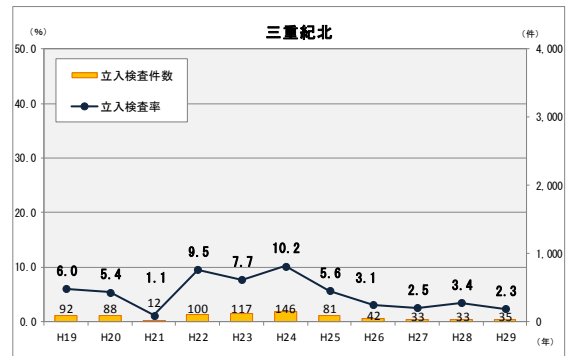
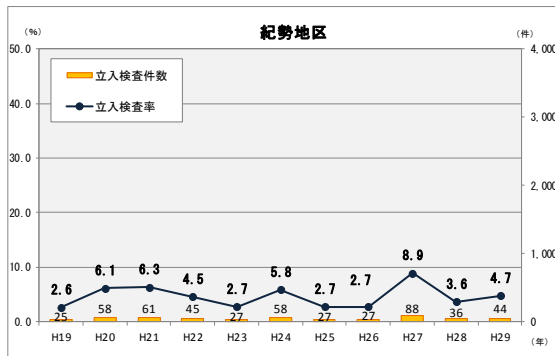
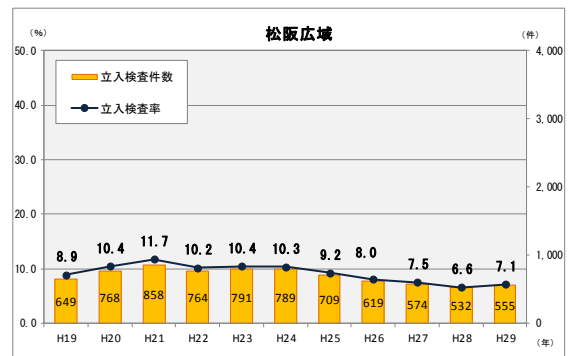
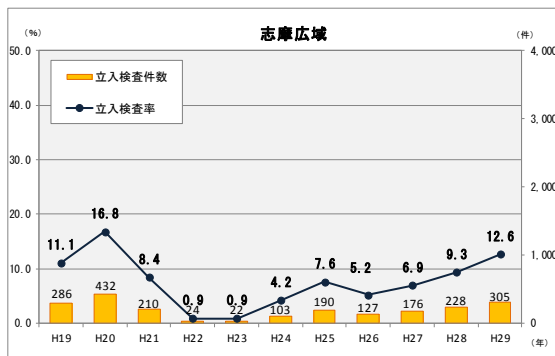
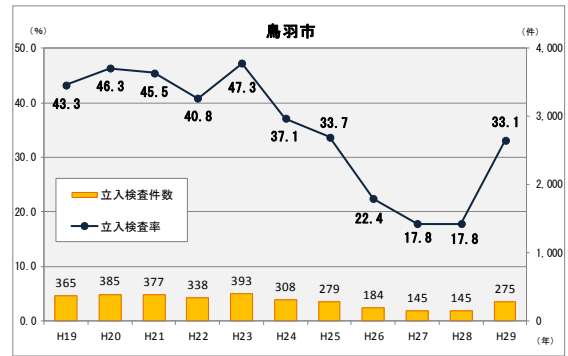
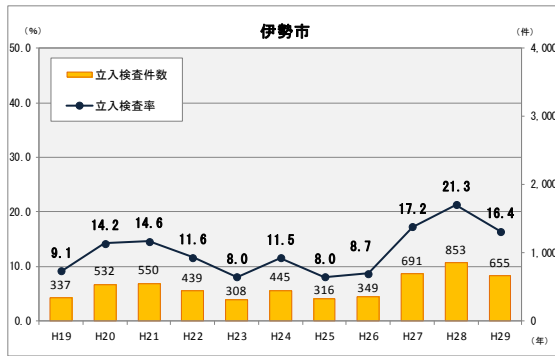
消防本部別救急出動件数 (平成19年と平成29年の比較)



出典：平成19年救急調査、平成29年救急調査

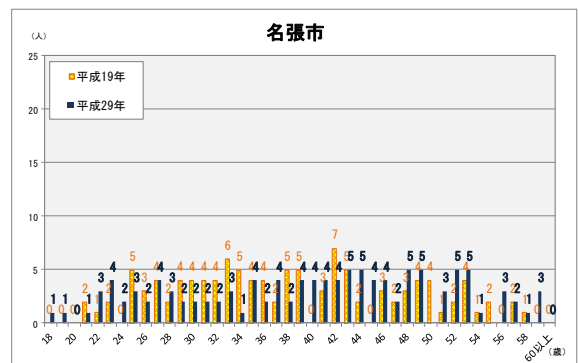
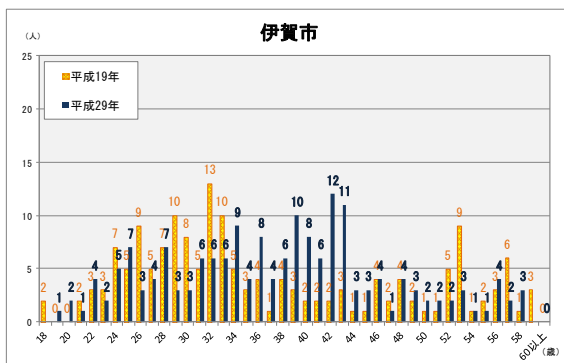
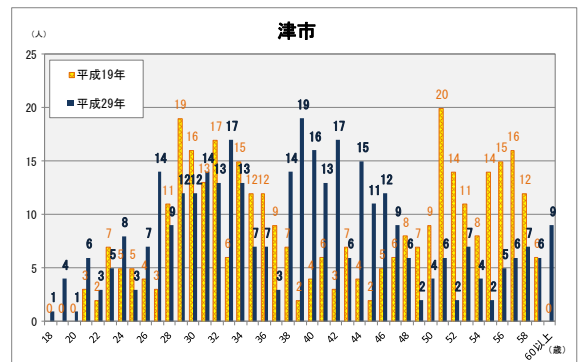
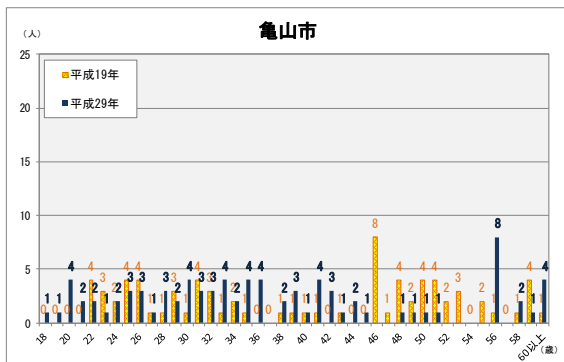
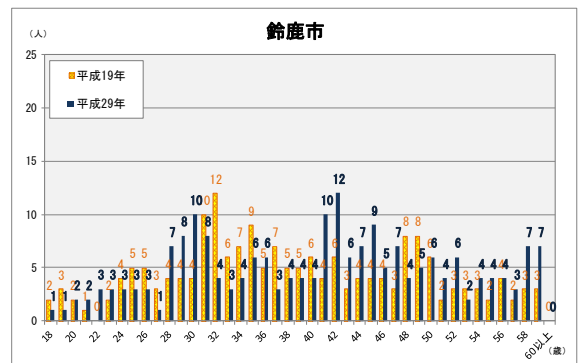
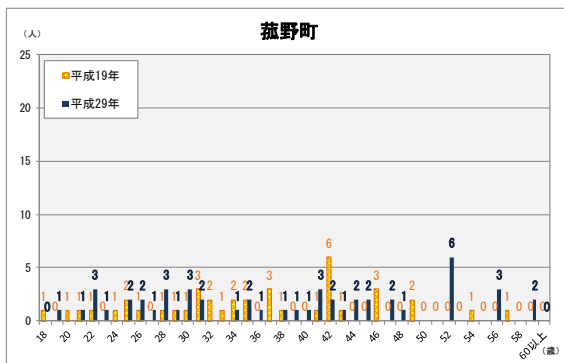
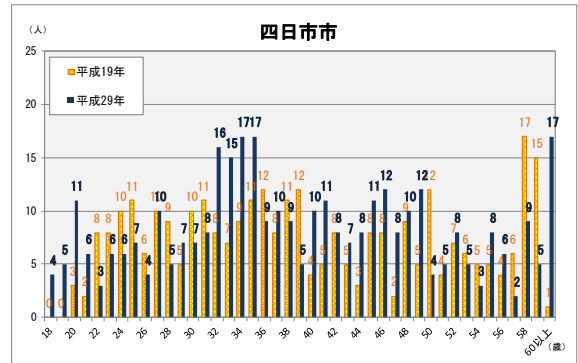
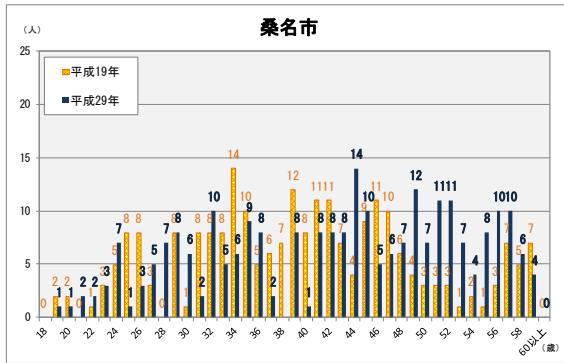
消防本部別立入検査件数及び立入検査率の推移

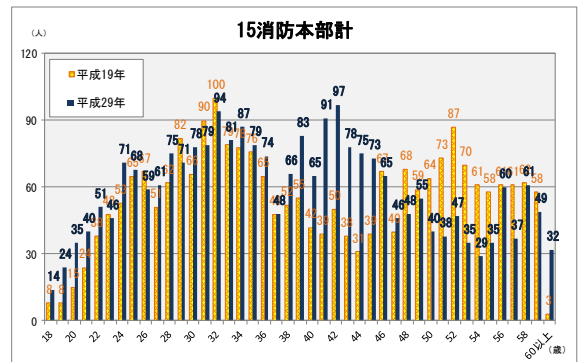
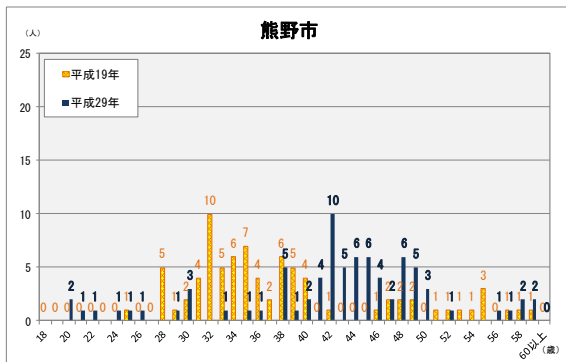
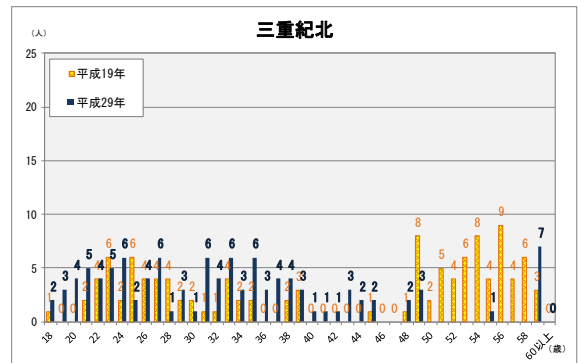
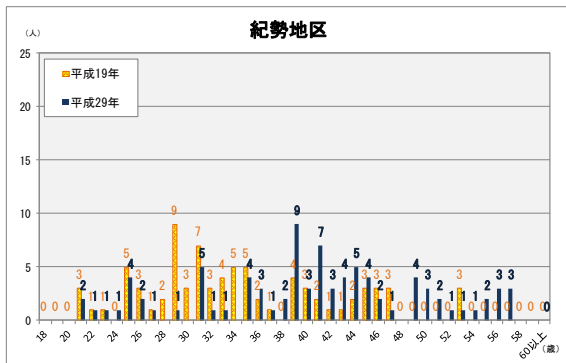
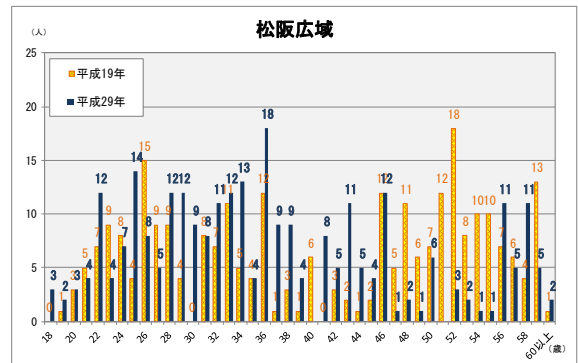
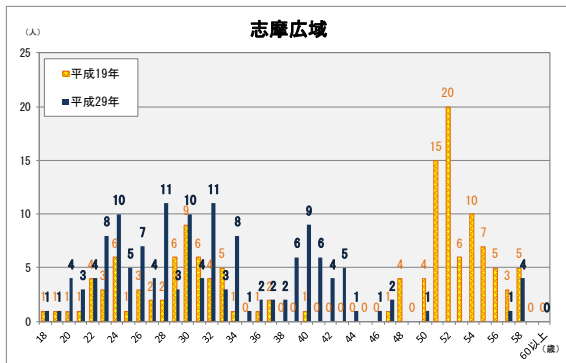
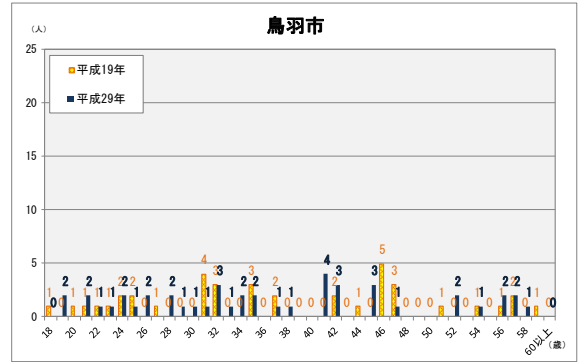
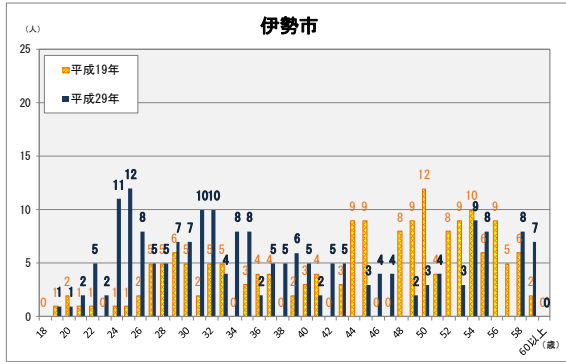




出典：平成19～29年防火対象物実態等調査

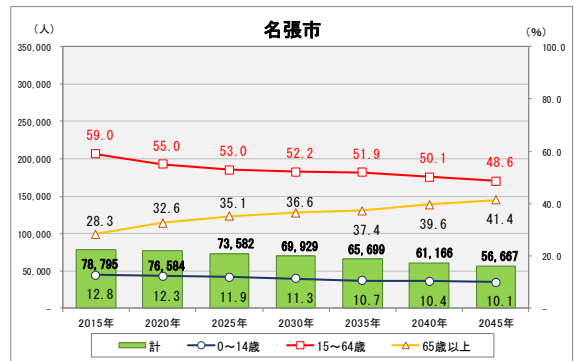
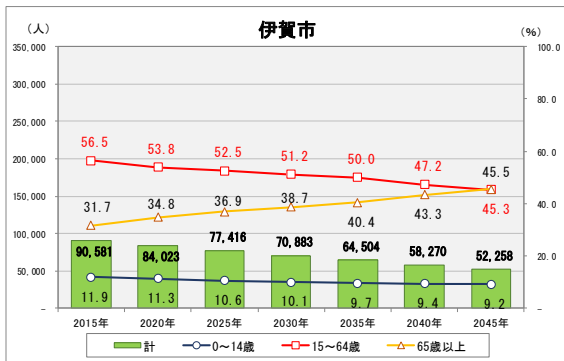
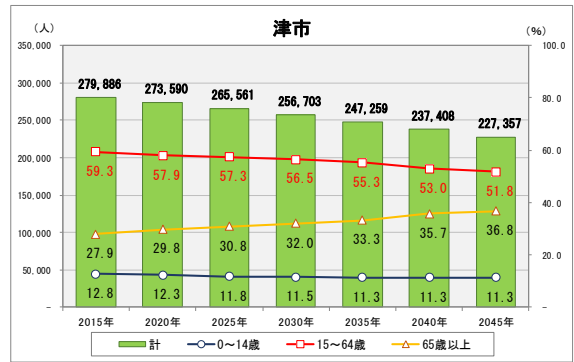
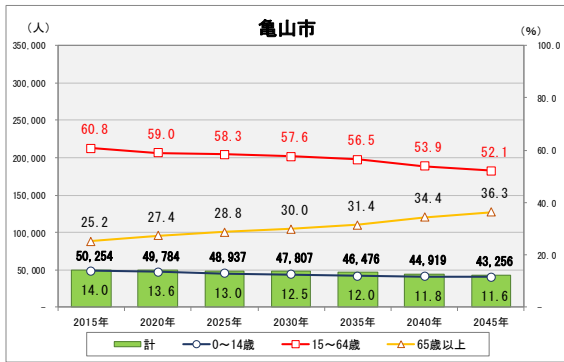
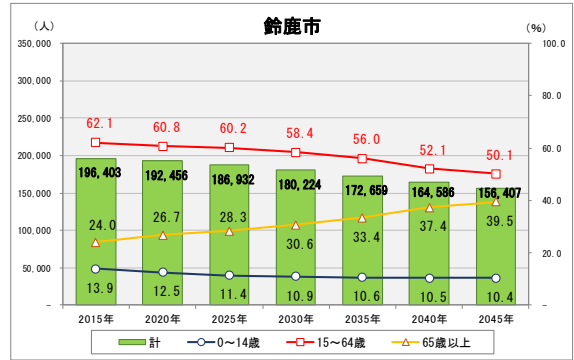
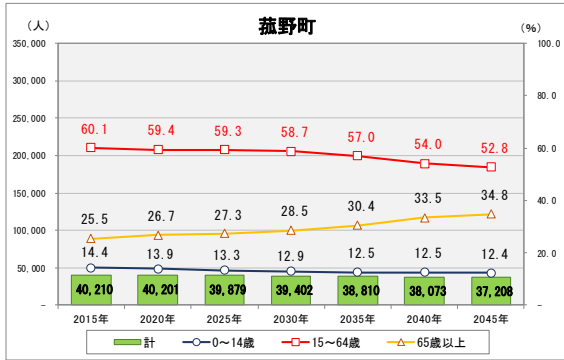
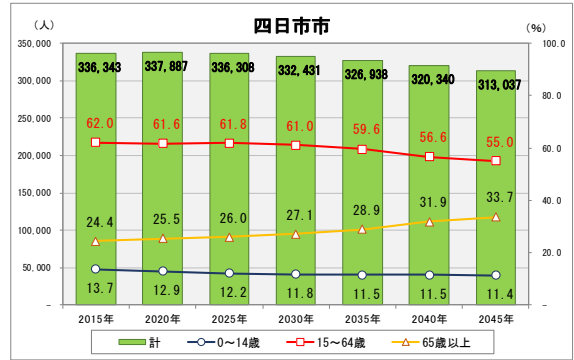
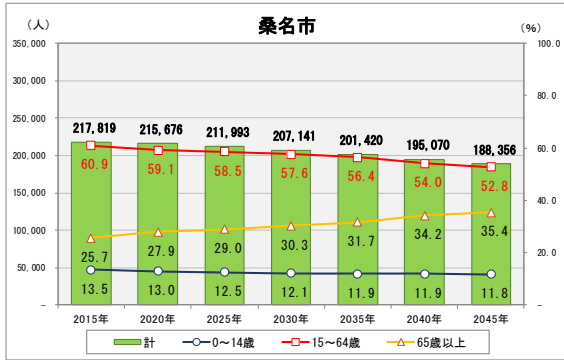
平成19年と平成29年における消防吏員の年齢構成

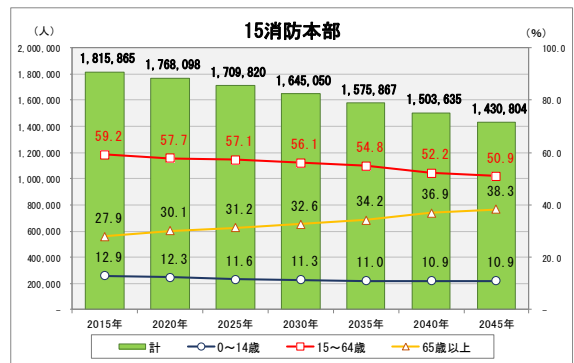
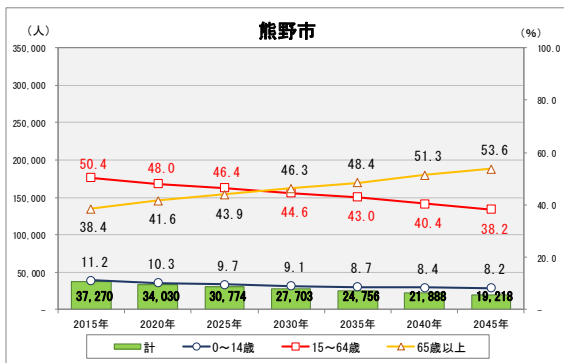
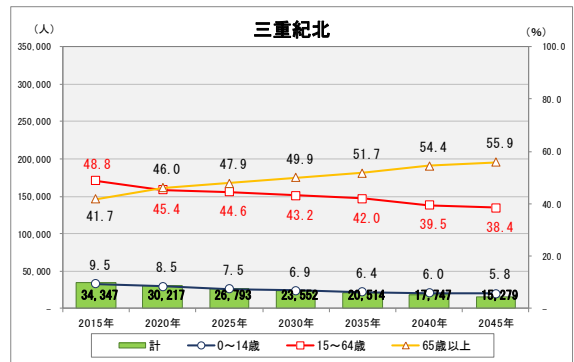
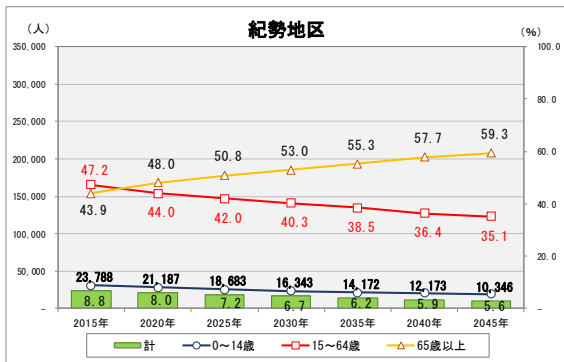
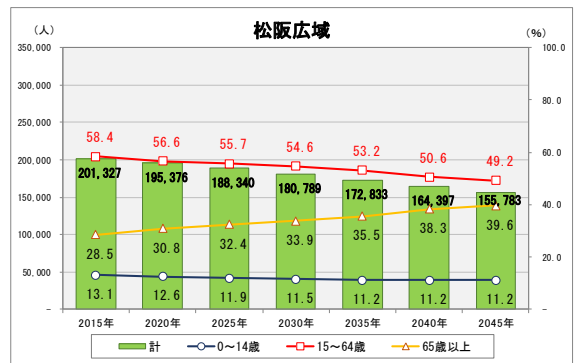
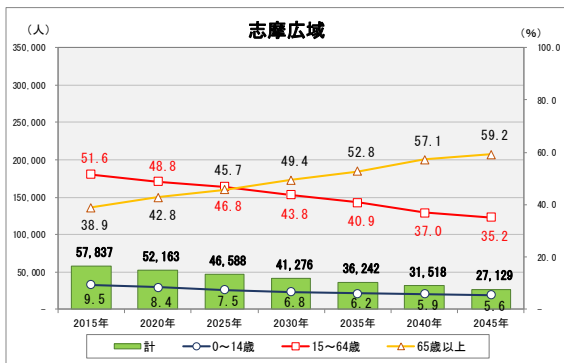
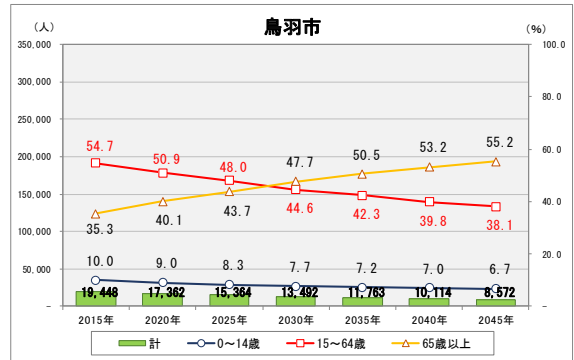
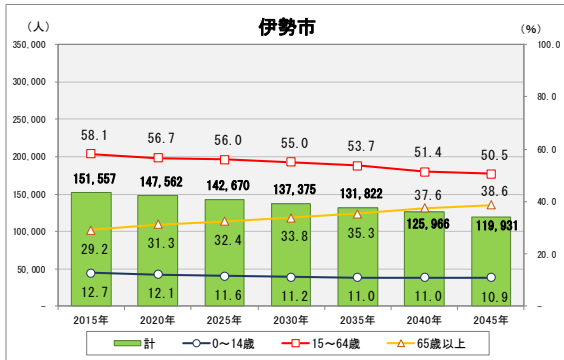




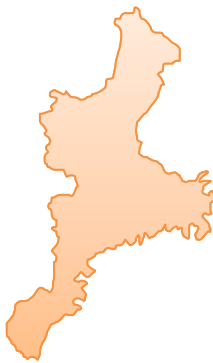
出典：平成19年・29年度消防防災・震災対策現況調査

消防本部別管轄区域における将来推計人口





出典：国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所 将来推計人口



三重県消防広域化及び連携・協力に関する推進計画

平成31(2019)年3月

三重県

(防災対策部消防・保安課)

〒514-8570 三重県津市広明町13番地

Tel : 059-224-2108 Fax : 059-224-3350

E-mail : shobo@pref.mie.jp